

びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部

外部連携研究センター年報 第3号

(2016 年度)

目 次

1.外部連携研究センターによせて

外部連携研究センター長

谷口 浩志・・・ 3

2.研究報告

〔論 文〕

①「小学校算数の教科書の特徴付ける

統計的特性に関するフラクタル的研究」

短期大学部 ライフデザイン学科 教授

長嶺 共全・・・ 8

②「保育者養成校の地域における課題と役割」

教育福祉学部 子ども学科 准教授

榎本 恵理・・・ 12

短期大学部 ライフデザイン学科 講師

杉本 栄子

③「地域社会における学校の役割と教師

－「チーム学校」論とその課題－

教育福祉学部 スポーツ教育学科 准教授

鈴木 敦史・・・ 18

④「演者による音楽表現と聴衆との感じ方」

教育福祉学部 子ども学科 講師

内山 育子・・・ 24

⑤「高齢者の体力に関する研究 ～その2～」

教育福祉学部 スポーツ教育学科 講師

竹内 早耶香・・・ 32

⑥「地域交流事業『イベント企画』における実践よりみえるもの

～東近江市湖東地区光の祭典『コトナリエ』ワークショップ～

教育福祉学部 子ども学科 講師

平居 幸一郎・・・ 38

〔報 告〕

①「幼児の体力・運動能力に関する報告 ～A園を対象として～」

教育福祉学部 子ども学科 准教授 奥田 愛子・・・50

②「少子化対策大学生プロジェクト

『鮎っこ育成イベント』の本学での取り組みと評価」

教育福祉学部 子ども学科 講師 内藤 紀代子・・・54

教育福祉学部 子ども学科 講師 川副 知佐

教育福祉学部 子ども学科 教授 平松 恵子

短期大学部 ライフデザイン学科 講師 杉本 栄子

短期大学部 ライフデザイン学科 教授 溝口 孝子

③「本学の養護教諭課程における小児看護実習の新たな取り組み」

教育福祉学部 子ども学科 講師 内藤 紀代子・・・60

教育福祉学部 子ども学科 教授 平松 恵子

教育福祉学部 子ども学科 非常勤講師 村西 美恵子

短期大学部 ライフデザイン学科 教授 溝口 孝子

④「茶道サークルの地域活動について」

短期大学部 ライフデザイン学科 准教授 片山 弘紀・・・64

⑤「熊本地震災害支援 ～熊本子どもたちへ励まし絵手紙制作～」

短期大学部 ライフデザイン学科 講師 杉本 栄子・・・66

3.事業報告

外部連携研究センター事業 ・・・・72

1. 外部連携研究センターによせて

「外部連携研究センター」年報の発刊によせて

外部連携研究センター長

谷口 浩志

国の政策では、地方分権、三位一体改革、地域主権、地域創生など、地域社会の安定的構築に向けた様々な施策を進めるためのキーワードが踊っていますが、実際の地域、特に人口の減少が急激に進行している地域では、インフラをはじめ生活環境の崩壊を招くほど深刻な問題となりつつあります。

地方の大学もまた、文部科学省の支援を受けて若者の地方への定着を進めるためのプログラムを推進し始めています。

一方で、私立大学には地方振興に対して組織的取り組みが求められ、地域社会をリードする「知の拠点」としての役割を果たすことへの期待が寄せられています。

本学の「建学の精神」に述べられている「地域社会に貢献する人材育成」を活かし、「学生を原動力とした地域社会の発展の核」として「地域社会における生涯学習の場と知的コミュニティの創造」を推進する場であることを目指して当センターは設立されました。

そして、このたび当センターの第2号となる年報を発行する運びとなりました。一年間の活動を通して、地域との結びつきもより深まってきたのではないかと感じているところです。

今、地方自治体はその独自性を生かしてこれからの社会に生きる道を模索しています。私たちはその中核として、若い力の可能性と大学の持つ知見を活かし、社会的環境の変化に対応した、地域の高等教育・研究機関として、行政や産業、文化の振興など多くの場面で協力し合って課題解決にあたる役割を担っています。

地域にとって必要とされる大学、そしてその窓口として地域との連携を深めていくことが、本学の価値となるものだと考えます。

また、当センターの活動は、学生にとって地域との関わりを深め、早い時期から地域社会を認識し、多くの人々と交流することにより、自らの進路や人生設計について、多くの見識が得られるまたとない機会になることでしょう。

これまでも増して、地域社会や地域の企業、諸団体との連携を深めることは本学にとって大きな意味があり、そのために「外部連携研究センター」が果たす役割は大きなものがあると考えます。

地域の方々のご理解を頂きながら、このセンターが長く地域から愛されるよう、また、地域にとってかけがえのないものとなるよう、さらに努力を重ねていく所存です。今後とも地域社会に関わる多くの皆様のご協力をいただけますよう、切にお願い申し上げます。

2. 研 究 報 告

〔論 文〕

小学校算数の教科書の特徴付ける統計的特性に関する フラクタル的研究

Fractal Studies for the Statistical Properties Characterized the Textbooks of the Elementary School Arithmetic

長嶺 共全*

小学校算数の教科書に潜在する統計的特性を研究するため、出版社が製作・販売する教科書に対してフラクタル的研究アプローチを用いる。教科書内に不規則に出現する四則演算記号の出現ページ間隔（2つの最近接四則演算記号間のページ数 Δp ）に注目した。今回の研究方法は、四則演算記号の出現ページ間隔 Δp の出現回数 $n(\Delta p)$ をカウントし、サイズ分布をlog-logプロットし、フラクタル性（ベキ乗則）を研究する。その結果、調査した全教科書における四則演算記号の出現ページ間隔のサイズ分布は、全学年に渡ってきれいなベキ乗則を示すことが分かった。これは、サイズ分布のフラクタル性を示すだけでなく、ベキ乗則が小学校算数の教科書の特徴付ける統計的特性のひとつである可能性を示唆している。また、ベキ乗則から得られたベキ指数 α は、調査したすべての教科書においてほぼ同じ値になることを見出した。

[キーワード：算数，教科書，四則演算記号，ベキ乗則，フラクタル]

1. はじめに

小学校の授業の学習内容や指導方針は、小学校学習指導要領¹⁾に従うため、使用される教科書もそれに従い製作される。従って、すべての教科書が同じ様な構成の学習内容になっていると予想される。しかしながら、多くの出版社が製作する教科書には学習者の学習理解を助けようとする多種多様な工夫や仕組みが盛り込まれており、それぞれの教科書の独自性があると推測される。そこで、本研究では、小学校算数の教科書に注目し、その教科書の独自性が“教科書の特徴付ける統計的特性”の中に現れているかどうかをフラクタル²⁻⁵⁾的に追究する。

小学校算数の授業で使われる教科書で学習する重要な用語・記号の中に“四則演算記号（＋、－、×、÷）”がある¹⁾。現在、小学校の第1学年で加算記号（＋）と減算記号（－）が学ばれ、第2学年で乗算記号（×）が初めて出てきて、第3学年で最後の除算記号（÷）が学習される¹⁾。一般的に、これらの記号は、算数や数学では数式の具体的な計算手順の記述などでよく使われるが、それ以外にも多くの公式や定理、説明図、解説文などにも頻繁に登場し、教科書の内容理解を支援している。このような学習サポートが期待されるため、四則演算記号は学習を捗らせるために最重要項目であると考えられる。今回は、各学年における小学校算数の教科書内において、四則演算記号がどのような

間隔で出てきて、四則演算の内容理解を助けているのかに注目する。

本研究では、出版社（3社）が製作・販売している教科書を取り上げ、それらの教科書内に記述されている四則演算記号の出現ページ間隔を調べ、そのサイズ分布のフラクタル性（ベキ乗則）を研究し、小学校算数の教科書の特徴付ける統計的特性について追究する。

2. 研究方法

今回の研究では、3出版社が製作・販売している小学校算数（第1学年～第6学年）の教科書（平成26年2月検定済）を研究資料とした。ここで、上巻と下巻に分かれている教科書は、上巻の最後（索引ページ）に、目次を除いた下巻をつないでひとつの教科書と見なした。

本研究では、学年ごとの小学校算数の教科書を調べ、そのページ内に四則演算記号が出現した場合、その四則演算記号の出現回数（出現頻度）とそのページ数を記録し、縦軸にその出現頻度を取り、横軸には教科書のページ数を取る。これが、四則演算記号の出現頻度のページ系列データであり、図1(a)に小学校第6学年の算数の授業で使う教科書Aの各ページに出てくる四則演算記号の出現頻度のページ系列データを示す。そして、今回は、四則演算記号が出現する隣り合う

2つの最近接ページ数の差を四則演算記号の出現ページ間隔 Δp と定義し、その出現ページ間隔 Δp がどのような頻度で出てくるのかに注目しているので、その Δp を縦軸に取り、横軸には四則演算記号が見つかる（出現ページ間隔が発生する）と1ずつ増加する“出現ページ間隔番号”を取って、四則演算記号の出現ページ間隔分布を作成する。図1(b)は、図1(a)のページ系列データから作り出された四則演算記号の出現ページ間隔分布である。この間隔分布を用いて、四則演算記号の出現ページ間隔 Δp の出現回数 $n(\Delta p)$ をカウントし、それを縦軸に取り、横軸には Δp を取った $\log - \log$ プロット（サイズ分布）を作成し、そのフラクタル性（ベキ乗則）を観測する。更に、そのベキ乗則が示す直線の傾きを求め、それがベキ指数 α と呼ばれ、次式によって定義されることがよく知られている²⁻⁵⁾。

$$n(\Delta p) \sim \Delta p^{-\alpha} \quad (1)$$

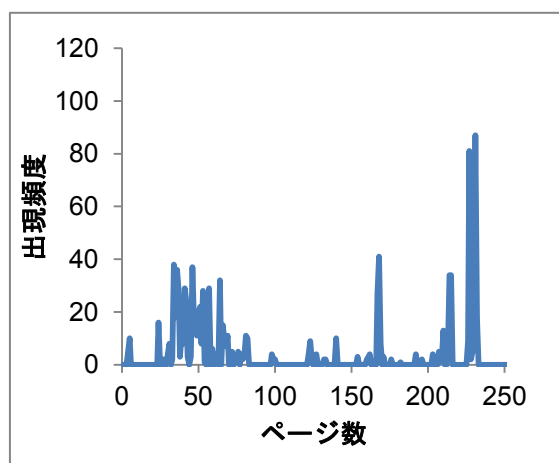
本研究では、学年ごとの小学校算数の教科書の各ページ内に出現した四則演算記号の出現ページ間隔のサイズ分布のフラクタル性（ベキ乗則）を研究し、小学校算数の教科書に潜在する統計的特性をフラクタル的に追究する。また、その出現ページ間隔のサイズ分布から求められるベキ指数 α を式(1)により計算し、それが小学校算数の教科書の特徴付ける統計的指標になる可能性についても考察する。

3. 研究結果

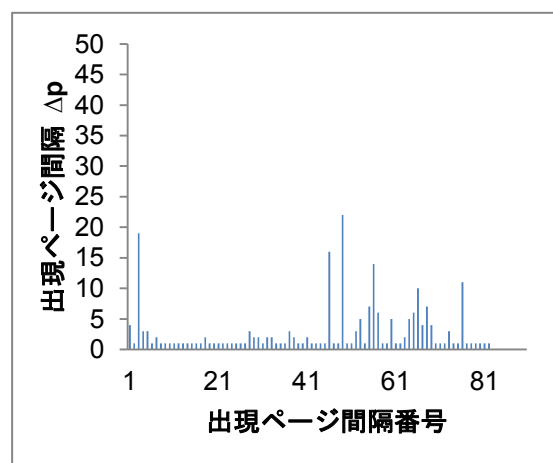
図1(a)より小学校第6学年の算数で使われる教科書A全体に渡って広範囲に四則演算記号は出現しているが、図1(b)よりその出現ページ間隔 Δp の最大値は20前後に止まっていることが読み取れる。

次に、図1(b)の四則演算記号の出現ページ間隔分布より作られる出現ページ間隔のサイズ分布を図2に示す。図2は、教科書Aの実測結果であり、小学校の第1学年は菱形（◆）、第2学年は四角（■）、第3学年は三角（▲）でプロットされ、第4学年はバツ印（×）、第5学年はアスタリスク（*）、第6学年は丸型（●）でプロットされている。その横軸は教科書内の四則演算記号の出現ページ間隔 Δp であり、縦軸はその出現ページ間隔 Δp の出現回数 $n(\Delta p)$ である。この結果を見ると、教科書A内に出てくる四則演算記号の出現ページ間隔 Δp のサイズ分布は、全学年に渡って Δp の低領域できれいな直線性が見出せた。また、図2に描かれた直線の傾きは、式(1)よりベキ指数 $\alpha = 2.52$ を示す。

教科書Bと教科書Cについても、これと同様の解析をした結果を図3及び図4に示す。図3と図4は、教科書Bと教科書Cのそれぞれの結果を図2と同じプロット形式で示している。これらの結果を見ると、両教科書（教科書Bと教科書C）の全学年における四則演算記号の出現ページ間隔のサイズ分布は、 Δp の低領域できれいな直線性が見出せた。また、図3と図4に描かれている直線の傾きは、式(1)より各教科書のサイズ分布のベキ指数 α であり、教科書Bの結果が $\alpha = 2.41$ で、教科書Cの結果が $\alpha = 2.62$ であった。



(a) 四則演算記号の出現頻度のページ系列データ



(b) 四則演算記号の出現ページ間隔分布

図1 小学校第6学年の算数の教科書Aに出てくる四則演算記号の出現頻度のページ系列データとその出現ページ間隔分布。(a)の横軸には教科書のページ数を取り、縦軸には教科書の各ページに出現した四則演算記号の出現頻度を取っている。(b)の横軸は四則演算記号が見つかる（出現ページ間隔が発生する）と1ずつ増加する“出現ページ間隔番号”、縦軸は教科書内の四則演算記号の出現ページ間隔 Δp である。

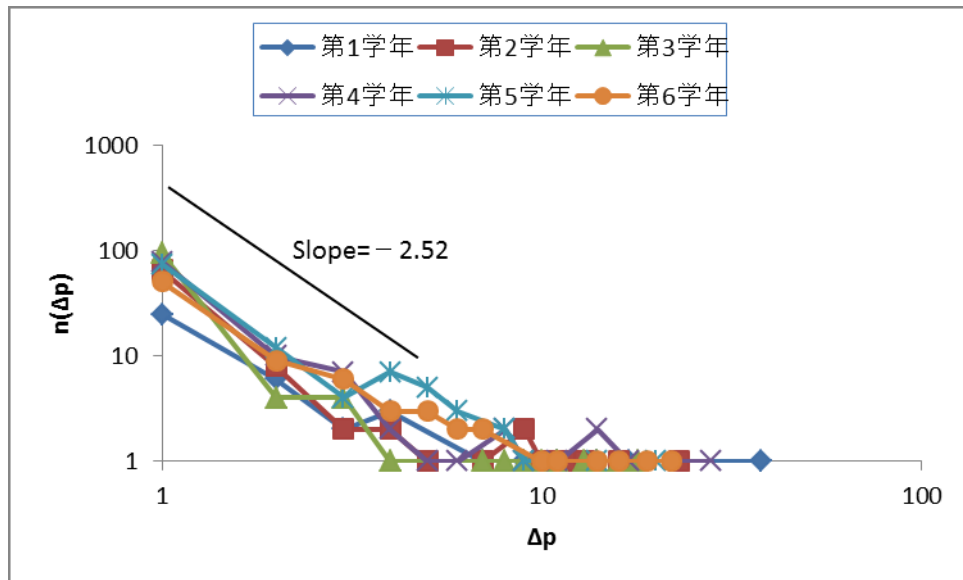


図2 小学校算数の教科書Aに出てくる四則演算記号の出現ページ間隔のサイズ分布。横軸は教科書内の四則演算記号の出現ページ間隔 Δp で、縦軸は出現ページ間隔 Δp の出現回数 $n(\Delta p)$ である。小学校の第1学年の結果は菱形プロット(◆)、第2学年は四角プロット(■)、第3学年は三角プロット(▲)、第4学年はバツ印プロット(×)、第5学年はアスタリスクプロット(*), 第6学年は丸プロット(●)で示されている。ここで、図中に描かれた直線の傾きがベキ指数 α を示し、その値は $\alpha=2.52$ である。

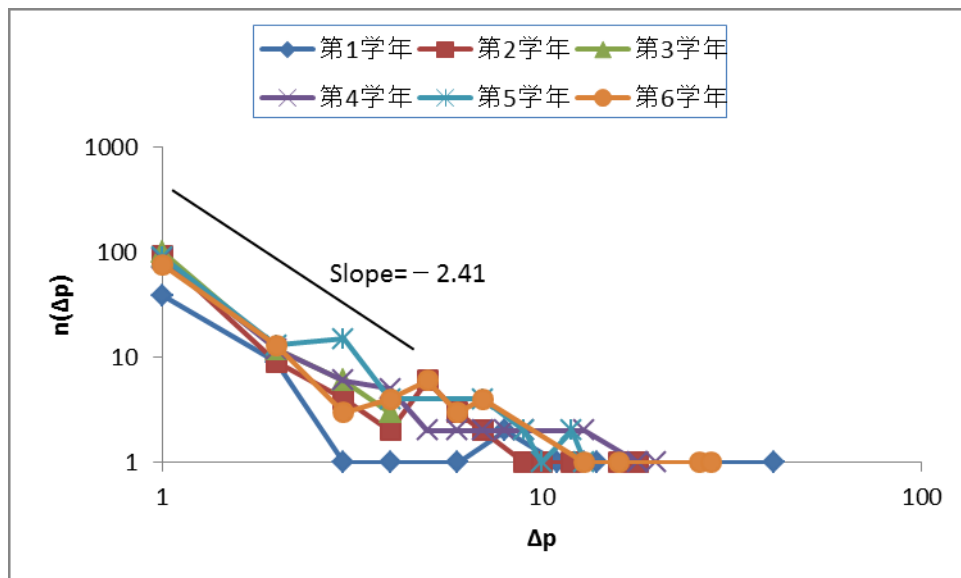


図3 小学校算数の教科書Bに出てくる四則演算記号の出現ページ間隔のサイズ分布。同図の横軸と縦軸、プロット形式は、図2と同じである。ここで、図中に描かれた直線の傾きがベキ指数 α を示し、その値は $\alpha=2.41$ である。

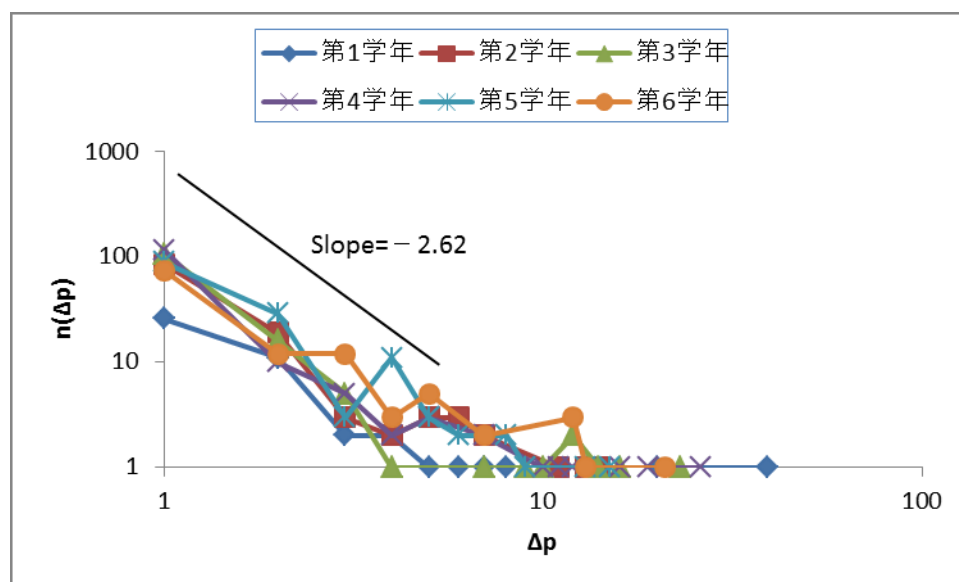


図4 小学校算数の教科書Cに出てくる四則演算記号の出現ページ間隔のサイズ分布。同図の横軸と縦軸、プロット形式は、図2と同じである。ここで、図中に描かれた直線の傾きがベキ指数 α を示し、その値は $\alpha=2.62$ である。

4. 考察

今回の研究結果より、小学校算数の教科書内で使われる四則演算記号の出現ページ間隔 Δp のサイズ分布は、3教科書の全学年において、 Δp の低領域できれいなベキ乗則を示すことが発見された。これは、ベキ乗則が小学校算数の教科書の特徴付ける統計的特性のひとつである可能性を示すとともに、そのサイズ分布における Δp の低領域に属する四則演算記号の出現ページ間隔が統計的に自己相似な性質を持って出現してきていることを意味する。その自己相似性とは、全体図の一部を取り出しても等方的に拡大するとそれが全体図と同じような形を示すという入れ子的構造を示す性質のことである。なお、この出現ページ間隔の自己相似の要因については、今後の研究課題であると考えている。

また、今回の研究結果より、各教科書から得られる四則演算記号の出現ページ間隔のサイズ分布を特徴付けるベキ指数 α は、教科書Aが $\alpha=2.52$ 、教科書Bが $\alpha=2.41$ 、教科書Cが $\alpha=2.62$ であり、3教科書とも比較的近い値を示した。これは、3教科書が同じ小学校学習指導要領の算術的活動をもとに作られていることが一要因であると考えられる。また、今回研究した3教科書がほぼ同じベキ指数 α を有するベキ乗則を示すことから、今回の研究アプローチでは、小学校算数の教科書の独自性が“教科書の特徴付ける統計的特性”の中にあまり見出せなかったと推考する。従って、今回得られたベキ指数 α は、教科書の独自性からあまり影響を受けない、小学校学習指導要領の算術的活動

を反映した教科書の特徴付ける統計的指標のひとつである可能性を示していると考察する。

将来的には、他出版社から出ているすべての教科書算数に対して同様の調査研究を実施し、今回の研究成果の信頼性を高めていきたいと考えている。

参考文献

- 1) 文部科学省：『小学校学習指導要領』（東京書籍，2009）。
- 2) B.B. Mandelbrot：The Fractal Geometry of Nature (Freeman, San Francisco, 1982)；
広中平祐監訳：『フラクタル幾何学』（日経サイエンス社，1984）。
- 3) 高安秀樹：『フラクタル』（朝倉書店，1986）。
- 4) T. Vicsek：Fractal Growth Phenomena (World Scientific Publishing Co., Singapore, 1989)；
宮島佐介訳：『フラクタル成長現象』（朝倉書店，1990）。
- 5) 松下貢：『医学・生物学におけるフラクタル』（朝倉書店，1992）。

保育者養成校の地域における課題と役割

榎本恵理*・杉本栄子**

保育や幼児教育を取り巻く社会的な変化に伴い、保育者に求められる資質も変化してきている。子どもをめぐる様々な課題が噴出する中で社会的動向を理解し、特別支援や保護者支援等についても学ぶとともに、各機関をはじめとした地域社会との緊密な連携がより求められている。本稿では、これら地域社会で働く保育者たちへ質問紙調査を行い、それを通じて地域の保育者たちがどのような状態にあり、また実習生に何を望んでいるかを調査し考察した。保育者の現状把握を行うとともに、今後の保育者養成校としての本学の課題と役割について展望したい。

〔キーワード：地域連携，保育者の意識，保育者養成校，実習生に望むこと〕

1. はじめに

保育士不足が社会的問題となり、保育所の確保や保育士の資質の充実が求められている。また、保育や幼児教育を取り巻く社会的な変化に伴い、保育者に求められる資質も変化してきている。子どもをめぐる様々な課題が噴出する中で社会的動向を理解し、特別支援や保護者支援等についても学ぶとともに、各機関をはじめとした地域社会との緊密な連携がより求められている。

これまで、「現場で求められる幼児教育職務実践力とは」（秋山、2011）や「保育者養成校に求められる学生の資質について」（林・森本・東村、2014）など、保育者の資質能力や、保育者養成校としての役割についての研究は多くなされてきた。保育者養成機関である本学においても、地域の要望をくみ取りながら、地域との連携をいかに構築していくかが課題であると考え。本学の学生が実習でお世話になる実習先は主に地域の保育所、幼稚園である。

本稿では、これら地域社会で働く保育者たちへ質問紙調査を行い、それを通じて地域の保育者たちがどのような状態にあり、また実習生に何を望んでいるかを調査し考察することを目的とする（質問紙調査に協力して頂いた保育者の勤務先は、本学の学生が実習先としてお世話になっている保育所や幼稚園も多い）。保育者の現状把握を行うとともに、今後の保育者養成校としての本学の課題について展望したい。

2. 目的

平成28年度に現役の保育士・幼稚園教諭に対し、質問紙調査を行った。先行研究の質問紙調査をもとに、報告者らが考案したものを加えた。質問紙の調査項目は、社会人一般に求められると考えられる「取り組みの姿勢」「社会生活」「協調性（コミュニケーション）」の3分野に加え、保育者としての資質に関わる「保育者として」と「保育の内容（5領域）について」の2分野を加えた5分野に分け、それぞれについて7項目、計35項目の質問を作成した（表1）。これらの項目については、先行研究で実施された質問紙をもとに、長年の保育現場の経験者に保育者に必要と思われる資質について質問を熟考してもらい項目とした。回答は「4.十分にできている」、「3.ある程度できている」、「2.少しはできている」、「1.ほとんどできていない」の4件法である。また、自由記述として、「教育実習の受け入れ側として、実習生に望むこと」の欄を設けた。それらを現場の保育者たちに行い、その現状を探ると同時に、保育者養成校としての今後の教育につなげていくことを目的とした。

3. 方法

調査対象と時期：平成28年度の教員免許更新講習と特例講座の受講生に対し6月と8月に行い、30代～50代の92名から解答を得た。

調査対象と回答の属性：内訳は以下のとおりである。30代の保育士30名、同じく幼稚園教諭7名、40代の保育士21名、同じく幼稚園教諭11名、50代の保育士15名、同じく幼稚園教諭8名の計92名である。

* 教育福祉学部 子ども学科 准教授

** 短期大学部 ライフデザイン学科 講師

表1 保育に関するアンケート

○取り組みの姿勢
1. 失敗や反省を次に活かそうとする
2. あきらめずに常に持続して取り組もうとする
3. 謙虚さをもって物事に取り組もうとする
4. 自分の仕事や行為についての責任を果たす
5. 好奇心や探究心をもち、物事にかかわる
6. 自分を客観的に見つめ、自己評価を行う
7. 自分自身の目標をもつ
○社会生活
8. 言葉遣いやマナーに配慮して行動する
9. 時間や期限を守る
10. 報告・連絡・相談をする
11. 相手を理解し円滑に物事を進める
12. 自分の意見を適切に表現して発言する
13. 社会情勢に関心をもち知識を広げようとする
14. 周囲に対し気持ちよく挨拶ができる
○保育者として
15. 子どもの成長に喜びを感じる
16. 子どもに安心感を与えるような対応をする
17. 常に笑顔を絶やさない
18. 自分自身の自然体験や生活体験を保育（教育）に活かす
19. 状況に応じ適切な態度で保育ができる
20. 子どもや保護者に明るく元気にかかわる
21. 子どもや保護者に誠実にかかわる
○協調性(コミュニケーション)
22. チームワークを大事にする
23. 子どもと接すると自然と笑顔になれる
24. 同僚と適切なコミュニケーションをとる
25. 相手の意見や気持ちを理解しようとしている
26. 人の意見に耳を傾ける
27. 周りの状況に気を配りながら行動する
28. 周囲から信頼される
○保育の内容(5領域)について
29. 音楽が流れると自然と体が動く
30. 空に浮かぶ雲から色々連想する
31. 自然に触れる機会を多く持つ
32. 絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている
33. 絵本の読み語りが上手にできる
34. 体を動かす心地よさを意識している
35. 子どもたちの仲間づくりを援助できる

4. 結果

はじめに、5分野35項目の質問についての結果を述べる。30代の保育士に関しては、「保育者として」の分野で、高得点が得られた項目が多かった。「子供の成長に喜びを感じる」(A=3.83、以下「A=」を略)「子どもや保護者に明るく元気にかかわる」(3.60)「子どもや保護者に誠実にかかわる」(3.57)で高得点が得られた。「協調性(コミュニケーション)」の分野では、「子どもと接すると自然と笑顔になれる」(3.73)の項目で高得点となった。一方、低得点は「取り組みの姿勢」の分野の「自分を客観的に見つめ、自己評価を行う」項目で、「少しはできている」と答えた者が半数近くおり、得点が低かった(2.60)。また「社会生活」の分野で、「自分の意見を適切に表現して発言する」(2.67)「社会情勢に関心をもち、知識を広げようとする」(2.53)の項目が低得点となり、「十分にできている」者が少数で、「ほとんどできていない」と答えた者も数名いる結果となった。「協調性」分野でも「周囲から信頼されている」(2.66)の項目では「十分にできている」と答えた者はおらず、「少しはできている」とどまった者が3分の1であった。「保育の内容(5領域)について」の分野では、他の分野よりも全体的に得点が低く、際立ったのが「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」の項目で、「十分にできている」と答えたものはおらず、「ある程度できている」が3分の1弱、「少しはできている」「ほとんどできていない」という回答が3分の2を上回る結果となった(2.50)。

30代の幼稚園教諭に関しては、30代保育士と似たような結果となった。得点が高かったのは「保育者として」分野の「子どもの成長に喜びを感じる」項目(4.00)で、全員が満点を選ぶ結果となった。一方、得点が低かった項目としては、「社会生活」の分野の「社会情勢に関心を持ち、知識を広げようとする」(2.57)である。また、「協調性」分野の「周囲から信頼されている」(2.43)「保育の内容(5領域)について」の「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」の項目では「十分にできている」と答えたものはおらず、大多数の者が「少しはできている」という評価でいずれも低得点であった(2.14)。

次に、40代の保育士に関してだが、高得点だったのが「保育者として」の分野の「子どもの成長に喜びを感じる」項目(3.90)と、「社会生活」分野の「周囲に対し気持ちよく挨拶ができる」項目(3.71)、「協調性」分野の「子どもと接すると自然と笑顔になれる」項目(3.71)であった。一方、「取り組みの姿勢」の分野の「自分を客観的に見つめ、自己評価を行う」項目は「少しはできている」と答えた者が半数近くおり、得点が低かった(2.71)。自己評価ができていない、PDCAサイクルがうまく機能していない様子が垣間見られた。また、「社会生活」の分野でも「自分一人で悩ま

ず、報告・連絡・相談をする」項目(3.14)で少数ながら「ほとんどできていない」があり、「社会情勢に関心をもち、知識を広げようとする」(2.52)、「自分の意見を適切に表現して発言する」項目(2.57)も低得点であった。社会情勢については、半数が無関心という結果になった。「協調性」に関しては、「周囲から信頼されている」項目がやや低く(2.67)、信頼されるよう努力することが求められるところである。さらに、「保育の内容(5領域)について」は「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」の項目で、「少しはできている」「ほとんどできていない」が約半数を占め低得点となった(2.48)。40代という、レパートリーを増やし、後輩に指導してほしい年代であるが、自分自身が「ほとんどできていない」状態であるとそれは望めない現状が浮かび上がった。

40代の幼稚園教諭について、高得点だったのは「保育者として」分野の「子どもの成長に喜びを感じる」(3.73)、「子どもや保護者に明るく元氣にかかわる」(3.73)、さらに「協調性」分野の「同僚と適切なコミュニケーションをとる」(3.73)であった。注目されるのは、「取り組みの姿勢」の分野では「好奇心や探究心をもち、物事にかかわる」(2.73)「自分自身の目標をもつ」(2.82)「自分を客観的に見つめ、自己評価を行う」(2.91)の項目で、「少しはできている」を選んだ者が少なからず存在したことである。取り組む姿勢が気になる。さらに「保育の内容(5領域)」について、「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」(2.55)と並び「自然に触れる機会を多く持つ」(2.55)が全項目の中でも一番低い得点だった。

次に50代の保育士に関しては、高得点となったのは「取り組みの姿勢」分野の「自分の仕事や行為についての責任を果たす」(3.8)、「保育者として」分野の「子どもの成長に喜びを感じる」(3.8)、「子どもや保護者に誠実にかかわる」(3.8)の3項目であった。一番得点が低かったのは「保育の内容(5領域)について」の「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」(2.27)であり、続いて「社会生活」分野の「自分の意見を適切に表現して発言する」(2.47)、「社会情勢に関心をもち、知識を広げようとする」(2.6)、さらに「協調性」分野の「周囲から信頼される」(2.67)の順となった。ここで「周囲から信頼される」項目の得点が低かったことが注目される。

50代の幼稚園教諭に関して高得点となったのは、「保育者として」の分野の「子どもの成長に喜びを感じる」項目(3.88)と、「協調性」分野の「子どもと接すると自然と笑顔になれる」の項目(3.75)であった。ほとんどの項目で平均値が3点を超える中、3点以下となったのは、「取り組みの姿勢」分野の「あきらめずに常に持続して取り組もうとする」項目(2.88)と、「社会生活」分野の「社会情勢に関心をもち、知識を広げようとする」(2.88)、さらに「保育の内

容(5領域)について」分野の「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」(2.88)の項目の3項目であった。

この結果、すべての年代・種別で高得点を得たのが項目15の「子どもの成長に喜びを感じる」であり、すべての年代・種別で低得点だったのが項目32の「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」となった。

表2 平均値の高い項目と低い項目

年代 種別	順位	高		順位	低	
		項目	得点		項目	得点
30代 保育士	1	15	3.83	1	32	2.50
	2	23	3.73	2	13	2.53
	3	14	3.67	3	6	2.60
30代 幼稚園	1	15	4.00	1	32	2.14
	2	4, 23	3.57	2	28	2.43
	2	25, 26	3.57	3	13	2.57
40代 保育士	1	15	3.90	1	32	2.48
	2	23	3.71	2	13	2.52
	3	9	3.57	3	12	2.37
40代 幼稚園	1	15	3.73	1	31	2.55
	1	20	3.73	1	32	2.55
	1	24	3.73	3	13	2.64
50代 保育士	1	4	3.80	1	32	2.27
	1	15	3.80	2	12	2.47
	1	22	3.80	3	13	2.60
50代 幼稚園	1	15	3.88	1	2	2.88
	2	23	3.75	1	12	2.88
	3	17	3.63	1	32	2.88

次に「実習の受け入れ側として実習生に望むこと」の結果を述べる。すべての年代で「積極性」を挙げた人が一番多かった。さらに多くの人が挙げた項目としては「挨拶をする」、「明るさ、元氣さ、笑顔」、「子どもと一緒に遊ぶ」、「意欲」の順となった。また30代の多くが「意欲を見せてほしい」と回答し、50代の多くが「礼儀や身だしなみ」と回答しているのが際立った。少数意見として、「チャレンジ精神」「感謝の気持ち」「事前準備」「保育現場で働きたいという気持ち」「自分の考えをしっかりと持つ」「指導計画の書き方」「熱意をもつてのぞむ」「前向きな姿勢」「常識」「聞く姿勢」「返事をしっかりとしてほしい」等があがった。これらの項目を「取り組みの姿勢」、「保育者としての意識・姿勢」、「社会人として必要なこと」「保育者に必要な技術・知識」のカテゴリーに分類した。その際、先行研究(林・森本・東村、2012)を参考にした。

表3 「実習の受け入れ側として実習生に望むこと」
(自由記述、N=92)

カテゴリー	キーワード	
	数	おもなものの*0内は回答数
取り組みの姿勢	80	・積極性(38) ・意欲(22) ・指示待ちでなく自ら動く(7) ・人の話を素直に聞く(6) ・自ら進んで聞く(3) ・何事にもチャレンジする(2) ・自分の考えをしっかりと持つ(1) ・感謝の気持ちを持つ(1)
保育者としての意識・姿勢	56	・明るさ、元気さ、笑顔(26) ・子どもと一緒に遊ぶ(23) ・何を学びたいのか考えてくる(4) ・やりたい保育内容を考えておく(1) ・保育の仕事を理解しておく(1) ・事前の下調べをしておく(1)
社会人として必要なこと	54	・挨拶(30) ・マナー、礼儀作法(11) ・はっきり話す(4) ・返事をしっかりする(3) ・常識(2) ・コミュニケーション能力(2) ・時間厳守(1) ・ハウ・レン・ソウを大切に(1)
保育者に必要な技術・知識	17	・日誌の書き方(7) ・教材研究、ピアノ、手遊び、絵本読み語り(4) ・指導案の書き方(3) ・指導計画の書き方(2) ・特技をもつ(1)

5. 考察と課題

子育てをめぐる現状と課題に関しては、昨年の保育所に落ちた女性によるSNSへの投稿をきっかけにして社会問題化し、政府もようやく重い腰をあげ、対策に乗り出している。しかし子育て支援の質・量ともに不足しているのが現状である、そのような時代状況の中で、質の高い保育者養成が求められている。

本調査から、保育現場の保育者たちが、何を大切に思い保育しているのか、またどのようなことに対し課題を抱えているのかが垣間見えた。この調査により、本学が今後ど

のような保育者養成をめざすのかについても多くの示唆が得られた。

まず、すべての世代・種別(保育園、幼稚園)に共通している点から考察する。高得点だったのは、「子どもの成長に喜びを感じる」項目であった。30代幼稚園教諭においてはすべての保育者が満点の「十分にできている」と回答した。また、「子どもと接すると自然と笑顔になれる」という項目も、各世代・種別で高得点となった。これら2つの項目は保育者として必須の項目と考えられる。

そのほか、総じて得点が高かったのは、「常に笑顔を絶やさない」の項目のある「保育者として」の分野、また「チームワークを大事にする」「同僚と適切なコミュニケーションをとる」項目のある「協調性」の分野であった。特に「笑顔を絶やさない」の項目は、後の「実習生に望むこと」の中で多くの保育者が記述した「明るさ、元気さ、笑顔」に通じており、多くの保育者が重要であると考え、実践もしていることが読み取れた。

一方、すべての世代・種別に共通する得点の低い項目は、「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」項目でいずれの世代においても最低となった。「十分にできている」と回答したものは、若干名しかいないのに対して、「ほとんどできていない」と答えた者は数名おり、課題を残す結果となった。社会全体でみても核家族化が進み、また高齢者との関わりも薄れている現状では、わらべ歌や絵描き歌のような伝統的な言葉遊びが伝承しにくい状況になっていることがうかがえる。しかし、絵描き歌やわらべ歌の持つ教育的意義も評価されるべきであり(榎本・杉本、2017)、保育者養成校である本学にとっても、今後の課題といえる。

また次に低い得点だったのは、「社会情勢に関心をもち知識を広げようとする」項目である。新聞を取る家庭が激減し、社会情勢にうとい若者の増加も言われており、これは何も保育者だけに限らないと思われる。ともすれば井の中の蛙になりがちであるが、保育のことだけでなく、幅広く社会情勢に目を向け、情報を得る努力も必要である。

また、「自分の意見を適切に表現して発言する」項目も全体的に低得点であった。自分の考えをしっかりと持つと同時に、それを適切に表現する力をつけることが求められる。次に各世代・種別ごとにみていく。

30代保育士は、「周囲に対し気持ちよく挨拶ができる」項目で他の世代・種別より高得点の一方、「自分を客観的に見つめ、自己評価を行う」項目で得点が低かった。自己評価を行い、反省し、明日の活動につなげることが求められている。

30代幼稚園教諭は、「子どもの成長に喜びを感じる」項目が満点となり、全員が「十分にできている」と回答した一方で、「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」と「周囲から信頼されている」の2項目でほかの世代・種別の中

でも一番低い得点となった。絵描き歌やわらべ歌を知らない保育者がほとんどだが、幼稚園は3歳児以上が通う園であり、いろいろな歌遊びに積極的に取り組む姿勢が望まれる。また世代的にも若いので信頼を得にくいかもしれないが、信頼されるよう努力することが求められる。

40代の保育士については、「相手を理解し、円滑に物事を進める」項目で、他の世代・種別より得点が低かった。また「自分一人で悩まず、報告・連絡・相談をする」項目で、少数だが「2. 少しはできている」「1. ほとんどできていない」と回答した者がいた。一人で悩まず、信頼できる人に相談する姿勢も大事であり、それにより、相手への理解が深まり、物事も円滑に進めることもできると思われる。

40代の幼稚園教諭については、「子どもや保護者に明るく元気にかかわる」と「同僚と適切なコミュニケーションをとる」項目で他の世代・種別よりも高い得点となった。保育者として自信をもち、子どもや保護者に接している様子がうかがえる。一方で「好奇心や探究心をもち、物事にかかわる」と「自然に触れる機会を多く持つ」の2項目で、他の世代・種別より低い得点となった。40代というと働き盛りで、職場において期待されることも多く、仕事に忙殺される時期でもあるが、好奇心や探究心を持ち続け、また自然に触れる機会ももってほしいものである。

次に50代の保育士であるが、「自分の仕事や行為について責任を果たす」「子どもや保護者に誠実にかかわる」「チームワークを大事にする」項目で高得点であった。多くの者が「4. 十分にできている」と回答した。この結果は、責任ある立場にあると推察される50代にふさわしいと考えられる。一方で「絵描き歌やわらべ歌などをよく知っている」と「絵本の読み語りが上手にできる」項目は、やや低い結果となった。保育所運営に力を注ぐ分、子どもたちに読み語りする時間も減っているということなのかもしれない。さらに「周囲から信頼されている」の項目で「2. 少しはできている」と回答した者が3分の1強おり、責任ある立場の中で信頼を得ているか揺れ動く姿が垣間見える。

続いて50代の幼稚園教諭であるが、ここでも「周囲から信頼されている」の項目で、「4. 十分にできている」と答えた者が一人もおらず、「2. 少しはできている」が半数弱だった。周囲から信頼されているという実感を得るのは難しいことかもしれない。また「音楽が流れると自然と体が動く」の項目も得点がやや低かった。50代となり体がついていなくても、子どもと一緒に楽しむ努力が必要と思われる。「常に笑顔を絶やさない」の項目は、他の世代・種別よりも高得点であった。ベテランで上に立つ保育者の笑顔は、子どもたちにはもちろん同僚の保育者、さらには保護者にとっても安心感を得られるものであろう。

以上、すべての世代に共通する項目とともに、各世代・

種別ごとに得意なこと、課題となることが浮かび上がった。今後はさらに詳細に分析し、各世代・種別における課題解決のための方策を探っていきたい。

次に、「実習（保育所・幼稚園）受け入れ側として実習生に望むこと」について考察する。多くの保育者は、「保育者に必要な技術・知識」よりも「社会人として必要なこと」や「取り組みの姿勢」「保育者としての意識・姿勢」についての記述が多かった。「保育者に望むこと」を尋ねたのではなく、「実習生に望むこと」としたということもあるだろうが、社会に出るにあたって必要とされる心構え、取り組みの姿勢などが重視される結果となった。このことは、「保育者に必要な技術・知識」はあまりなくてよい、と言っているのでは決してなく、むしろ社会人としての最低限のマナーや心構えすらもできていない実習生がいることの裏返しとともとえられるであろう。この調査は「本学の実習生に望むこと」と限定したわけではなく、「他大学も含めた実習生に望むこと」に関する記述であるが、実習生の傾向として肝に銘じておく必要がある。

中でも「積極性」「挨拶」「明るさ、元気さ、笑顔」「子どもと一緒に遊ぶ」「意欲」などは、多くの現場の保育者が共通してあげた項目である。例をあげると「笑顔。わからないことは積極的に保育者に来てほしいです。座って見ていられるだけではなく、何歳になっても一緒に子どもと一生懸命遊んでほしいです。意欲を見せてほしいです。話かけたらその都度、しっかり返事をしてほしいです。」という記述が見られたが、保育者としてのごく基本的姿勢と思われることすらできていない現状がうかがえる。このことは、知識や技術を教える以前の問題であるといえる。また「何を学びたいのか考えてくる。」という意見もあった。ただ漠然と実習へ行くのではなく、目的を持って実習に臨むことは実習指導の中でも再三学生たちに指導しているが、それが徹底されているか再確認する必要がある。また保育者養成校である本学として、知識や技術を教えることはもちろん重要であるが、それらを教える以前の問題として「社会人として必要なこと」「取り組みの姿勢」「保育者としての意識・姿勢」についても今後意識しながら、学生を育てていく必要がある。

「保育者に必要な技術・知識」については、日誌の書き方などについての項目が多かった。中には「最低限の挨拶や実習日誌の書き方（字は丁寧に、言葉、文章など）、話し方など当たり前のことを事前に学校で確認してください。」という記述もあり、最低限のことすらできていない実習生の存在がうかがえる。基本的な姿勢、知識、技術の獲得に向け、養成校としての責務を果たしていくことが求められている。

6. 考察

以上、保育者の現状と現場が実習生に望むことを考察してきた。実習生に望むことに関しては、先行研究（林・森本・東村、2012）の「養成校への要望や保育者として必要なこと」の自由記述のアンケートが参考になる。ここでは「保育者として必要なこと」という本稿とは違う視点も含まれているが、その結果は以下の通りである。「保育者に必要な技術・知識」のカテゴリーが一番多く有効回答 100 のうち 36 を数える。そのカテゴリーの中には「ピアノの技術」（11）、「応用力・実践力」（6）、指導計画の立案（6）などが含まれている。その次に多いのが「豊かな人間性」（7）、「豊かな感性」（3）などの項目を含む「保育者としての資質」（19）のカテゴリーであった。続いて「マナー、礼儀作法」（8）、「コミュニケーション能力」（6）の項目を含む「社会人として必要なこと」（17）となっている。さらに「気配り目配り」（4）を含む「保育者としての意識・姿勢」（13）のカテゴリー、次に「働く姿勢」（12）のカテゴリーとなっている。この結果から、「保育者に必要な技術・知識」は保育の現場で多くを望まれているということがうかがえる。保育の現場においてこのような技術・知識は欠かせないものであり、身に付けておかなければならないことだろう。しかし、本稿の「実習生に望むこと」の結果を見ると、「保育者に必要な技術・知識」は数としては少なく、「取り組みの姿勢」や「保育者としての意識・姿勢」などに重きが置かれていることが明らかとなった。この結果から、実習生には前提となる「姿勢」や「意識」「意欲」が望まれているといえる。保育者の前提として、それらが必須であることがうかがえる。「保育者に必要な技術・知識」は、保育者となってからも学び続けることができるとも考えられているからだと思われる。

しかし、保育者への質問紙調査からは、仕事に忙殺され、保育者に必要な技術・知識の習得が必ずしも十分に行われていない現実が浮かび上がった。特に「保育の内容（5領域）」分野の項目は全体の中でも得点が低い項目が多かった。保育士不足により、研修等による保育者としての技術・知識の向上がなかなか望めない現状、研修等に送り出したくてもそれもままならない苦渋の現状がみてとれる。

これらをふまえ、保育者養成校としての課題を次に述べたい。1つ目は学生へ保育者としての意識や姿勢を持つことの働きかけである。「保育の技術や知識」の指導もちろん最重要課題であるが、まずは社会人としての意識の持ち方や積極的な姿勢を養い、保育者としての意識の養成が求められている。そのことを肝に銘じ、学生指導に当たる必要がある。

2つ目は、研修や特別講座などの機会を設け、地域の保育者たちの保育の技術や知識向上のためサポートする役割を

果たすことである。近年では、保育者の研修の充実が図られているが、十分であるとは言えない。今後ますます研修の場の必要性は高まると考えられる。研修等になかなか参加できない現実があるとはいえ、勤務先に近い地域で行われていれば、参加するチャンスも広がるはずである。それに応じ、大学において専門知識を持つ者や、長年にわたる保育経験者をはじめ地域の高齢者などによる魅力ある講座提供の場が望まれる。保育所や幼稚園に実習生を送り込むだけでなく、保育者たちに保育の技術や知識向上の場を積極的に提供するというように、相互の連携が今後さらに必要になると思われる。このように保育養成校としての課題と役割を認識して、地域との連携を深め、より良い保育が行える環境を整えていきたい。

謝辞

本研究にあたり、ご多忙の中、調査にご協力頂きました先生方に、心より御礼申し上げます。

本研究は、公益財団法人前川財団の平成 28 年度「家庭教育研究助成」の助成を受けた研究です。

参考文献

- ・秋山真奈美「現場で求められる幼児教育職務実践力とは？」佐野短期大学紀要（22）2011 年
- ・秋山真奈美「現場で求められる幼児教育職務実践力とは？」（2）佐野短期大学紀要（24）2013 年
- ・林悠子・森本美佐・東村知子「保育者養成校に求められる学生の資質について」奈良学園奈良文化女子短期大学紀要（43）2012 年
- ・林悠子・森本美佐・東村知子「保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について」奈良学園奈良文化女子短期大学紀要（46）2015 年
- ・池田竜介「日常の保育実践における保育者の子ども理解の特質」『保育学研究』第 53 巻第 2 号
- ・ミネルヴァ書房『発達（子どものための保育をめざして）』（142）2015 年
- ・榎本恵理・杉本栄子「幼児教育における言葉の育成—伝承言葉遊びの意義再考」びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部紀要（8）2017 年 3 月刊行予定

地域社会における学校の役割と教師 －「チーム学校」論とその課題－

鈴木敦史*

本稿では、地域社会における学校の役割と、そこで求められる教師の在り方、資質・能力について、平成27年12月に出された、中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」を手がかりに整理し、その課題を検討した。「チーム学校」を提唱する同答申は、時代の変化や社会状況の複雑化により、教員業務の多忙化、煩雑化が進んでいるという現状認識のもと、「専門性」にもとづく業務の分類・分担を促し、その担い手の一端を地域社会に求めるものである。本稿では、このような「チーム学校」論における地域社会、学校、教師の関係性を概観し、今後に向けた、教育現場の実態を踏まえた「教育改革」の必要性と、その在り方について、課題を指摘した。

〔キーワード：「地域社会」，「チーム学校」，中央教育審議会，「教育改革」〕

1. はじめに

本稿は、地域社会における学校の役割と、教師のありかたについて、平成27年12月に出された、中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」を手がかりに、現在の教育行政が示す方向性を概観し、その課題を検討するものである。

「チーム学校」論に関しては、これまで、学校の組織運営論の視点から、その学校管理統制の側面を批判的に検討したものや¹、成立の背景を、近年の「学校論」の経過のなかで位置づけ、その特徴を指摘するものなどがあった。²

本稿は、このような研究史に学びながら、改めて「(答申)チーム学校」における、地域社会、学校、教師の役割と相互の関係性を整理し、その上で、教師に求められる資質や能力が教育改革によって新たに提示され、それが教師の業務をさらに多忙化させていく構造を明らかにする。課題が山積し、それへの対応で教師が多忙化しているという現状を打開する目的で示された「チーム学校」論が示す方策と、一方で抱える課題を明らかにすることで、教育改革そのものの今後の在り方をも展望していくのが本稿の目的である。

を答申した。この答申は、学習指導に留まらない、生徒指導等の広範な職務に取り組む日本の教員の現状を高く評価する一方で、社会変化にともなう多様な能力の育成が学校教育に求められていくなかで、そのための学校の体制整備が、今後さらに必要性を増していくとの見通しのもと出された。³

ここで、現在子どもたちが抱える課題として例示されているのが、判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることの弱さ、そして自己肯定感や学習意欲、社会参画意識の低さ、などである。答申では、今後の社会変化(グローバル化、情報通信技術の進展)を見据え、子どもの自立、協働の資質を高めるべく、こうした課題の克服が急務とされ、「社会に開かれた教育課程」の実現と、そのための「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラム・マネジメント」⁴の重要性が訴えられている。そして、こうした取り組みを進めていくうえで必要となるのが、学校内外の様々な資源が学校を支え、そして互いに協働する「チームとしての学校」(以下「チーム学校」と記す)というしくみなのだとしている。このような「チーム学校」は、とりわけ生徒指導上の課題解決や特別支援教育の充実といった側面で、必要性が高まっているとされる。

では、こうした「チーム学校」はどのような具体策によって実現されると考えられるのか。以降、「学校のマネジメント機能の強化」、「教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備」、「専門性に基づくチーム体制の構築」の順に整理してゆく。

「学校のマネジメント機能の強化」に関しては、「チーム

第1章 「チーム学校」論の成立

中央教育審議会は、文部科学大臣からの諮問「これからの学校教育を担う教職員やチームとしての学校の在り方について」(平成26年7月)をうけ、平成27年12月21日、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」

学校」を主導する校長と、それを支える副校長、教頭等の管理職の養成強化や選考・登用の改善、そして研修の充実などが示されている。また、平成20年度に制度化された主幹教諭制度を充実させることで、校長・教頭を中心とする学校運営のサポート体制を強化し、さらに事務体制の強化充実を進め「チームとしての学校」を補強していくとしている。

「教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備」に関しては、人材育成と業務環境の改善が方針として示されている。人材育成に関しては、人事評価の改善・充実が目指され、評価者に対する研修や、人事評価結果の任用や給与などへの反映を的確に行うことが求められる。さらに、優れた教育実践の結果を残した教職員への表彰制度については、教員個人だけでなく学校単位、取組単位の表彰を念頭に入れ、チームとしての取組みを、積極的に評価対象に据えていくことが示された。

一方、業務環境の改善に関しては、業務や役割が拡大する近年の学校現場の状況を鑑み、内容を吟味したうえでの、学校外諸機関との分担や連携などの方針が探られている。こうした業務改善においては、学校の設置者たる教育委員会が主導し、国がそれを後押しするという体制が求められている。

「専門性に基づくチーム体制の構築」に関して、答申では、校長をリーダーとする教員組織のチーム体制構築とともに、必要に応じた、教員以外の専門スタッフの参画を提唱している。とりわけ、生徒指導などの面では、心理や福祉面の専門家であるスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの関与などが挙げられている。また、学習面では、ICT支援員や学校司書、外国語指導助手（ALT）の登用、また部活動に関しては部活動指導員（仮称）の創設と参画、さらに、特別支援教育に関わっては、看護師や特別支援教育支援員、言語聴覚士（ST）、作業療法士（OT）、理学療法士（PT）などの外部専門家の関与なども提案されている。こうした構想が、学校内の組織運営を外部の専門家を配置することで強化する個別的なチーム補強である一方、学校全体を包括的にサポートし、協働してゆく主体としての役割を期待されているのが、地域である。答申では、地域との連携体制の整備が謳われ、コミュニティ・スクールや地域学校協働本部の活用による、「社会総掛かりでの教育」の重要性が強調されている。さらに、学校と地域の連携・協働を進めるべく、その中核を担う、地域連携担当教職員（仮称）の位置づけを、法律上明確化することが提案されている。こうした学校と地域の位置づけは、答申にある「学校が抱える課題が複雑化・困難化している状況の中、課題を解決していくためには、学校がより一層地域に開かれ、地域住民や保護者等が学校運営に対する理解を深め、積極的に参画することで、子供の教育に対する責任を学校、家庭、地域と分担していくことが重要である」

との部分からも明確に読み取ることができる。

以上のように見た結果、「チームとしての学校」とは、校内職掌の再編や学校外専門家の参画、教職員の処遇改善といった学校内の組織体制強化とともに、そうした学校を地域による支援体制の上に成り立たせ、協働してゆこうとするプランであると整理することができる。

それでは、このような「チーム学校」論に関わって、地域社会と学校とは、具体的にどのような関係性でとらえられ、また具体策が示されているのかを、「（答申）チーム学校」と同時に出示された、中教審答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」を手掛かりにしながら、次章で整理していきたい。

第2章「チーム学校」論における地域社会と学校

中央教育審議会は、平成27年12月21日「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」⁵を答申した。この答申は、平成27年4月の文部科学大臣による諮問「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方について」に答えたものであり、前章に見た、「（答申）チーム学校」と同時に出示され、そこで示される学校と地域の連携・協働理念を、より具体化したものである。

全4章からなる同答申では、時代や社会状況の変化のなかにあって、学校と地域の在り方を再構成していく必要が指摘され（第1章）、さらにそこで、平成12年度に導入された学校運営協議会制度にもとづくコミュニティ・スクールをモデルとした具体的な学校像を示している（第2章）。また、そうしたなかで求められる地域と学校の協働の在り方として、地域学校協働活動を取り上げ、その全国的な推進と継続的実施のための体制づくりを訴え（第3章）、そうしたコミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的実施の必要を説いている（第4章）。本章では、こうした同答申において描かれる、地域社会と学校の関係性について、整理していきたい。

まず、地域社会や学校を取り巻く動向に関しては、都市化や家庭形態の変容、価値観の多様化などにより地域社会や家庭の教育力が低下してきていることが指摘される。従来、学校外にあって重要な教育機能を発揮してきたとされるこうした教育資源が、その機能を低下させている中で、子どもたちを取り巻く教育環境も変化し、子どもにまつわる様々な課題の対応を迫られているのが学校であるとしている。

また、学校本来の機能も、社会との関係性のなかで再構成される必要が指摘され、改革の対象となっている。とりわけ、教育内容の面においては、「学習指導要領」の改定を

見据えた教育改革の動向として、教育課程企画特別部会が平成 27 年 8 月に審議経過をまとめた「論点整理」をもとに、「社会に開かれた教育課程」の実現が指摘されている。これは、その後平成 29 年 3 月に告示された「学習指導要領」（小学校は平成 32 年 4 月施行、中学校は平成 33 年 4 月施行）において、ともに以下のように明文化された。

教育課程を通して、これからの時代に求められる教育を実現していくためには、よりよい学校教育を通してよりよい社会を創るという理念を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な学習内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを教育課程において明確にしながら、社会との連携および協働によりその実現を図っていくという、社会に開かれた教育課程の実現が重要となる。

各学校がその特色を生かして創意工夫を重ね、長年にわたり積み重ねられてきた教育実践や学術研究の蓄積を生かしながら、児童や地域の現状や課題を捉え、家庭や地域社会と協力して、学習指導要領を踏まえた教育活動の更なる充実を図っていくことも重要である。⁶

ここでは、学校が、低下する社会の教育機能を代替したり、あるいは学校が消化しきれない教育課題を地域社会や学校外機関に外部委託するという片務的な関係性を超え、社会が学校を支え、そしてその学校が新たな社会を創造していく、という相互支援の構造が描かれている。すなわち、学校と地域社会との関係性は、学校を、「全ての子供たちが自立して社会で生き、個人として豊かな人生を送ることができるよう、その基礎となる力を培う場」、「子供たちの豊かな学びと成長を保障する場」「地域コミュニティの拠点として、地域の将来の担い手となる人材を育成する役割」を担う場、と位置付けるとともに、地域の役割を、「実生活・実社会について体験的・探究的に学習できる場として、子供たちの学びを豊かにしていく役割を果たす必要がある」として、双方向的に子どもの育ちを支え、そして地域社会を創造する「連携・協働」関係として描いている。⁷

こうした理念を具体化していくためのプランとして示されているのが、コミュニティ・スクールと地域学校協同活動の推進である。

コミュニティ・スクールに関しては、平成 16 年度に制度化された学校運営協議会制度により導入され、その指定校数も増加しているものの、担当教員の負担増や学校運営協議会の人材確保などの面で、少なからず課題も抱えている。

平成 27 年 8 月 10 日に、佐藤晴雄氏（日本大学教授）が初等中等教育分科会「地域とともにある学校作業部会」で報告した資料⁸によると、既にコミュニティ・スクールに指定されている、あるいは指定予定の学校長に対する調査で

は、指定のきっかけを、「教育委員会からの働きかけによって指定された」とするものが全体の 60.0%と首位であり、続く「学校の希望と教育委員会の働きかけが一致して指定された」（24.6%）を大きく離している。さらに、「学校が希望して指定された」とする、学校自体の主体的取り組みの割合が 8.8%なのを考慮すると、コミュニティ・スクールへの取り組みは、必ずしも現場で積極的に受け入れられておらず、むしろ行政からの働きかけにより、現場が取り組んでいる現状が読み取れる。こうした現場の意識は、未指定校の校長調査で、「学校運営は順調である」「教職員はコミュニティ・スクールに消極的である」、「校長・園長である自分に指定の意思がない」、「学校運営協議会委員の人材確保が難しい」、「首長には制度導入の意向がない」などが上位を占めていることから窺うことができる。さらに全学校の校長に対する調査では、「コミュニティ・スクールを拡充していくために重要なこと」との問いに「教育委員会の方針を明確にする」、「教育委員会が予算措置を図る」、「教育委員会が教職員を加配する」、「学校支援の機能の役割を明確にする」などが上位 4 位までを占めている現状を考慮すれば、コミュニティスクールの現状に対し、具体像が不明確なまま行政による強い働きかけがある状況で、人員や財政面など、現実的な資源が不足しているという、現場の切実な状況が垣間見える。

第 3 章 「チーム学校」論における教師像

「チーム学校」論においては、先述のように、それを実現するための具体的な方策として、「専門性に基づくチーム体制の構築」が示されている。その具体策は、教職員の指導体制の充実と教員以外の専門スタッフの参画とに大別されるが、そこで主に子どもたちの学習支援に携わる教員像とはどのようなものか。以下、検討を加えてみたい。

「チーム学校」論において、学習活動に関する改革の基軸とされるのは、社会変動に応じて設定される「開かれた教育課程」と、それを実現するためのアクティブ・ラーニングの視点を踏まえた授業改善、そしてカリキュラム・マネジメントである。

アクティブ・ラーニングに関しては、知識の質や量に留まらない、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視した改善が望まれ、それが社会とのつながりを意識したなかで習得され、新たな課題発見、問題解決に結びついていくという、「主体的」「協働的」な学びの必要性が訴えられている。さらに、そうした「主体的」「協働的」な学びを保障するための、教育課程のグランドデザインの作成に必要とされるのが、カリキュラム・マネジメントである。すなわち、「子供や地域の実態に基づき」、「カリキュラムは与えられるものである」という意識を改革し、カリキ

ュラムを作り出すことが求められているのであり、またそれを評価・改善していくという、PDCAサイクルが重要視されている。「主体的」「協働的」であることは、子どもたちの学びに留まらず、教師自体の教育実践とその管理にも高度に求められるのである。従って、こうした取組みには、時間と労力、人員の一定確保が必然的に求められることになり、そうした理由からも、教員の業務見直しが指摘されることになるのである。そこで提案されるのが、現

場教員が抱えているとされる、膨大な「仕事」の分類・分担である。

下記は、「(答申) チーム学校」に示された、教員の業務分類例であるが、従来、教員が担ってきた業務を、(a) から(d)のように分類し、教員以外の人材に分担してゆくことで、上記のようなカリキュラム・マネジメントとそれを前提としたアクティブ・ラーニングの為の研究・準備に充てるとするものである。

教員の業務の分類(例)	
(a)教員が行うことが期待されている本来的な業務	・ 学習指導, 生徒指導, 進路指導, 学校行事, 授業準備, 教材研究, 学年・学級経営, 校務分掌や校内委員会等に係る事務, 教務事務(学習評価等)
(b)教員に加え, 専門スタッフ, 地域人材等が連携・分担することで, より効果を上げることができる業務	・ カウンセリング, 部活動指導, 外国語指導, 教員以外の知見を入れることで学びが豊かになる教育(キャリア教育, 体験活動など), 地域との連携推進, 保護者対応
(c)教員以外の職員が連携・分担することが効果的な業務	・ 事務業務, 学校図書館業務, ICT活用支援業務
(d)多様な経験等を有する地域人材等が担う業務	・ 指導補助業務(土曜日の活動支援等)

(中央教育審議会「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について (答申)」より)

こうした業務分担に際しては、「(答申) チーム学校」自体が、そのなかで、「専門スタッフの参画は、学校において単なる業務の切り分けや代替を進めるものではなく、教員が専門スタッフの力を借りて、子供たちへの指導を充実するために行うものである。言い換えれば、教員が専門スタッフに業務を完全にバトンタッチするのではなく、両者がコラボレーションし、より良い成果を生み出すために行うものである」と念押しをしている。しかし、こうした業務の分類・分担は、実質的には、新たに行政が設定した課題に取り組むにあたっての、教員としての「専門性」からみた、業務の選別とその外部委託として実態化していくことが予想される。とりわけ、地域との関係性でいえば、「(d) 多様な経験等を有する地域人材等が担う業務」が想定されるが、「指導補助業務 (土曜日の活動支援等)」といった業務内容には、一定のスキルや責任が伴う故、手当て等の財政的な裏づけや、責任や権限の範囲設定などが、明確になされることが前提となると考えられる。

このようなことを踏まえ、教員としての「専門性」からみた、今後の教員に求められる資質能力については、「(答申) チーム学校」「(答申) 地方創生」とともに出された、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について一学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて」¹⁰⁾に具体的に示されている。

ここでは、従来、教員にとっての不易の資質能力とされてきた「使命感」「責任感」「教育的愛情」「教科や教職に関する専門的知識」などに加え、今後教員には以下のような諸能力が求められるとする。

- ・ 時代の変化や自らのキャリアステージに応じて自律的に学ぶ姿勢。
- ・ 探究心や学び続ける意識を持つこととともに、情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力。
- ・ これからの時代に生きる子供たちをどう育成すべきかについての目標を組織として共有し、その育成のために確固たる信念をもって取り組んでいく姿勢。
- ・ アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善や道徳教育の充実、小学校における外国語教育の早期化・教科化、ICT の活用に関する能力。
- ・ インクルーシブ教育システムの構築の理念を踏まえた、発達障害を含む特別な支援を必要とする児童生徒等への対応・弛緩する能力。
- ・ 学校安全への対応能力。
- ・ 幼小接続をはじめとした学校間連携等への対応能力。

「(答申) 教員の資質能力」では、上記のような諸能力を、今後の教員に求められる資質・能力であると明示する一方、こうした諸課題すべてに対応することの非現実性を認める。そして、そこにこそ「チーム学校」の必要性を訴えるのである。そしてこうした理念の下、「教員は多様な専門性を持つ人材と効果的に連携・分担し、教員とこれらの者がチームとして組織的に諸課題に対応するとともに、保護者や地域の力を学校運営に生かしていく」ことが求められるとするのである。

「(答申) チーム学校」においては、教員の向き合うべき課題の拡大が指摘され、それへの対応の限界から、地域社会

をはじめとする学校外の諸資源との連携の必要性が訴えられたが、その連携の為の諸能力の獲得もが、教員に対しては更に求められていくことになるのである。

第4章 「チーム学校」論とその課題

前章までみてきた「チーム学校」論から明らかなのは、時代の変化や社会状況の複雑化が進んでいるという現状認識のもと、教育行政によって新たな教育課題が次々に提起され、その教育課題に取り組むにあたっての教員に求められる資質能力がさらに提示されるという構造である。それは、言い換えれば、教育行政による、「教育課題」と教員への要求の、無制限の拡大再生産である。

このように考えると、中央教育審議会によって示された「(答申) チーム学校」は、そうした教育行政による自己矛盾の打開策として出された、教育業務の外部委託案としても理解することが出来るだろう。

しかしながら、学校や現場の教師達は、これまで、子どもの成長に向き合うことから派生する様々な業務を受け入れることで、子どもや家庭、地域社会からの期待に応え、信頼を獲得してきたことも事実である。そして、そうした学校や教師による、経験やノウハウ、知識、方策といった、教育現場の「財産」の重要性を看過することはできない。しかし、こうしたこれまでの「財産」を、いかに現在の教育課題に活かしていくかという視点は、必ずしも十分に共有されているとはいえない。

先述のように、「チーム学校」論において、学習指導のポイントとされるのは、「アクティブ・ラーニング」と「カリキュラム・マネジメント」であった。こうした学習指導上の工夫についても、これまで現場の教員たちによる改善、努力は続けられてきた。

平成27年8月に文部科学省と国立教育政策研究所によって公表された「全国学力・学習状況調査 報告書・調査結果資料」¹¹では、学校に対する調査として、理科に関する指導方法についての質問項目が設定されている。その中で、「自ら考えた仮説をもとに観察、実験の計画を立てさせる指導を行いましたか」という問いに対して、「よく行った」「どちらかといえば行った」と回答したのは、中学校の場合、平成24年度で全体の61.8%、平成27年度では全体の65.8%にも及んだ。更に同様の質問に対し、小学校の場合では、平成24年度で全体の78.2%、平成27年度では全体の81.8%と、授業への主体的な参加を促す実践が非常に高い割合で行われており、しかもそれが、小・中学校ともに、平成24年度から27年度にかけて増加していることが分かる。また、国語や算数についても同調査では、「学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」という問いに対して、「その通りだと思う」「どちらかといえばそう思う」

と回答したのは、中学校の場合、平成26年度で全体の64.8%、平成27年度で68.1%であり、小学校では平成26年度で64.0%、平成27年度で66.4%と、コミュニケーションを含んだ学びの深化を図るなどの現場教員による指導上の工夫は、高い割合で実践されており、しかも年を追うごとにその数も増加しつつあることがわかる。また、こうした実践をする際には、教員が個々にカリキュラムの運用に工夫を凝らすことも、必然的に求められるだろう。

このようなデータから浮かび上がるのは、主体的な授業参加や思考を促す指導上の工夫などは、これまでも現場の教員たちによって既に広く実践されているのであって、むしろそれを十分に練り上げることなく、「アクティブ・ラーニング」や「カリキュラム・マネジメント」といった新規の取り組みを現場に求めることこそが、現場の教員たちの蓄積してきた指導上のノウハウや経験を反故にしてしまうことにつながるのではないかという懸念である。さらに「(答申) チーム学校」に示されている「社会に開かれた教育課程」なども、こうした現場教員たちの実践上の工夫を、更に深化させていくことで、自ずと実現できるのではないか。

同様の指摘は、学校と地域との関係にもいえる。すなわち、先に見た佐藤晴雄氏によるコミュニティ・スクールに関する調査¹²においても、その指定を行っていない理由を問う質問に対し、上位の3回答が、「学校評議員制度や類似制度があるから」「地域連携がうまく行われているから」「すでに保護者や地域の意見が反映されているから」となっており、4位以降の回答を大きく離している。このようなことから、新たな提言や取り組みを新規に提示するまでもなく、教育現場では、従来の制度や取り組みを創意工夫しながら、学習指導の改善や地域社会との連携を進めていることがわかるのである。

おわりに

「チーム学校」論で展開される現状認識や、そこから生じる新たな学校の課題、そしてその課題に向き合うための様々な方策は、「教育改革」の必要性を訴える際には、十分な説得力を有するし、また理念としての正当性も、一見、疑問をはさむべき箇所は少なくないにも思える。しかし一方で、これまで検討してきたように、教育行政が新たな「教育課題」を創出し、それへの対応を無制限に教育現場に課すことで、教育現場の多忙化が進み、教員の本来業務を圧迫しているという現状を看過することはできない。

「チーム学校」論で主張される、教員の抱える業務の分類・分担案が、そうした教員の多忙化に対する打開策であるならば、それは改革することによって新たな改革の必要性を生じさせているという自己矛盾に、教育行政自らが陥って

いることの証左に他ならない。その場合、根本的な解決の第一歩としては、むしろ教育現場に対して、無用な教育改革を次から次へと課さないことこそが重要になるのではないだろうか。

広田照幸は、「『学校・家庭・地域の連携』論」を検討するにあたって、現実の家庭や地域社会にある「異質なものの糾合体」としての側面を考えれば、そこでの意思決定には葛藤や妥協が必然的に生じるのであり、「開かれた学校」を実現するには、教師は現実的に、様々に出される意見や利害の調整、説得に多大な労力と時間を消費しなければならないだろうと指摘する。そして、上記のような連携論に、「価値や理念の一体化・同質化」の志向が前提として設定されている現状に違和感を示す¹³。さらに広田は、近年の教育改革の問題点として、目的を達成するための資源や手段が十分に与えられていないなかでの本音と建前の混同が、教育現場に混乱をきたし、逆に社会からの教育不信を招くといった皮肉な側面を指摘している¹⁴。

これまでみてきたように、学校や現場の教員は、教育行政によって新たな理念や課題を提示されるまでもなく、目前の子どもへの指導や支援に日々工夫を凝らし、改善を図っている。今後望まれるのは、そうした教員の日々の経験から蓄積された知見やノウハウを、さらに深化させ、そして次世代の教員に継承していくための機会と時間を、教育行政が確保していく努力をしていくことだろう。そのために必要なのは、教育現場の実態を精査したうえで、教育現場で対応し得る最小限の課題を限定し、十分な支援体制を確保しながら提示していくという、教育行政自身の現実的かつ自制的な学校教育運営のあり方なのではないか。

1 樋口修資「学校組織運営論からみる『チーム学校』の批判的考察と教員のワーク・ライフ・バランスの実現」『明星大学研究紀要－教育学部』第7号、2017年3月。

2 大橋隆広「『チーム学校』論の系譜—1990年代以降の学校論を中心にして—」『広島女学院大学人間生活学部紀要』第4号、2017年。

3 a 中央教育審議会「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）」（中教審第185号）平成27年12月21日。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiel/2016/02/05/1365657_00.pdf（2017年6月23日アクセス）。

以下、同答申に関しては「（答申）チーム学校」と略記し、その内容については、特に断らない限り、上記参照。

4 「（答申）チーム学校」では、カリキュラム・マネジメントを、以下のよう

に捉えている。
・各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。

・教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。

・教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資

源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

5 中央教育審議会「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」（中教審第186号）平成27年12月21日。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiel/2016/01/05/1365791_1.pdf（2017年6月23日アクセス）。同答申に関しては、以下「（答申）地方創生」と略記し、その内容については、特に断らない限り、上記参照。

6 文部科学省「小学校学習指導要領」平成29年3月31日告示。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiel/2017/05/12/1384661_4_2.pdf

文部科学省「中学校学習指導要領」平成29年3月31日告示。

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afiel/2017/05/12/1384661_5_2.pdf

ともに（2017年6月23日アクセス）。

7 こうした関係を、同答申では「学校を核とした地域づくり」として、「一方的に、地域が学校・子供たちを応援・支援するという関係ではなく、子供の育ちを軸として、学校と地域がパートナーとして連携・協働し、互いに膝を突き合わせて、意見を出し合い、学び合う中で、地域も成熟化していく視点が重要である」としている。

8 佐藤晴雄「コミュニティ・スクールの実態と校長の意識に関する調査—学校（校長）調査結果（速報）（抄）—」平成27年8月10日、初等中等教育分科会「地域とともにある学校作業部会」報告資料。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/05/4/siryo/_icsFiles/afiel/2015/10/07/1362263_01.pdf#search=%27%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%BB%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%81%AE%E5%AE%9F%E6%85%8B%E3%81%AB%E9%96%A2%E3%81%99%E3%82%8B%E8%AA%BF%E6%9F%BB%27（2017年6月23日アクセス）

9 ここでいう「PDCAサイクル」とは、近年、教育改革に頻繁に用いられる語だが、本来、経営学における品質管理手法として用いられるこの概念を、教育に適用していくことの問題点については、古川雄嗣「PDCAサイクルは『合理的』であるか」（古川他編『反「大学改革」論—若手からの問題提起—』ナカニシヤ出版、2017年）に詳しい。ここで古川は、「人間の教育」を「モノの生産」と同じ論理で考え、学生・生徒の「品質」を管理しようとする、その発想そのものに、根本的な違和感が表明されるのは当然である」としたうえで、その問題点として、①教育実践における「思いがけない結果」や「ずれ」の排除、②教育対象である人間の個性と差異の排除、③サイクルにおける目標と結果との差異の排除、④トップダウンによる全体目標の提示から生じる自律的な目標管理の不可能、などを挙げ、そのすべてに通じる「偶然性の排除」の側面を指摘している。筆者も、古川の指摘には首肯するところである。しかし、本稿自体が、そうした発想から成る「教育改革」の要請に応じるべく「生産」された「成果」であるという点で、ジレンマを抱えていることは否定できない。

10 中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について—学び合い、高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて—（答申）」（中教審第184号）平成27年12月21日。

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiel/2016/01/13/1365896_01.pdf（2017年6月23日アクセス）。同答申に関しては、以下「（答申）教員の資質能力」と略記し、その内容については、特に断らない限り、上記参照。

11 文部科学省、国立教育政策研究所「平成27年度 全国学力・学習状況調査 報告書・調査結果資料」。

<https://www.nier.go.jp/15chousakekkahoukoku/index.html>（2017年6月23日アクセス）。

12 前掲、佐藤晴雄。

13 広田照幸『教育には何ができないか—教育神話の解体と再生の試み—』2006年、春秋社、121頁～125頁参照。

14 広田照幸『教育不信と教育依存の時代』2005年、紀伊國屋書店、94頁～96頁参照。

演奏者による音楽表現と聴衆との感じ方

内山 育子*

演奏者が考える音楽表現と幼稚園教育要領に書かれている表現はすべてがあてはまるものだと筆者は感じる。幼児教育には 5 領域と言われる「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」がある。この 5 領域は大人の世界でも必要である。今回の研究において、女声アンサンブル アリア 9 t h コンサートの聴衆から回収できたアンケート 109 名分を基に、どのような状態でどのような曲を聴いた場合に人は心地よく感じるのかを検証しながら、幼児教育にどのようにつなげられるかを考察するものである。

[キーワード：5 領域, 音楽表現, コンサート]

1. はじめに

クラシック歌手として舞台上で演奏している筆者の考える音楽表現と、幼児教育に掲げている音楽表現との定義は一致している。しかし伝えたいと思う心を音楽に乗せ表現していても、聴衆に伝わらないことも多々ある。伝統あるクラシックファームと幼児の音楽表現をどのようにつなぐことができるかを考察した。

筆者が代表を務める女声アンサンブル アリアは 2008 年湖国の音楽文化の発展に寄与する目的で誕生した。メンバーは海外留学で直に本場音楽を学んできた者とびわ湖ホール専属声楽アンサンブルソロ登録メンバーが中心となり湖国で活動している者が集まった。ピアニスト 1 名、シンガー 5 名計 6 名で構成する。2016 年 9 月 25 日（日）に開催した 9th コンサート時に行ったアンケートを基に、聴衆と演奏者の表現に対する感覚のずれを紐解きながら、幼児教育の音楽表現と実際に舞台上で演奏している奏者との表現の差を埋めることができるのであろうか。

・言葉

「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」

・表現

「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」

2-1 表現ねらい¹⁾

- ・ (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- ・ (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- ・ (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2. 5 領域の定義

・健康

「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。」

・人間関係

「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。」

・環境

「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」

2-2 内容¹⁾

- ・ (1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- ・ (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- ・ (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- ・ (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。

- ・ (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- ・ (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- ・ (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- ・ (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

2-3 内容の取扱い¹⁾

上記の取扱いに当たっては、次の事項に留意する必要がある。

- ・ (1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々に表現することなどを通して養われるようにすること。
- ・ (2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
- ・ (3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

上記のように健康・人間関係・環境・言葉・表現が定義付けされている。表現の中に音楽表現も含まれている。ねらいに書かれている(1)は芸術家には欠かせない根底にあるべきものである。

美しいものを美しいと感じ、嬉ことを嬉しいと感じ、悲しみ、苦しみ、喜びを感受する力が無ければ芸術は生まれてこない。

感受性を育ててはぐぐむことが人間として生活していく上において一番大切なことではないか。

人の悲しみが解れば「いじめ」はなくなるだろう。しかし理屈で理解していても起こしてしまう行動である。

3. 演奏会

女声アンサンブル アリア 9thコンサート
『チラン』

第46回滋賀県芸術文化祭参加
女声アンサンブル アリア 9thコンサート

Aria

出演者: 飯塚未羽、藤井聡子、藤原智子、林 有子、尾崎美子、牛尾花紀

2016年 9月 25日(日) 14時開演 (13:30開場)
滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 小ホール

入場料 一般 2000円
高校生以下 1500円
(当日いずれも500円増)

『プログラム』

第46回滋賀県芸術文化祭参加
女声アンサンブル アリア 9thコンサート

Aria

2016年 9月 25日(日) 14時開演 (13:30開場)
滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール 小ホール

- ・いつも何度でも：となりのトトロと同じスタジオジブリの映画である。2001 年千と千尋の神隠しの挿入歌。アニメ映画興行収入歴代 1 位。
- ・世界の約束：スタジオジブリ作品、2004 年ハウルの動く城の挿入歌。アニメ映画興行収入歴代 4 位。
- ・Sing:1973 年カーペンターズ。元々はテレビ番組「セサミストリート」の挿入歌として発表されたものをカーペンターズが歌った。

以上 5 曲は、子どもから大人まで 1 度は耳にしたことのある曲である。アンケート結果にもあるが、印象に残りやすい性質がある。また音楽だけでなくジブリ作品の内容と一致させ記憶に定着している。

これら 5 曲を演奏するに当たり、ポップスっぽく歌うべきか、もっと響きを殺して言葉をたてるべきか、いろいろな発声で試した結果、アリアのメンバーらしい声が失われることの方が表現が乏しくなり、牽いては気持ちを聴衆に伝えることができないという結論に達した。よって 5 曲ともオペラティックな演奏となった。

2 部

滋賀県出身の若手バリトン歌手の下林一也氏のソロステージ。温かく深みのある声で、理性的に歌われる彼に今後の活躍が期待される。

アンケートに初めてバリトンのソロを聴きましたとあった。合唱の団体に所属していてもなかなかソロを聴く機会というものは少ないようで、本物の声を届けたいと思う気持ちが届いたステージになった。

3 部

アリアの本領が発揮できるステージ。

ミュージックサークルスマイルの協力を仰ぎ、延暦寺学園比叡山高校・びわこ学院大学・同志社女子大学・滋賀県立石山高校 OG の若い学生たちにステージの魅力とマナーを学んでもらうために一緒に演奏した。学生たちは、ステージでの歩き方から始まり、緊張でこわばる顔に笑顔を求められ、動きを付けられと大変な思いをしたが、演奏が終わった後の拍手をいただいた瞬間からこわばった顔が心からの笑顔になった。そして「来年もまたステージで歌いたい」との声を聞いた時、教師をしていて良かったと思う瞬間でもある。若手を育てるというとても大切な仕事ではあるが、このような経験をすることが教室内でいくら説明しても理解できないことがわかるようになる。このことは、教諭、保育士を目指す学生にもあてはまる。我が校から毎年多くの学生が小学校・幼稚園・保育園・こども園に実習に行くが、帰ってきたときの学生の顔つき・態度が明らかに変わっているのである。実際に体験することは大きな成長につながっているのである。プロである我々も毎回反省の嵐である。反省があるからこそ次につながるのである。

4. アンケート

アンケートは A4 裏表でおこなった。

質問は以下の 11 項目である。

1. どこでこのコンサートをお知りになりましたか
出演者・広報・チラシ・その他
2. どの曲が印象的でしたか（複数回答可）
3. 2のどの部分が特に残っていますか。
メロディー・歌詞・なんとなく・その他
4. 座席番号 ○列○番
お座りの場所の響きはいかがですか。
とても良い・良い・普通・
悪い・とても悪い・わからない
5. どなたとお越しになりましたか。
パートナー・親子・お友達・1人・その他
6. 聴いていて緊張した曲はありますか。
ある（曲目 ）
なし
7. 聴いていてリラックスした曲はありますか
ある（曲名 ）
なし
8. 演奏以外で集中できなかった時はありましたか
9. 普段どのような状態で音楽をきいていますか
10. あなたが音楽を聴きたくなる時はいつですか
11. 性別・年齢

アンケート結果と考察

1. どこでこのコンサートをお知りになりましたか

出演者	98
その他	9

2. どの曲が印象的でしたか（複数回答可）

曲目	人数	%
となりのトトロ	21	10.1
乾杯	18	8.6
いつも何度でも	16	7.7
翼をください	16	7.7
Sing	15	7.2
ヴィリアの歌	14	6.7
「パ・パ・パ」	14	6.7
世界の約束	13	6.2
第三部の曲	11	5.2
死んでおしまい怪物よ	8	3.8
ヴェールの歌	8	3.8
無記入	7	3.3

もみじ	6	2.9
第一部の曲	5	2.4
下林さんの曲	5	2.4
終わりの日が来た	4	1.9
ドンファンのセレナーデ	4	1.9
すべて	4	1.9
魔笛	3	1.4
あなたは私に手紙を書かれた	3	1.4
お手をどうぞ	2	1
ドン・カルロ	2	1
メリーウイドウ	2	1
まちぼうけ	2	1
騒がしい舞踏会の中で	1	0.5
妹よ見てごらん	1	0.5
ただ憧れを知るものだけが	1	0.5
メトロがいっぱい	1	0.5

印象に残った曲は千差万別、一番多い曲でも10.1%にしかない。

人それぞれ感じ方が違う良い例だ。

3. 2のどの部分が特に残っていますか

項目	人数	%
メロディー	60	49
無記入	24	19
歌詞	23	19
なんとなく	4	3
歌声	2	2
その他(声ののびやかさ)	1	1
演技	1	1
声域	1	1
ハーモニー	1	1
迫力	1	1
ピアノの伴奏	1	1
楽しそうに歌っていた	1	1
感情がこもっている	1	1
曲のアレンジ	1	1

上記の結果より知らない曲より知っている楽曲の方がより印象に残りやすいことがわかる。

音楽に関しては、メロディーが主として印象に残るようだ。歌の特性として歌詞と言うものがある。歌詞からも印象に残ることが読み取れる。

自由に感じることを楽しむことが音楽表現のねらいであるので、このように感じる場所が違うという事は、ねらいが発揮されると言えるだろう。歌詞があることで5領域の「言葉」

の・・・相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て・・・にも大きく関わっている。知らない曲の歌詞を聞き取るにはかなりの意欲を持って集中しないと聞き取れない。今回の演奏会は休憩20分を挿み、2時間あったので低年齢の子どもには長い時間であったが、騒ぎ出す子どもは誰一人いなかった。

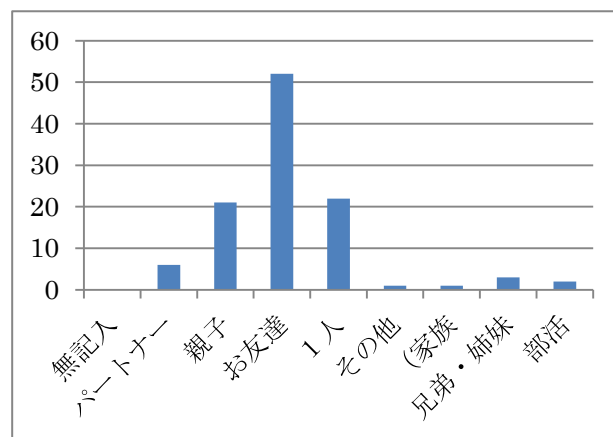
びわ湖ホール主催のこどものためのオペラ公演でも2時間以上にわたる時間養護学校の生徒を初め皆最後まで静かに聴いてくれる。ある中学の先生は「Aが2時間騒ぎもせず邪魔もせず座っている姿を初めて見た。」と驚かれていた。音楽の持つ力は、計り知れない。

4. お座りの場所の響きはいかがですか。

項目	人数	%
とても良い	36	34
良い	58	55
ふつう	8	8
悪い	2	2
とても悪い	0	0
わからない	3	3

県立劇場びわ湖ホールは文化発信を目的として平成10年に開館したホールである。全国に先駆け専属声楽アンサンブルを所有する。筆者はその初代アンサンブルメンバーである。開館当初は湿度過多のために床がめくれあがったりと想定外のアクシデントがあったが、現在はとても良い状態である。今回小ホールを使用。木管や弦楽器、声楽に適した柔らかな残響がある。場所によって聴衆がどのように感じるかを調査した。結果94名88パーセントの聴衆は響きが良いまたはとても良いと答えている。壁の真横に座った時音のまわり方に違和感を覚える聴衆もいるが、多くの聴衆は響きに満足している。

5. どなたとお越しになりましたか。



演奏会に1人で来場20%、2人以上78%、その他2%
ここにアンケート11の年齢と一緒に見てみる。

年齢	来場者数	1人来場者数
10歳以下	4	0 (0%)
10代	17	3 (18%)
20代	8	1 (13%)
30代	2	0 (0%)
40代	25	2 (8%)
50代	22	7 (32%)
60代	21	4 (19%)
70代	6	4 (66%)

<1人来場者の%は各年齢別の値と示す>

70代の1人来場率が高いことがうかがわれる。

家で音楽を聴く時は個々が多いが、会場で聴く場合は誰かと一緒に傾向が強い。同じ時間の共有によって感じ方の違いがあるのかどうかという疑問が湧いてきた。

10歳以下の単身がいないのは、保護者が同伴していると考えられる。10代になると単身3人、親子7人、友達7人に見られるように親から離れ1人行動や友人との行動がみられるようになる。30代の複数来場率100%は興味深い結果である。来場率が低い年齢であることに驚いた。女性の30代は子育て最中の方が多く、小さな子どもを連れてくれば他人の迷惑にならないか気を使い、子どもを預けてまで演奏会に来られない現状がある。小さい時から本物の音楽を生で聴いてもらいたいものである。近年託児付きの演奏会も増えてきているがまだまだ少ないのが現状である。アリアのメンバーの多くは子育て経験者の為、子育て中のお母さんリフレッシュの為に気軽に来場できるよう、入場年齢制限をしていない。

6. 聴いていて緊張した曲はありますか

奏者はゆったりとした気持ちになって欲しいと思いがながら演奏するが曲によっては緊張を強いることがある。自分が聴き手になった時、時折演奏に対して奏者の研ぎ澄まされた緊張感に自分自身も奏者と同じように緊張することがある。

今回のプログラムでも起こるのか。

	人数	%
なし	90	77.6
となりのトトロ	6	5.2
終わりの日が来た	5	4.3
いつも何度でも	2	1.7
死んでおしまい怪物よ	2	1.7
バリトンステージ	2	1.7
世界の約束	1	0.9
ドン・カルロ	1	0.9
一部最後の曲	1	0.9

乾杯	1	0.9
ヴィリアの歌	1	0.9
妹よ見てごらん	1	0.9
お手をどうぞ	1	0.9
第一部の曲	1	0.9
Sing	1	0.9
計	116	100

解答 なし 90名

あり 26名

上記にありと答えた26名の明記した曲をあげる。1番緊張した人が多かった曲は、となりのトトロである。

アンケートコメントに「となりのトトロを普通の編曲で聴きたかった」とあるようにまさしく複雑な編曲だ。今回の演目の中で1番練習に時間を費やしたのがとなりのトトロである。アカペラ（無伴奏）で演奏するのだが曲間にどんどん転調していて演奏者の頭を困惑させる編曲であるが、スキッと転調にはまった時の気持ち良さは奏者の醍醐味なのだろう。また聴衆もこの緊張感を楽しむことができる。しかし演奏が不安定であれば聴衆に良い緊張でなく心配からくる緊張を強いることになる。

奏者としては後者の緊張はさせてはならないと考える。

7. 聴いていてリラックスした曲はありますか

曲目	人数	%
なし	38	34%
翼をください	14	12.4
Sing	13	11.5
となりのトトロ	13	11.5
世界の約束	7	6.2
いつも何度でも	7	6.2
ヴィリアの歌	3	2.6
下林さんの曲	3	2.6
あなたは私に手紙を書かれた	2	1.8
終わりの日が来た	1	0.9
アリア	1	0.9
ただ憧れを知るものだけが	1	0.9
騒がしい舞踏会の中で	1	0.9
ドン・カルロ	1	0.9
乾杯	1	0.9
ドン・ファンのセレナーデ	1	0.9
第二部の曲	1	0.9
第三部の曲	1	0.9
お手をどうぞ	1	0.9
ヴェールの歌	1	0.9
妹よ見てごらん	1	0.9

アンケート結果いろいろな曲があげられた。

これらは、個々の好みに応じて感じ方が違うからである。まさに表現のねらいの初めにある いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ に値するものである。

演奏会に来場いただけるという事は、音楽だけを聴きに來ている貴重な時間でもある。このことを演者はいつも頭に入れておかなければならない。

8. 演奏以外で集中できなかった時はありますか

なし	102
咳	2
途中の入場	1
ピアノの残響	1
いつ拍手していいのか	1
外国語の曲が続いたとき	1
ほかの客がガムを噛んでいた	1

このことから他人からの影響が大きいことがわかる。

クラシックに限らないが、会場に來た時にどこで拍手をして良いかわからないことがある。このことをストレスと捉えずにライブ感を味わって欲しい。

9. 普段どのような状態で音楽を聴いていますか

	人数	%
解答なし	21	16.6
車の中	40	31.7
家事をしているとき	20	15.8
勉強しているとき	7	5.5
本を読んでいるとき	7	5.5
通勤・通学中	4	3.1
入浴中	3	2.3
寝る前	3	2.3
PC しているとき	3	2.3
工作中	3	2.3
電車の中	2	1.5
集中しているとき	2	1.5
家で	2	1.5
音楽クラブ	1	0.7
ゲームをしながら	1	0.7
手伝いしているとき	1	0.7
サークルで	1	0.7
ひまなとき	1	0.7
好きなことしているとき	1	0.7
新聞を読みながら	1	0.7
食事中	1	0.7
TV を観ているとき	1	0.7

この結果からも個々に違うことがわかる。

日常は純粋に音楽だけを聴くより、主とする動きがあつて「ながら」聴いていることが解る。

10. あなたが音楽を聴きたくなる時はいつですか

なし	25
車の中	17
リラックスしたいとき	7
つかれたとき	7
ゆっくりしたいとき	6
楽しいとき	4
一人のとき	4
落ち込んだとき	5
気分	4
家事をしているとき	4
いつでも	4
勉強しているとき	3
元気になりたいとき	2
片づけしているとき	2
TV を観ているとき	2
ストレスがたまったとき	2
電車の中	2
寝る前	2
移動中	2
入浴中	2
時間のあるとき	2
作業中	2
家	2
自由な日	1
退屈したとき	1
集中したいとき	1
通勤・通学	1
帰り道	1
さびしいとき	1
テンションが高いとき	1
たまに	1
本を読んでいるとき	1
季節の変わり目	1
歩いているとき	1
子どもと楽しみたいとき	1
休みのとき	1
コンサートの後	1

この結果からも個々に違うことがわかる。

11. 年齢・性別

年齢	来場者数	男性	女性	1人 来場者数
10歳以下	4	1	3	
10代	17	5	12	
20代	8	2	6	1
30代	2	0	2	
40代	25	4	21	2
50代	22	7	15	7
60代	21	2	19	4
70代	6	1	5	4

アリアの演奏会では入場に関し年齢制限を設けていない。誰でも気軽に来場いただき、本物の音楽に触れて欲しいとメンバー全員が思いを抱き一つに活動している。

5. まとめ

以上のアンケート結果より音楽は、個々が自由に感じるものかといえるだろう。一人ひとり違って良いものだ。

先日、オペラ演出家岩田達宗氏が「最近音楽を個で感じていることが多すぎる。本来、音楽は身体全体で聴くもの、身体全部で振動を感じるものだったのに、イヤホーンで耳だけで聴いている。みんなと共感することがなくなっている。そんな寂しいことはやめて、みんなで楽しもう！」と熱く語っていた。CDで聴けばたった一人で聴くことができる。しかしいったん劇場に足を運んでオペラを聴くとなると、聴衆は演者と劇場コンパニオンしか目にするにはないが、オーケストラピットの中には少なくとも30人以上のオーケストラ奏者、照明・大道具・小道具・衣装・メイク等大勢が働いている。その力が結集されたものが本番のステージである。生の力を体感することを切に願う。高校生の感想で1部曲に対して「こんなにダイナミックな歌だとは思わなかった」とあるように、歌い方ひとつで同じ歌であっても受け取り手の感じ方が変わることがわかる。

個の表現の大切さは勿論大切だが、音楽には感受性・協調性も養われるものだ。人が生きていく上、一人では生きられない。食糧、日常生活、どれを問っても一人の力ではない。皆で力を合わす大切さを伝えながらも、人と違っていい、自己肯定する力をつけながら、子ども達に1人ひとり大切だと友だちを思いやる気持ちが育つ音楽を繋いでいきたい。

6. 著作権

「センター年報」に掲載された論文の著作権は著者に属する。ただし、本学に対して継続的に複製権、頒布権を許諾すること。掲載論文は本学のウェブページで公開する。

掲載URLは以下の通りである。

<http://www.newton.ac.jp/bgu/koukai/center/gaibu>
(仮)

参考文献

- 1) 文部省「幼稚園教育要領」2008年内閣府・文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2014年
- 2) 若林千春編曲女声合唱愛唱歌集島唄 音楽之友社
板野和彦 ユニバーサルデザインの音楽表現 萌文社
星山麻木編著
吉永早苗 子どもの音感受の世界 萌文社
斉田晴仁 声の科学 音楽之友社

高齢者の体力に関する研究—その2—

竹内早耶香*・藤井茂樹**・稲岡純史***・黒田吉孝****・
鈴木敦史*****・後藤真吾*****・向山昌利*****

滋賀県東近江市のA地区に住んでいる高齢者を対象とし、その高齢者の体力の現状を明らかにし、今後の高齢者の健康、体力づくりに向けた取り組みの基礎資料収集を目的とした。具体的には、A地区在住の高齢者を対象に体力測定会を行い、得られたデータについて全国平均値と比較したり、昨年度のデータと比較したりすることによって、A地区在住の高齢者の体力について把握することとした。その結果、握力、開眼片足立ち、10m障害物歩行の項目が全国平均値より下回ったり、昨年度と比較して今年度の値の方が下回ったりしたことが明らかとなった。これは筋力、平衡感覚、複合的運動能力の目安となる項目であることから、滋賀県が掲げる「健康寿命をのばす」という点からも強化が求められる項目であろう。このことから、A地区に運動教室を開催する際は、楽しく筋力、平衡感覚、複合的運動能力を強化するようなプログラムを準備する必要がある。

〔キーワード：新体力テスト、健康寿命、筋力、平衡感覚、複合的運動能力〕

1. はじめに

本研究は、高齢者の体力の現状を明らかにし、今後の高齢者の健康、体力づくりに向けた取り組みの基礎資料とすることを目的とした継続研究である。

日本の平均寿命は、厚生労働省がまとめた「都道府県別にみた平均寿命の推移」によると、平成22年で男性が79.59歳、女性が86.35歳となっており、日本は世界有数の長寿国となっている。そして、滋賀県の男性の平均寿命は80.58歳、女性は86.69歳となっており、男女ともに全国平均値を超えている。

そのような中、滋賀県の女性の健康寿命（健康上の問題がない状態で日常生活を送れる期間）が全国で最下位という調査結果が報告され（橋本ら、2012）、滋賀県では年齢を重ねても、健康に暮らせる社会の実現が課題となっている。

上記を踏まえ、昨年度、滋賀県東近江市のA地区に住んでいる高齢者を対象に体力測定会を行い、得られたデータについて全国平均値と比較することによって、A地区在住の高齢者の体力を把握した。その結果、上体起こしの項目が全国平均値より下回り、全身持久力の強化が求められることが明らかとなった（竹内ら、2016）。

そこで、本研究は、高齢者の体力の現状を明らかにし、今後の高齢者の健康、体力づくりに向けた取り組みの基

礎資料とするため、今年度も滋賀県東近江市のA地区に住んでいる高齢者を対象に体力測定会を行い、得られたデータについて全国平均値と比較したり、昨年度のデータと比較したりすることによって、A地区在住の高齢者の体力を把握することを目的とする。

2. 方法

（1）対象：A地区（滋賀県）在住の健康な55～89歳の中高齢者36名（男性10名、女性26名）。

（2）時期：2016年10月に実施。

（3）課題：新体力テスト（文部科学省、1999）を使用。調査種目は、64歳以下は、握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、立ち幅跳び、急歩の6種目、65歳以上は、握力、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の6種目であった。

3. 結果と考察

ここでは（1）測定結果、（2）全国平均値との比較、（3）昨年度との比較という3点から分析する。しかし、全国平均値については、データが65～79歳に限

* 教育福祉学部 スポーツ教育学科 講師
** 教育福祉学部 スポーツ教育学科 教授
*** 教育福祉学部 スポーツ教育学科 教授
**** 教育福祉学部 スポーツ教育学科 教授
***** 教育福祉学部 スポーツ教育学科 准教授
***** 教育福祉学部 スポーツ教育学科 講師
***** 教育福祉学部 スポーツ教育学科 講師

られているため、(2) (3) については、本データも65～79歳の22名（男性7名、女性15名）を対象とした。

(1) 測定結果

まず、対象者の内訳を表1に、新体力テストの結果を表2、表3にまとめた。

表1 対象者の年齢内訳

年齢	男	女	計
55-59	0	2	2
60-64	2	2	4
65-69	1	3	4
70-74	3	8	11
75-79	3	4	7
80-	1	7	8
計	10	26	36

表2 男性の測定結果

年齢	人数	身長	体重	BMI
55-59	0			
60-64	2	165.7	63.75	22.8
65-69	1	163	60.8	22.5
70-74	3	167	56.13333	19.8
75-79	3	166.5667	66.73333	23.7
80-	1	157	46.6	18.5
年齢	握力(右)	握力(左)	握力(平均)	上体起こし
55-59				
60-64	37	41	39	15
65-69	46.3	43.9	45.1	15
70-74	31.8	28.56667	30.18333	10
75-79	34.6	31.8	33.2	10
80-	23.7	21.8	22.75	8
年齢	長座体前屈	開眼片足立ち	10m障害物歩行	6分間歩行
55-59				
60-64	35.5			
65-69	42	120	5	820
70-74	39.66667	83.66667	6	676.6667
75-79	33.33333	27	9.333333	567
80-	30	19	8	690
年齢	反復横とび	立ち幅とび	急歩(秒)	総合得点
55-59				
60-64	26	814	167	20.5
65-69				52
70-74				37.66667
75-79				30
80-				27

表3 女性の測定結果

年齢	人数	身長	体重	BMI
55-59	2	159.25	57.95	22.5
60-64	2	155	51.15	20.95
65-69	3	155.0333	51.33333	20.93333
70-74	8	150.8875	46.775	20.1
75-79	4	146.775	49.225	22.35
80-	7	144	48.65714	23.37143
年齢	握力(右)	握力(左)	握力(平均)	上体起こし
55-59	31.15	29.35	30.25	17.5
60-64	25.45	26.8	26.125	14.5
65-69	22.63333	21.23333	21.93333	11.66667
70-74	20.075	18.35	19.2125	3.625
75-79	21.7	22.375	22.0375	7
80-	23.75714	23.05714	23.40714	3.571429
年齢	長座体前屈	開眼片足立ち	10m障害物歩行	6分間歩行
55-59	44.5			
60-64	46.5			
65-69	43	80	5	650
70-74	36.5	79.5	7.75	611.875
75-79	42.25	38.5	9	516.25
80-	30.28571	19.14286	8.714286	561.4286
年齢	反復横とび	立ち幅とび	急歩(秒)	総合得点
55-59	39.5	517.5	138.5	34
60-64	36.5	530	136.5	30
65-69				45.66667
70-74				34.75
75-79				32.5
80-				29.14286

(2) 全国平均値との比較

次に、全国平均値を100として、A地区在住の対象者のデータを比較した（図1～図6）。

図1より、65～69歳の男性は、握力、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の全ての項目で全国平均値を上回っていた。

図2より、70～74歳の男性は、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の項目で全国平均値を上回り、握力、上体起こしの項目で下回っていた。

図3より、75～79歳の男性は、握力、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の全ての項目で全国平均値を下回っていた。

図1～3より、A地区在住の男性は、長座体前屈は全国平均値より上回っているか、さほど変わらないことがわかる。反対に、上体起こしが全国平均値より下回っていることが読み取れよう。特に、75-79歳において、開眼片足

立ちと10m障害物歩行の項目が大きく下回っていたことから、平衡感覚と複合的運動能力の衰えがみられるといえよう。

図5について、70～74歳の女性は、開眼片足立ち、6分間歩行の項目で全国平均値を少し上回り、握力、上体起こし、長座体前屈、10m障害物歩行が下回っていた。

図6より、75～79歳の女性は、長座体前屈が全国平均値を上回り、握力、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の項目で全国平均値を下回っていたことがわかった。

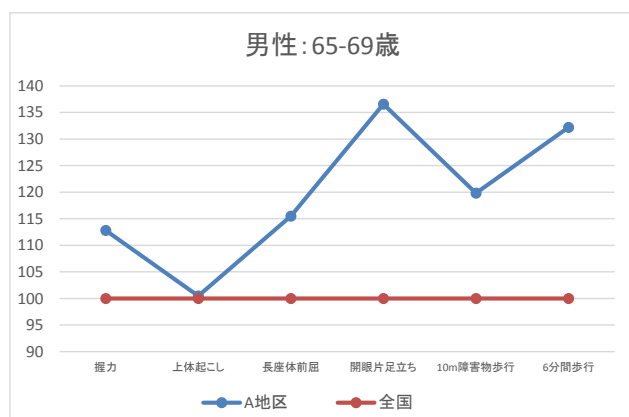


図1 65-69歳男性の全国平均値との比較

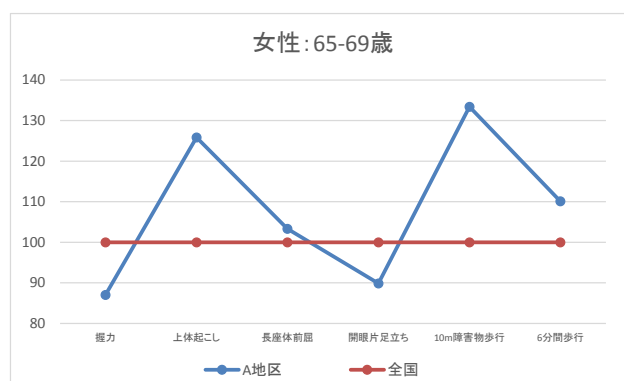


図4 65-69歳女性の全国平均値との比較

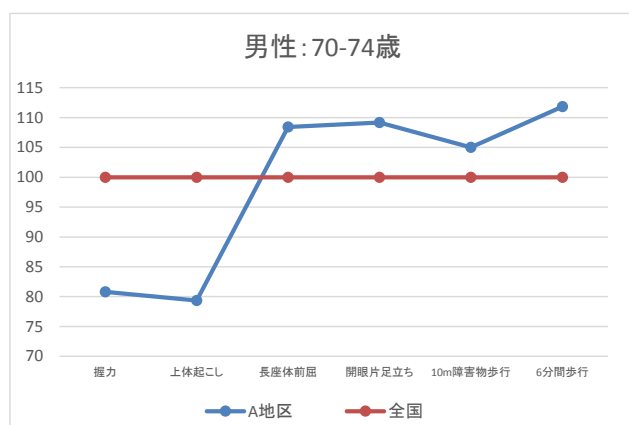


図2 70-74歳男性の全国平均値との比較

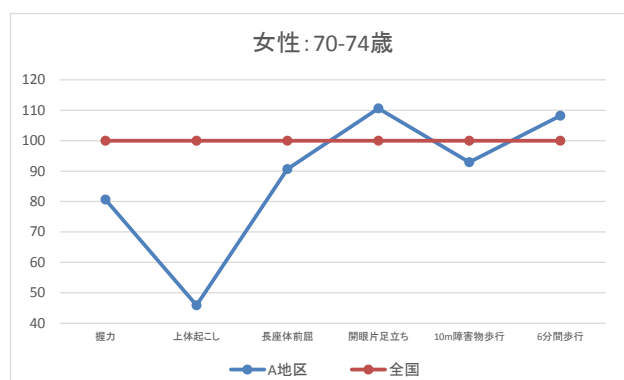


図5 70-74歳女性の全国平均値との比較

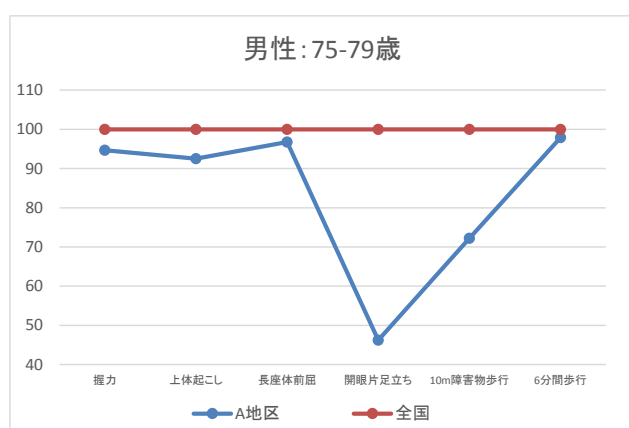


図3 75-79歳男性の全国平均値との比較

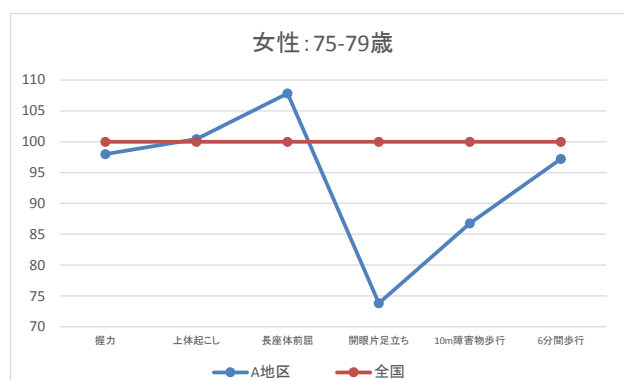


図6 75-79歳女性の全国平均値との比較

次に、女性のデータについて分析した。図4より、65～69歳は握力、開眼片足立ちの項目が全国平均値より下回り、上体起こし、長座体前屈、10m障害物歩行、6分間歩行が全国平均値より上回っていた。

上記より、A地区の女性はいずれの年齢でも、握力が全国平均値を下回っていたことが明らかになった。このことより、筋力を強化する運動を取り入れることが必要と考えられるだろう。

(3) 昨年度との比較

さらに、対象者の昨年度（H27年度）のデータと今年度（H28年度）のデータについて、全国平均値を100（基準）として比較した（図7～図12）。

図7より、65～69歳の男性は、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の項目で昨年度より今年度の値の方が上回っていた。握力、上体起こしの項目はほぼ変化がなかった。

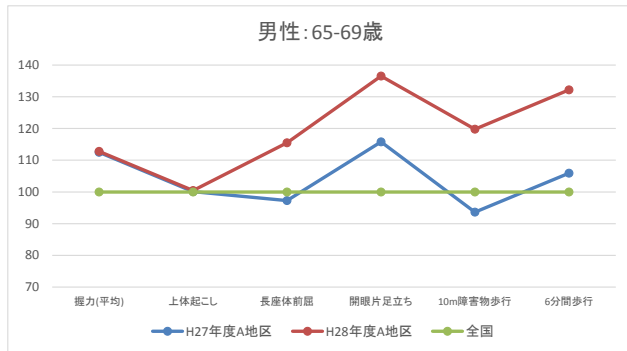


図7 65～69歳男性の昨年度と今年度の比較

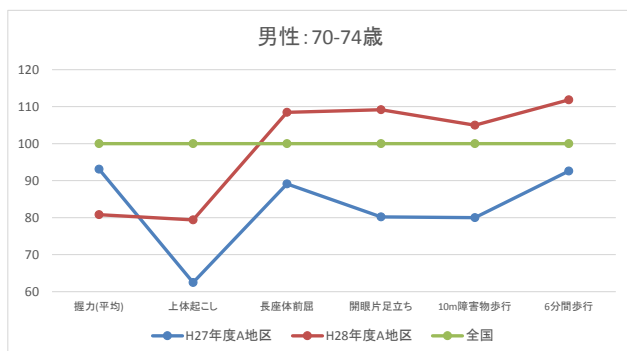


図8 70～74歳男性の昨年度と今年度の比較

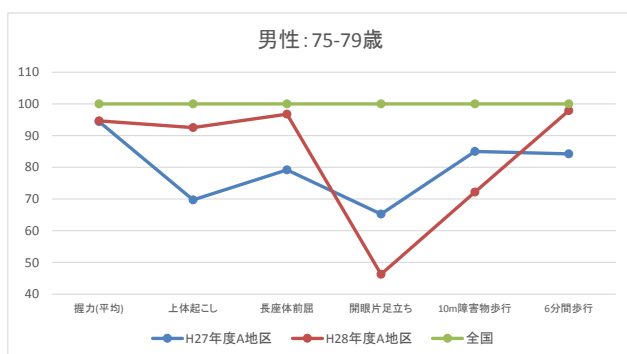


図9 75～79歳男性の昨年度と今年度の比較

図8より、70～74歳の男性は、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の項目で昨年度より今年度の値の方が上回り、握力が下回っていた。

図9より、75～79歳の男性は、上体起こし、長座体前屈、6分間歩行の項目で昨年度より今年度の値の方が上回り、開眼片足立ち、10m障害物歩行、が下回っていた。

図7～9より、A地区在住の男性は、昨年度の値より今年度の値の方が全体的に上回っていることがわかる。しかし、70～74歳において、握力が下回っていること、75～79歳において、開眼片足立ちと10m障害物歩行の項目が下回っていたことから、筋力、平衡感覚、複合的運動能力の衰えがみられるといえよう。

次に、女性のデータについて分析した。図10より、65～69歳は握力、開眼片足立ちの項目で昨年度より今年度の値が下回り、上体起こし、10m障害物歩行、6分間歩行が上回っていた。

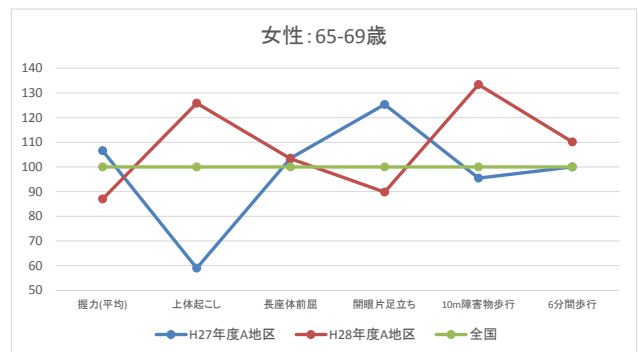


図10 65～69歳女性の昨年度と今年度の比較

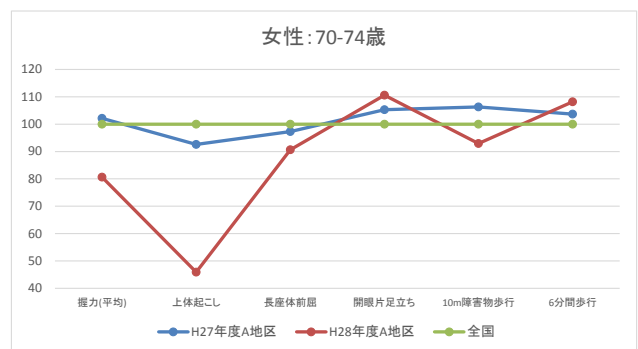


図11 70～74歳女性の昨年度と今年度の比較

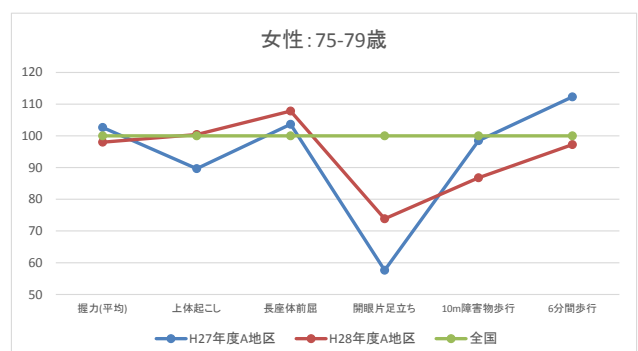


図12 75～79歳女性の昨年度と今年度の比較

図11より、70～74歳の女性は、開眼片足立ち、6分間歩行の項目で昨年度より今年度の値の方が上回り、握力、

上体起こし、長座体前屈、10m障害物歩行が下回っていた。

図12より、75～79歳の女性は、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ちの項目で昨年度より今年度の値の方が上回り、握力、10m障害物歩行、6分間歩行が下回っていた。

上記より、A地区の女性はいずれの年齢でも、握力の項目において昨年度の値より今年度の値の方が下回っていたことが明らかになった。また、65～69歳で開眼片足立ちが下回っていること、70～74歳、75～79歳において、10m障害物歩行の項目が下回っていたことから、男性同様、筋力、平衡感覚、複合的運動能力の衰えがみられ、それらを強化する運動を取り入れることが必要と考えられるだろう。

4. まとめ

滋賀県東近江市のA地区に住んでいる高齢者を対象とし、その高齢者の体力の現状を明らかにし、今後の高齢者の健康、体力づくりに向けた取り組みの基礎資料収集を目的とした。具体的には、A地区在住の高齢者を対象に体力測定会を行い、得られたデータについて全国平均値と比較したり、昨年度のデータと比較したりすることによって、A地区在住の高齢者の体力について把握することとした。

その結果、以下のことが明らかになった。

- ① 65～69歳の男性は、握力、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の全ての項目で全国平均値を上回っていた。特に、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の項目で昨年度より今年度の値の方が上回っていた。
- ② 70～74歳の男性は、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の項目で全国平均値を上回り、握力、上体起こしの項目で下回っていた。上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の項目で昨年度より今年度の値の方が上回っていた。つまり、状態起こしは全国平均値を下回ったものの、昨年度よりは値が高くなった。
- ③ 75～79歳の男性は、握力、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の全ての項目で全国平均値を下回っていた。しかし、上体起こし、長座体前屈、6分間歩行の項目で昨年度より今年度の値の方が上回っていた。
- ④ 65～69歳は握力、開眼片足立ちの項目が全国平均値より下回り、上体起こし、長座体前屈、10m障害物歩行、6分間歩行が全国平均値より上回っていた。特に、上体起こし、10m障害物歩行、6分間歩行が昨年度より今年度の値の方が上回っていた。

- ⑤ 70～74歳の女性は、開眼片足立ち、6分間歩行の項目で全国平均値を少し上回り、握力、上体起こし、長座体前屈、10m障害物歩行が下回っていた。また、開眼片足立ち、6分間歩行の項目は昨年度より今年度の値の方が上回っていた。

- ⑥ 75～79歳の女性は、長座体前屈が全国平均値を上回り、握力、開眼片足立ち、10m障害物歩行、6分間歩行の項目で全国平均値を下回っていた。しかし、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ちの項目で昨年度より今年度の値の方が上回っていた。

上記より、特に注目すべき点は、握力、開眼片足立ち、10m障害物歩行の項目が全国平均値より下回ったり、昨年度と比較して今年度の値の方が下回ったりしたことである。これは筋力、平衡感覚、複合的運動能力の目安となる項目であることから、滋賀県が掲げる「健康寿命をのばす」という点からも強化が求められる項目であろう。このことから、A地区に運動教室を開催する際は、楽しく筋力、平衡感覚、複合的運動能力を強化するようなプログラムを準備する必要がある。

また、今回体力測定会に参加した高齢者は、ある程度元気で体力に自信のあった方々が多かった。当然のことであるが、外出が困難な方々は体力測定会に参加していない。つまり、今回のデータはA地区の一部の元気な方々のデータであることは研究の限界として頭に入れておく必要がある。

しかしながら、このような限界を認めつつも、A地区の高齢者の体力の現状を明らかにし、今後の高齢者の健康、体力づくりに向けた取り組みの基礎資料収集はできたのではなかろうか。今後は、データの蓄積を通じて、高齢者の健康、体力づくりに向けた具体的な取り組みを検討し、進めていくことを課題としたい。

文献

- 1) 平成26年度体力・運動能力調査 e-Stat
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList>.
- 2) 健康寿命における将来予測と生活習慣病対策の費用対効果に関する研究班、研究代表者 橋本修二 (2012) 健康寿命算定方法の指針
- 3) 厚生労働省平成22年都道府県別生命表の概況、
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/tdfk10/>
- 4) 竹内早耶香・藤井茂樹・稲岡純史・遠藤六朗・黒田吉孝・鈴木敦史・後藤真吾 (2015) 高齢者の体力に関する研究—その1—、びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部 外部連携センター年報, 1.

研究論文

地域交流事業「イベント企画」における実践よりみえるもの ～東近江市湖東地区光の祭典「コトナリエ」ワークショップ～

平居 幸一郎*

本学は、東近江市唯一の教育福祉系大学として、地域と共にその活性化に取り組んでいる。

さて、本年度の取り組みの一つとして、東近江で過去10年間取り組まれてきた真夏の夜を飾る「コトナリエサマーフェスタ」でのワークショップの企画及び開催に、本学子ども学科の造形ゼミの3回生5名が参画することになった。この取り組みを通して、子ども学を研究している学生たちが、その専門性を生かすとともに、地域に対する理解と学びを深めることをねらいとした。

本論は、この取り組みの経過を検証するなかで、この「造形ワークショップ」の今後の方向性について考察するものである。

[キーワード：地域貢献，子どもと造形，コミュニケーション，ボランティア活動]

1. はじめに

○ 実施経過概要

- ・「2016 サマーフェスタのワークショップ」について
(第1回打ち合わせ) 2016. 3.14 (月)

びわこ学院大学 平居研究室

- ・サマーフェスタの概要説明
- ・ワークショップの前年度までの経過説明
- ・本年度のワークショップについて
- その他

- ・イルミネーションテーマ決定『あなたの想い』の連絡
(実行委員会より) 2016. 3.18 (木)
- ・ワークショップに向け試作品の検討及び制作
2016.4.13 (水), 20 (水), 27 (水), 5.11 (水)
- ・「2016 サマーフェスタのワークショップ」について
(第2回打ち合わせ) 2016. 5.16 (月)

東近江市ひばり公園 みすまの館

- ・本年度実施ワークショップについて試作品もとに検討し、決定する。

- (1) 募集方法について
 - ・募集対象・募集要項の作成
- (2) 材料収集 (ペットボトル) について
- (3) ワークショップの概要 (日程・内容)
- (4) 設置方法について (概要)
- (5) その他 準備に向けての連絡調整

- ・ワークショップに向けペットボトルの回収計画及び募集ちらし作成

- ・ワークショップに向け制作材料の計画

- ・台への設置案の検討

(実行委員長に連絡)

- ・「2016 サマーフェスタのワークショップ」について
(第3回打ち合わせ) 2016. 6.19 (日)

東近江市ひばり公園 みすまの館

- ・ワークショップでの制作作品の設置方法について
決定

「2016 サマーフェスタのワークショップ」

(一日目) 2016. 6.25 (土)

「2016 サマーフェスタのワークショップ」

(二日目) 2016. 6.26 (日)

「2016 サマーフェスタのワークショップ」

作品の設置 2016. 7.10 (日)

作品の設置及び確認 2016. 7.17 (日)

- ・ペットボトル協力のお礼状 2016. 7.19 (火)

- ・「2016.コトナリエプレオープン」・ワークショップ
アンケート *「光の道」作品の設置でペットボトル
の中の切り絵が乾燥して絵が分かりにくくなっている
のを発見。 2016. 8. 2 (火)

- ・ワークショップ作品の修復及び再設置の準備
2016. 8. 3 (水)

- ・ワークショップ作品の修復及び再設置
2016. 8. 4 (木)

- ・「2016.コトナリエ開催」・ワークショップアンケート
2016. 8. 6 (土) ～ 2016. 8.15 (月)

- ・「2016 サマーフェスタのワークショップ」(アンケート
回収次年度に向けて) 2016. 8.17 (水)

2. ワークショップのねらい (達成目標)

- ① 地域の祭典の理解を深め、地域貢献の意義を知る。
(地域貢献)
- ② 対象の小学生の発達段階に合わせた企画、実施ができる。
(子どもと造形)
- ③ 準備から完成までの過程で、地域の方との調整力を養う。
(コミュニケーション)
- ④ ワークショップを楽しんでもらうとともに、設置後の鑑賞まで責任を負う。
(ボランティア活動)

3. ワークショップ (実施内容)

① 地域の祭典の理解を深め、地域貢献の意義を知る。 (地域貢献)

○「コトナリエ」について

コトナリエ サマーフェスタ（以降“コトナリエ”）とは湖東地域の活性化を目的として、東近江市商工会青年部 湖東支部・湖東地区まちづくり協議会の構成員からなるコトナリエ実行委員会を主体とし、当地域の各団体及び協賛企業、ボランティアの協力によって開催しているイベント。毎年8月の前半に催されており、湖東地域はもちろん県内・県外からも多数の方が来場する。

○コトナリエの理念「3つのE」

理念は「光で地域をつなげ輝かせる」こと。

- ・Ecology (自然環境保護運動)
- ・Economy (経済)
- ・Education (教育)

コトナリエ実行委員会ではこの3本柱の上にこそ、人々にとって恒久的な幸せをもたらす活力が生まれると考え、その実現を目指している。

コトナリエの電力は100%廃食油から生成されるBDF燃料を使用した発電機で賄っている。2006年から実施され、ごみの分別など数々の環境に配慮している。

バイオディーゼルとは、バイオディーゼルフューエルの略で、生物由来油から作られるディーゼルエンジン用燃料の総称であり、バイオマスエネルギーの一つである。諸外国においてバイオディーゼルとして規格化がなされているのは脂肪酸メチルエステルのみであるが、厳密に化学的な定義はない。原料となる油脂からグリセリンをエステル交換により取り除き粘度を下げる等の化学処理や改質処理を施し、ディーゼルエンジンに使用できるようにしている。Bio Diesel Fuelの頭文字をとってBDFと略されることもある（BDFは登録商標）。

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
(2016/12/12 09:17 UTC 版)
(バイオディーゼル燃料 から転送)

○コトナリエの始まり

2004年、特別な観光資源を持たない町であった湖東町。次年の2005年に湖東町が東近江市への合併により湖東ということばもなくなってしまうことに当時の湖東商工会青年部員たちが危惧し、湖東ということばをなんとか残そうと話し合った結果、従来、青年部が主体で行っていた「湖東夏まつり」をリニューアルし、会場の10万平方メートルある「ひばり公園」を11万球の電球で飾り、神戸市が主催しているルミナリエをヒントに、湖東（コトウ）＋ルミナリエ（イタリア語で「祝祭のためのイルミネーション」の意味）を造語で生まれた言葉。夏のイルミネーションイベント『コトナリエ』として開催。人手や道具が無く手探りで準備したが、初回にも拘わらず大反響があり、開催初日5000人が来場。開催期間を通して15000人の来場者を迎えた。今年で13回目を迎える。

② 対象の小学生の発達段階に合わせた企画、実施ができる。 (子どもと造形)

○試作品で検討

試作 1 (小学生 1, 2, 3年対象)

透明な筒に光を通すシートを貼って表現する。形は子どもが想いに合わせて切り取る。

○材料：カラーダック（・特殊加工の塩化ビニルシート・ガラス、ミラーコート紙、プラスチックにのりなしでつけられる。・あか、オレンジ、きいろ、グリーン、スカイ、ブルーの6色。・光を透過する。）、ペットボトル（コップ）○用具：はさみ ○資料：イラスト

課題 ①屋外での展示に耐えられない。

②ペットボトルを限定する必要がある（表面に凹凸がないことが条件）

試作 2 (小学生 1, 2, 3年対象)

ペットボトルに油性ペンで子どもがイラストや模様を思い思いの色を付けて表現する。



○材料：油性マジック12色、 ペットボトル

試作 3 (小学生 4, 5, 6年対象)

黒ケント紙に形を取り、その形を切り抜き、裏からセロファンを貼りステンドグラス風にして表現する。直径80cm(252cm)×150cm

○材料： 黒ケント紙、半透明紙、透明樹脂板、樹脂製キャップ上下 色セロファン5色(赤、緑、青、黄) スティック糊○用具：カッター台、カッター、はさみ

試作2と試作3をワークショップ制作作品とする。



光源は、LED 電球 (25w) *LED は、

透明シートの枠が薄く
野外の展示に持たない



炭酸入りの廃ペット
ボトル 1.5ml の枠を
使用し強度を増す。

③ 準備から完成までの過程で、地域の方との調整力を養う。 (コミュニケーション)

今回は、3回の事前打ち合わせをもとに、実施した。
尚、細部にわたっては、そのつど、メールで連絡し合った。

○第1回打ち合わせ 2016. 3.14 (月)

実行委員長とゼミ担当 (研究室)

- ・過去実施されてきたワークショップの概要について
実行委員長からお話を聞く。
- ・本年度のワークショップに向けての依頼を受ける。

○第2回打ち合わせ 2016. 5.16 (月)

実行委員長、イルミネーション担当部長、
3回ゼミ生 (5名)、ゼミ担当 (みすまの館)

ゼミで検討したワークショップにおける制作について

1 試作品をもとに提案

①試作品2をもとに

- ・低学年が楽しく自由に描けてカラフルで美しい。
(この方向で決定)
- ・設置方法で、どういう形にするか、ゼミで検討した家
形案を提案する。(この方向で決定、具体的な形や大き
さ等については、ゼミで検討し後日設計図を実行委員
会へ送る*これをもとに、実行委員会で設置枠を制作)
- ・また、作品が引き立つ光源についても担当部長に願
いする。

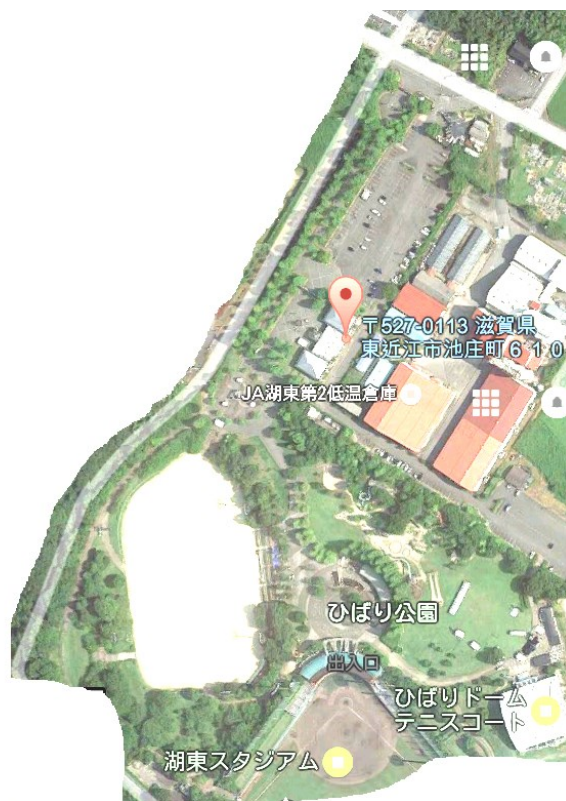
②試作品3をもとに

- ・高学年にとっては、制作に適度な抵抗もあり仕上がり
もセロファンが各色が光に映えて美しい。

- ・野外設置のため、防水方法についての検討がされる。
セロファンの各色が光に生えて美しい
- ・作品をラミネートしてみてもどうか。*材料に色セロ
ファンを使用しているため、熱に耐えない。
- ・ペットボトルを使用し、その中にいれてみてはどうか。
*できるだけ大きいもので、表面に凹凸のないもののが
条件*環境にも配慮しており、この方向で決定される。



ひばり公園前景

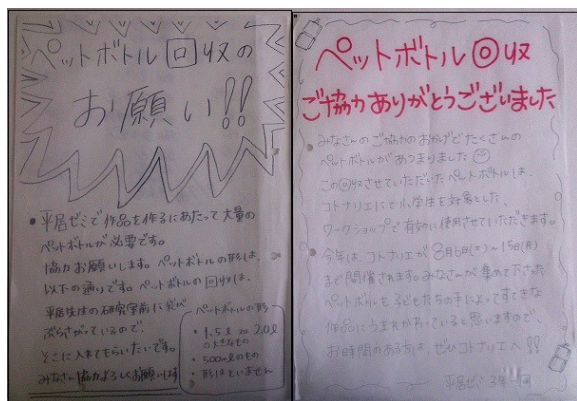
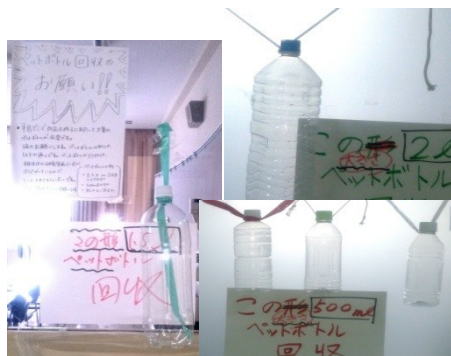


ひばり公園全景

- ・設置場所については、「ひばり公園」内を見て回りいく
つか候補地を決める。決定については実行委員会にお
任せする。
- ・設置方法についても、設置場所との関係で異なるので
同じく実行委員会に任せる。

○ゼミで募集要項をつくる。実行員長に確認をとり、実
行員会から地域の小学生を対象に募集してもらう。

○ペットボトルの回収については、地元は、実行委員の
方で、大学はゼミで呼びかける。参加者にも協力を呼
びかける。



他、ゼミから地元のスーパーにも協力をお願いする。
大学内では、ちらしを配布し教授会でもみなさんに協力をお願いする。回収はゼミ室前に見本を示し分別して袋に入れてもらう。

コトナリエ サマー フェスタ2016

『ぼく・わたしの宝物』

～思い出つくり～

ワークショップ参加者募集

東近江の夏の風物詩となりました光と輝きの祭典『コトナリエ サマー フェスタ』が開催されます。小学校児童のみなさんに『あたりづくり』に参加していただき、コトナリエにより親しみをもってもらえたらと思い、今年もワークショップを企画しました。たくさんの方の参加をお待ちしております。

日時 6月25日(土) 午前9時～12時
6月26日(日) 午前9時～12時
場所 東近江市ひばり公園
対象者 湖東地区小学校の全児童

作業内容 空の1.5ℓと500ℓのペットボトルを、切り絵やセロハン、マーカーなどで飾り、『ぼく・わたしの宝物』(①光の道と、②輝きの家)をつくる。

持ち物 はさみ、筆記用具※(空のペットボトルの回収にご協力ください。)
※ワークショップ担当(ひむこ学院大学造形ゼミ3年生)

締め切り 平成28年6月17日(金) 受付午前9時～午後5時まで
申込先 コトナリエ実行委員会事務局(東近江工業商業 支部内) 123年ペットボトルの部
FAXまたは、持参により申し込んでください。

ワークショップ参加申し込み書

『コトナリエ サマー フェスタ2016』ワークショップ

No.	参加者名	学年	参加希望日	保護者名	連絡先(電話番号)
1					
2					
3					

提供いただきました個人情報はコトナリエの事業にのみ使用いたします。

ワークショップ募集要項

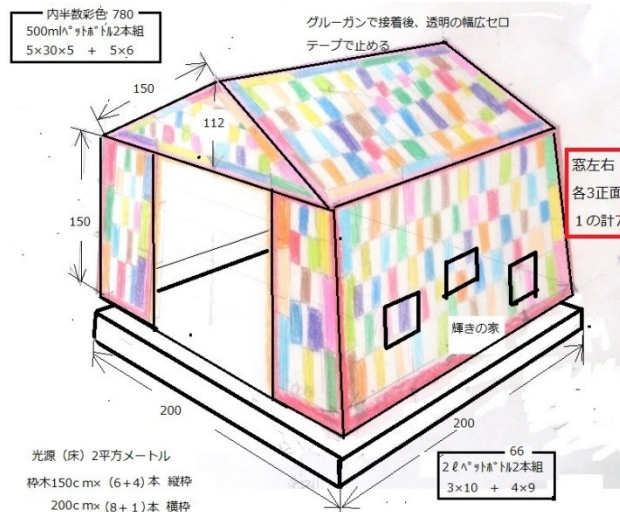
『ぼく・わたしの宝物』～思い出つくり～
＜456年光の道、123年輝きの家＞の制作

○第3回打ち合わせ 2016. 6.19(日)

東近江市ひばり公園 みすまの館

実行委員長・イルミネーション部長・ゼミ担当

・ワークショップでの制作作品の設置方法について確認



試作2 設置設計図

*この設計図を基に、実行員の専門の大工さんに木枠の制作を依頼することになる。



設置案(速乾性強力ボンド)

*調整の結果、弱いのでビス止めすることになる。

○ペットボトルの回収とともに、材料の準備をする



ペットボトルのキャップ部分を切り取り、セロテープで連結する。
(2ℓと500ml)
キャップ部分を切り取り (1.5ℓ)
1.5ℓ (140本)
500ml2本セット (780組)
202本セット (66組)

○ワークショップ当日に向けての準備

1. 材料・用具

セロテープ、グルーガン、ケント紙(黒) トレーシングペーパー、のり、色セロファン7色、油性マジック 12色、鉛筆、消しゴム、はさみ カッター(実行委員会で購入) カッター台(大学備品を利用)、

2. 説明資料

＊制作手順・用具使用法
完成見本・設置予定図

①『光の道』のつくりかた

○黒色の画用紙に絵をかく



自分の好きな絵をかく。 (例: 花、魚、お花、いも、お、アヒル、などでもよい)

②書いた絵を貼ってみよう



カラーセロファンを貼って色をつけよう



③カラーセロファンを貼って色をつけよう



ほかに、ペットボトルのいろいろな色の油性ペンで好きなイラストをかく。②『輝く家』の壁や屋根にするよ。

リッターナイフのつかい方



この包を開くときは、必ずこのように開く。この包を開くときは、必ずこのように開く。この包を開くときは、必ずこのように開く。

しょうき、うがいはあてないようにしよう



まがったせんをきるときは、かみもうごかしながらきよう



まがったせんをきるときは、かみもうごかしながらきよう

コトナリニ サマー フェスタ2016

『ぼく・わたしの宝物』

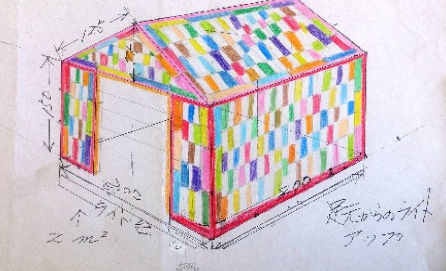
～思い出つくり～

ワークショップ

日時 6月25日(土) 午前9時～12時
6月26日(日) 午前9時～12時
場所 東近江市ひばり公園
対象者 湖東地区小学校の全児童

作業内容 空の1.5リットルと500ミリのペットボトルを、切り絵やセロハン、マーカーなどで飾り、

持ち物 はさみ、筆記用具※(空のペットボトルの回収にご協力ください。)
※ワークショップ担当(びわこ学院大学造形ゼミ3回生)

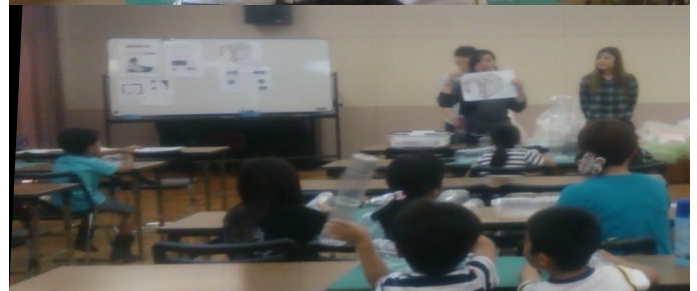


＊参考のイラスト資料



○ワークショップ当日

参加者への制作についての説明
および、制作支援



○『輝きの家』の制作



○『光の道』の制作

○材料づくり (ペットボトルのカットと接合)

＊数が多く地域の実行
委員の皆様および、
本大学のボランティア
学生にも手伝ってもらう。



④ワークショップを楽しんでもらうとともに、設置後の鑑賞まで責任を負う。 (ボランティア活動)

○作品設置

当初は、設置については、実行委員会の方に、本ゼミの案に沿って設置していただくことになっていたが、2日間の設置日に本ゼミからもボランティア参加し、『輝きの家』の取り付けをビスで行った。

＊ビス穴をあけるため温めた半田ごてを使い、取り付けには充電式のインパクトドライバーを使用した。ゼミ生も係の電気工事士さんの指導のもと、はじめて使うドライバーにも慣れ、楽しそうに取り付け作業をしていた。

なお、『光の道』については、実行委員の方々に設置していただいた。



設置終了画像

○ペットボトル協力の礼状作成とお礼 (案内を含む)

＊大学及び協力スーパーに向けて

平成28年7月11日

びわこ学院大学の皆さまへ

びわこ学院大学平居ゼミ3回生

回収ペットボトルのご協力ありがとうございました。

多くのペットボトル (1.5l、2l、500ml) の回収に、ご協力いただき誠にありがとうございました。

ご協力いただきました回収ペットボトルは、去る6月25日(土)26日(日)のコトナリエ(東近江市)『ひばり公園みすまの館』での本ゼミによる小学生を対象にしたワークショップで有効に使わせていただきました。

ワークショップでは、

- ①『光の道』
(1.5リットルペットボトル使用)と、
- ②『輝きの家』
(2?と500mlペットボトル使用)を制作していただきました。



作品は『コトナリエ』で展示される予定です。

尚、『コトナリエ』は、下記の予定で開催されます。御覧いただければ幸いです。

8月2016年 8月6日(土)？8月15日(月)。

8月6日 16:30? 21:30 イルミネーション点灯は19:00頃予定
花火 20:30頃予定 ※開催初日は、運営協力金(中学生以上 1人300円)

8月7日? 15日 18:30? 21:30 イルミネーション点灯は19:00頃予定

会場 滋賀県東近江市ひばり公園 (滋賀県東近江市池庄町 610 番地)
事務局 東近江市南湖東支部 0749-45-2571 www.kotonarie.com (予約は2016)

○アンケート実施

コトナリエ ワークショップ『輝きの家』『光の道』 アンケートをお願い

みなさんのおかげで、すばらしい作品で、夜空を照らすことができました。大変ありがとうございました。また、今回は、初めての取り組みで、様々な面で皆様には大変お世話になりました。

今後の取り組みに向けて今回のワークショップを振り返りたいと思いますのでアンケートにご協力くださいますようお願い申し上げます。



『輝きの家』

(500ミリリットルのペットボトル2本を接合したもの2リットルのペットボトル2本を接合したもの)の面に色ペン(油性)で絵や模様をかきました。)

その後、多くのみなさんのご協力で家型の1500本あまりの作品を木枠にビスで止め、ライトアップをしていただきました。(小学生のワークショップ作品を中心に大人の方、びわこ学院大学生などみなさんのご協力がありました。)



『光の道』

(1500ミリリットルのペットボトルの中に、切り絵をして色セロファンを貼って色をつけました。)

その後、多くのみなさんのご協力で目の高さの木の台に、100本あまりの作品を間隔をとって並べ中からライトアップしていただきました。(小学生のワークショップ作品を中心に保護者の方、特別養護老人ホーム『菊水苑』のみなさんのご協力がありました。)



2016. 8 びわこ学院大学平居ゼミ3回生

コトナリエ ワークショップ『輝きの家』『光の道』アンケート

小学生のみなさんへ

() 小学校 () 年 男・女

1. どのかがりづくりをしましたか ○で囲む(ア・イ・ウ)

ア、『輝きの家』(ペットボトルに色を塗ってデザイン)

イ、『光の道』(切り絵にセロファンを貼ってペットボトルに入れる)

ウ、『輝きの家』と『光の道』の両方

2. つくったかぎりに題名をつけてください。

()

3. つくっていて楽しかったですか ○で囲む(ア・イ・ウ・エ)

ア、楽しかった イ、まあまあ楽しかった ウ、あまり楽しなかった

エ、楽しなかった

(楽しかったこと)

(楽しなかったこと)

4. かざりづくりは、うまくできましたか ○で囲む(ア・イ・ウ・エ・オ)

ア、とてもうまくできた イ、うまくできた ウ、まあまあうまくできた

エ、あまりうまくできなかった オ、うまくできなかった

(うまくできたこと)

(うまくできなかったこと)

5. 大学生のせつめいは、わかりやすかったですか

ア、わかりやすい イ、少しわかりやすい ウ、少しわかりにくい エ、わかりにくい

(わかりやすかったところ)

(わかりにくかったところ)

6. 来年はどんなものが作りたいですか

()

＊保護者(大人)の皆様へ

今回のワークショップについて忌憚のないご意見、ご感想をお聞かせください。

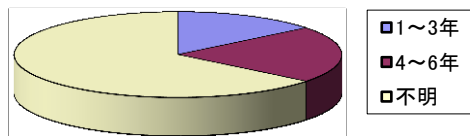
ご協力いただきありがとうございました。

2016. 8 びわこ学院大学平居ゼミ3回生

○アンケート結果

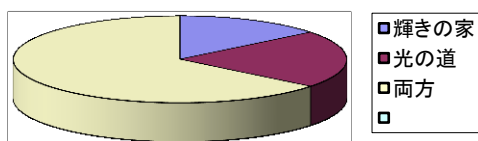
学年

1～3年2人・ 4～6年3人 ・未回答9人計14人



作ったもの『輝きの家』2人・『光の道』

8人・『輝きの家』と『光の道』両方 9人



テーマ

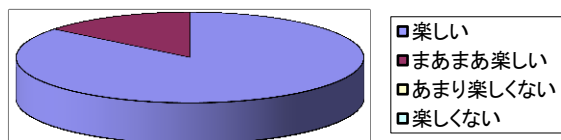
りゅうちゃん りゅうちゃん・海の中・マリオ・パンダ・
ペンギン・国旗・カラフル・ダークナイト他

○つくって楽しかったか

ア 楽しかった	12
イ まあまあ楽しかった	2
ウ あまり楽しくなかった	0
エ 楽しくなかった	0

楽しかったこと

・色塗り・セロファン



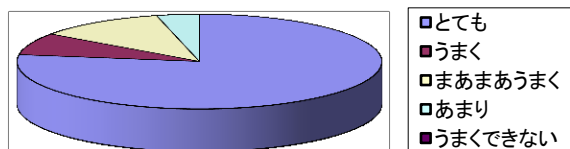
彩り・絵をかく・切り抜き

○うまくできたか

ア とてもうまくできた	5
イ うまくできた	2
ウ まあまあうまくできた	3
エ あまりうまくできなかった	1
オ うまくできなかった	0

楽しくなかったこと

・うまく切り抜けない



アンケート結果 (8月2日) プレオープン

保護者の感想

- ・ふれあいサロンで皆さんで作りました。皆さん一生懸命で、「私にできるかな」と言いながら楽しんでおられた。
- ・ワークショップに参加したことにより、コトナリエに来る楽しみが一つ増えて良かった。
- ・ふれあいサロンの参加者の皆さんとても楽しく参加（公民館で）。見学も大きな楽しみ。
- ・大学生の説明がよかった。暑い中、飾り付けている姿に感動した。
- ・細かき作業が子どもだけでは無理なので、子どもだけで作れるものがない。
- ・細かき作業は、大人の仕事となってしまいましたが、子どもたちでできることを楽しんでいました。
- ・光の道、ペットボトルの中でまわっていて残念。

アンケート結果 (8月6日) 開催初日

保護者の感想

- ・とても良かった・きれいだった。
- ・きれいだった。・ペットボトルという地球に優しい作品だと思った。・家がお菓子の家みたいにキレイでした。・どうやって作ったのか知りたい。
- ・きれい
- ・ペットボトルの底に小さい穴をあけておけば、水がたまらずよかった。・きれいでした。・1500本ってすごい。・ペットボトルの中に水が入っていて光が、反射してよかった。・ペットボトルにたくさんかいてあってうれしかった。・個々の作品が、誰が制作したのかはつきりわかるようなプレートがあればよい。
- ・『光の道』『輝きの家』などのプレートがあってもよい。

来年作りたいものは

イルカ 似顔絵 シャンパンシャワー ダンボールの木
ダンボールの滑り台 遊び場 列車

アンケート実施 (『輝く家』の前で)

○ワークショップ作品の修復及び再設置

プレオープンで『光の道』の、ペットボトルの中の黒の切り紙が、湿気と乾燥の繰り返しでまるまわっていて、形が見えにくくなっているのを発見した。

急遽、ゼミ生全員を招集し修理にあたった。＊140本

材料 トレーシングペーパー15cm×30cm

プラバン（厚さ）0.5mm 15cm×30cm

- ① 設置作品を全て取り外す。
- ② 中の切り絵作品にトレーシングペーパーを裏貼りし、形を正常に戻す。
- ③ それを、付けペットボトルの内側に再度入れ、プラバンで挟む。
- ④ 再度設置する。



「修繕作業」



『輝きの家』

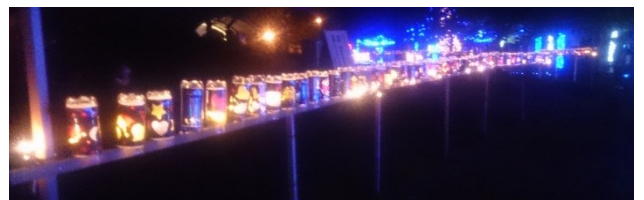
会場の入り口入ったところに設置されており、多くの方々に鑑賞していただいた。特に、子どもたちは、自分が描いたペットボトルを見つけては、「ぼくが、これをつくったのだよ!」とか得意げに話している様子や、この輝きの空間に入ることそのものや、窓から顔をのぞかせるなどして楽しんでいた。また、入り口前に順に並んで、お父さんやお母さんなどに家族に写真を撮ってもらい子どもづれや、若者のグループが多く見られた。制作については、気軽に好きな絵がかけられるので、楽しそうに一

人数本制作していた。1年～3年以外の参加者も協力500ml2本組が、250組202本組100組完成した。

予定の数に向けて、菊水園の方に500ml2本組72組、大学に持ち帰って500ml2本組140組202本組20組を協力していただくことになった。大学では、1回生の子どもと図画工作受講生に協力を仰いだ。その後、窓を付ける位置や大きさを工夫し、ペットボトルの配置を彩色と無色交互に設置するなど、設計に一部変更を加えた。



『光の道』



ワークショップ参加集計		
学齢	6/25人数	6/26人数
年少	0	1
年中	1	0
年長	2	0
小1	3	3
小2	4	12
小3	5	7
小4	2	3
小5	0	3
小6	0	4
子ども計	17	33
保護者計	12	22
合計	29	55

『光の道』

公園の小川に沿って設置され、作品の光が流れる水に美しく映り込んでいた。自分が作った作品を家族や友だちに紹介する人や、ゆっくりと一つひとつの作品を鑑賞していく人などが見られた。

制作については、予定していた小学生だけでなく参加者のほとんどの人が制作し90本完成した。その後、福祉施設の菊

水園の皆様が、ワークショップに参加いただいた職員の方々のご指導のもと、50本制作協力していただき140本が完成した。ワークショップでは、予定していた4年～6年生だけでなく1年～3年の子どもゼミ生や保護者の支援を受けながら楽しそうに制作していた。完成したら各自点灯台に載せ出来栄を確認していた。2日のプレオープンで発見した破損も修繕を終え再設置し、試点灯を実施全員で確認し無事に開催当日を迎えることができた。

4. 考察

① 地域の祭典の理解を深め、地域貢献の意義を知る。

(地域貢献)

この地域の光の祭典である「コトナリエ」の由来や、地域の思いを、イベントの一つであるワークショップや設置のボランティアを地域の方々と共に実践する中で、地域の方々の熱い思いを直接肌で感じたことと思う。



② 対象の小学生の発達段階に合わせた企画、実施ができる。

(子どもと造形)

○子どもの反応 (ゼミ生の観察より)

- ・色塗りがたのしい。
- ・切り絵、塗り絵共にもすぐやりたそうにしていた。
- ・もくもくと楽しそうに集中していた。
- ・二日続けて参加した子もいて慣れてきて楽しそう。「昨日したから余裕！」カッターで、丸を切るのが難しい。
- ・1時間半は同じ作業は待たなかった

○保護者の反応 (ゼミ生観察より)

- ・笑顔で子どもと一緒に楽しんでいた。
- ・自分のこどもにいいものをつくってもらおうと、親が代わりに作っている面もあった。
- ・子どもたちが、はやく切り絵をしたいといっていて、切り絵をはやくしてほしいと声もあった。
- ・子どものやり残しを手伝っていた。
- ・子どもより自分が楽しんでいる様子もみられた。
- ・作品を持って帰りたい人もいた。
- ・自分も一つ作りたい人もいた。

○試作品について

各自が制作させたい作品を一つ作り提案。

A「切り絵スタンド」(セロファンで色)と、B「ペットボトルに塗り絵」をすることに決定。Aは、カッターを使用するために高学年対象に Bは、低学年対象に提案することになった。

色をつけるところとその間の区別しやすいようにした。作品の長さを考えながら制作した
自分がつくったことで、どの部分が大変か子どもたちに、どのように教えたらいかがか分かった。

○制作方法の解説書の作成について

切り絵については、制作の手順および、カッターの使い方についての資料を準備

子どもたちや保護者分かりやすいように絵をまじえて表した。また、子どもたちの気を引くように色をつけて表した。
(作成者)

- ・今回は、制作作品を2点と分けたが、一点の作品でその中で、発達段階に即した制作内容も考えられる。
- ・子どもたちが、更に、意欲を持って、達成感が得られるような作品制作の企画を考えていきたい。

○募集要項の作成について

『ぼく・わたしの宝物』と魅力のあるテーマを考え、基本的な日程、場所はもとより、『光の道』『輝きの家』と制作作品のネーミングと作業内容や持ち物についてわかりやすく入れる。完成見本の画像などを入れ、子どもの感性に訴える。

③ 準備から完成までの過程で、地域の方との調整力を養う。

(コミュニケーション)

- ・「打ち合わせ」では、試作品をもとに、どのようなコンセプトで作るかを説明。実行委員長の方とイルミネーション部長の方の貴重なご意見を参考に実施内容を決定した。
- ・展示スペースを見学し、設置場所について検討した。希望をいくつかだしあとは、実行委員会にお任せすることになった。
- ・今後、ワークショップの日程について調整した。なお、当初、設置については、実行委員会にお任せしたためワークショップ後の日程については、予定にはなかった。後日連絡をいただき、ボランティアとして参加することにした。
- ・その他、詳細については、その都度、メールで連絡し合った。

- ・今回は、ゼミ生の日程調整に苦労した。今後、企画から、実施、設置、当日アンケートまで行事全体の中での実行委員会との事前調整を密にしていけることが必要である。
- ・材料収集について (多量のペットボトルが必要)

ゼミでは、依頼文を作り、大学内、友だち、地域のスーパーなどをお願いした。また、実行委員会では、地元の回収センターより回収手間をかけて洗って準備していた。なお、切り絵スタンドグラス用の1.5ℓの炭酸飲料専用のペットボトルは強度もあり、適材であるが、限定されているため、回収には、手間がかかった。参加者の持参材料にすることも考えられる。

- ④ ワークショップを楽しんでもらうとともに、設置後の鑑賞まで責任を負う。 (ボランティア活動)

今回、プレオープンで、展示作品の破損を発見することができ、開催日までの日程で急遽修理することができたが、設置後7/17（日）～プレオープン8/2（火）～コトナリエ開催8/6（土）～8/15（月）の長期間野外に設置したままなので、強度のある作品の企画をするともに、その管理を考える必要がある。

ゼミ生の動きより

- ・ワークショップでは、5人のメンバーが、順に交代して、作品制作の説明や進行にあたった。各自がそれぞれの個性で、資料の図や、実物の材料をもとに、身振りを交えながらはっきりとした声で、できるだけわかりやすくと努力していた。
- ・ワークショップの制作中の個々の子どもたちの支援では、難しいはさみやカッターの使い方を、子どもができるだけ、自分ですることを見守りながら必要なところなど危険のないよう手を添えるなど、丁寧に対応していた。
- ・おかあさんに、泣きじゃくりながらだだをこねている子に対し、やさしくなだめながら、その子ができることを見つけ、その作業を見守りながら、落ち着かせていた。
- ・修繕作業では、緊急の招集にもかかわらず、全員が参加しワークショップ参加者の完成したときの喜びの顔を思い浮かべながら集中して作業した。修繕後のライトアップで達成感のある表情を見せていた。

5. 最後に

今回本ゼミに『造形ワークショップ』参画の機会を与えていただき、きっかけをつくってくれた本大学の学生ボランティア部（代表 茂田 拓哉君）、声をかけていただいた本学学長（賀川 昌明教授）、終始精力的に活動を支援していただいた実行委員長の（中村 剛様）、設置の効果的な照明を考案していただいたイルミネーション部長の（村田 勝様）、ワークショップに参加いただいた多くの皆様、ペットボトルの回収にご協力いただいた多くの皆様、設置を担当していただいた実行委員の皆様、開催日のアンケートにご協力いただいた皆様に心から感謝する。

そして、この体験をもとに本ゼミ生（井口 恵利花、市居 奈央、奥田 亜弓、山田 樹、渡辺 昂）の5名が、力強く飛躍してくれることを願う。

〔報 告〕

幼児の体力・運動能力に関する報告—A園を対象として—

奥田 愛子*

本報告は幼児の運動能力の現状を明らかにし、今後の子どもの健康づくりや体力向上への取り組みの基礎資料を得ること、および子どもの運動遊び促進のための具体的資料を得ることを目的とした。A園4歳児21名および5歳児14名の幼児運動能力テストを行い、以下のことが明らかとなった。①幼児運動能力調査の総合評定の平均値は、滋賀県全体での平均値を上回る結果であり、子どもの運動発達は概ね期待される状況にあった。②各種目の評定すべてにおいて標準値に達していたことから、子どもの運動能力のバランスは概ね期待された状況にあった。③しかしながら、「行動を起こす能力」指標の種目と「行動を調整する能力」指標の種目において、4歳児と5歳児で評定差が広がる傾向からは、「行動を調整する能力」である調整力の向上が課題であると考えられた。

〔キーワード：MKS 幼児運動能力調査、体力向上、調整力、運動遊び〕

1. はじめに

子どもの体力については、「体力・運動能力調査」（文部科学省 2015）からも明らかなように、昭和 60 年ごろから低下傾向にあるといえる。その程度は、たとえば現在の子どもの体力・運動能力結果をその親の世代と比較すると、身長や体重で代表される体格の上回りとは裏腹に、ほとんどのテスト項目において、子どもの世代が親の世代を下まわっている。そして、子どもたちのこのような身体能力の低下は、自身のからだを操作する能力の低下（いわゆる不器用さ）を導く懸念とともに、それらが彼らをモデルとして成長する孫世代へも受け継がれることが懸念される。「人の一生において、幼児期は、心情、意欲、態度、基本的生活習慣など、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期である。幼児は、生活や遊びといった直接的・具体的な体験を通して、情緒的・知的な発達、あるいは社会性を涵養し、人間として、社会の一員として、より良く生きるための基礎を獲得していく」（中央審議会 2007）とある幼児期であるが、ここで経験される多くは、身体を通したものであるといえる。つまり、「動く身体」、「動ける身体」が子どもの育ちを支えるといっても過言ではないと思われる。

このような幼児期の体力・運動能力の状況把握については、幼児運動能力調査によるところが大きい。これは、25m走、立ち幅跳び、体支持持続時間、両足連続跳び越し、捕球、ボール投げの 6 種目からなり、25m走は「行動を起こす能力」「行動を調整する能力」の指標、体支持持続時間は「自分の体を支え引き上げる力」や「行動を持続する能

力」の指標である。そして、ボール投げや捕球は操作系動作、立ち幅跳びおよび両足連続跳び越しは移動系動作で「行動を調整する能力」の指標となっている。これらは脳で判断処理された情報を筋肉（動作）につなげていくという意味では、脳・神経系に関与した動きであるといえる。したがって、幼児運動能力調査の実施は、身体の諸機能の発達状況を把握するためにも意義のあるものと言える。

そこで本調査では、A園の園児を対象とした幼児運動能力調査の分析を通して、子どもの体力・運動能力の発達状況を把握することを目的とした。

2. 方法

調査対象者：A園 37 名（4歳児 21 名、5歳児 14 名）

調査種目：25m走・立ち幅跳び・体支持持続時間・

両足連続跳び越し・捕球・テニスボール投げ

調査時期：平成 28 年 11 月上旬

3. 結果

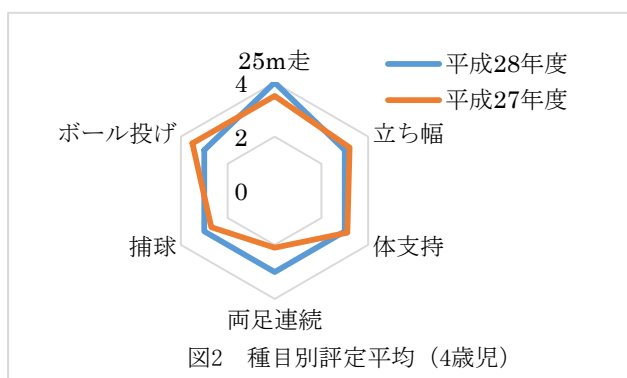
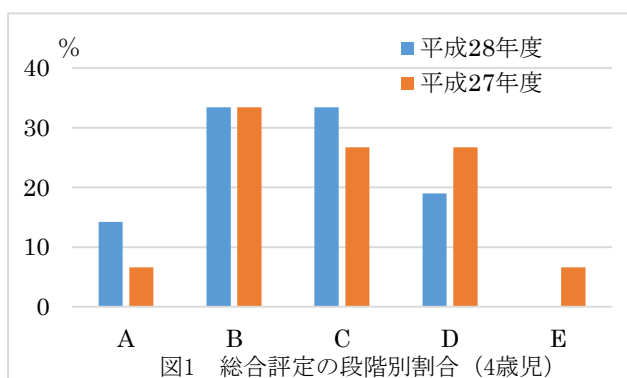
以下に各調査種目の結果を示す。

（1）総合評定について

MKS 幼児運動能力調査判定基準表（2010）にしたがい集計を行った結果、各項目の合計点の平均については、4歳児 19 点、5歳児 19 点であり、いずれも標準値（18 点）を上回った。また、滋賀県全体での平均値（4歳児 17.6 点、5歳児 18.14 点）を上回る結果であった。

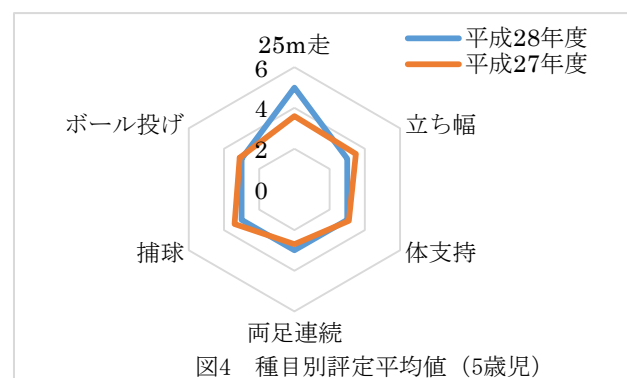
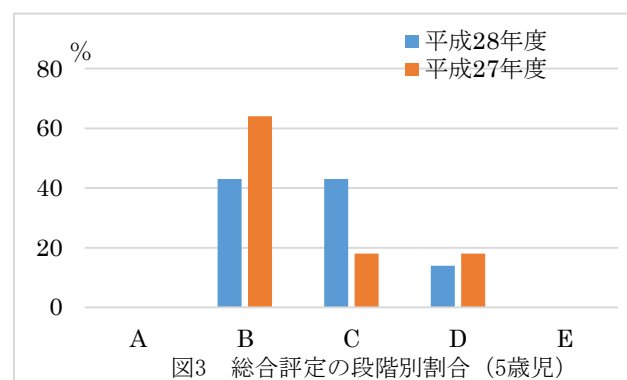
次に、調査種目の結果を年齢ごとに示す。

まず、図1の4歳児については、今年度は80%が標準段階であるC以上に属していた。そして、この傾向は昨年度（66.7%）を上回っていた。このことから、子どもたちの運動発達は、概ね期待される状況にあるといえる。一方で、Dに属する子どもたちも20%近くいることから、個別対応も含め、彼らの運動発達を促進するような取り組みの工夫が必要であると思われる。続く図2の種目別評定平均値では、すべての種目で標準値に達していた（平成28年度評定平均値：25m走（4点）、立ち幅跳び（3点）、体支持持続時間（3点）、両足連続跳び越し（3点）、捕球（3点）、テニスボール投げ（3点））。このことから、走・投・跳の基本的な運動能力について、昨年度よりもバランスのとれた運動発達の状況にあると言える。しかしながら、25m走と



関連が強いと思われる立ち幅跳びとの評定差については、たとえば、立ち幅跳びにおける上体での振り上げ動作と下半身での跳躍動作との連動（つなが）に課題を残していることが想像される。

次に、図3の5歳児では多くがB、Cに属し、A評定には一人も属していなかった。また、80%以上が標準値に達しているが、BとCに属する者の割合が昨年度とは異なり、Cに属する者の割合が増加していた。さらに、図4の種目別評定平均でも25m走（5点）、を除くすべての種目で3点であることから、種目間での評定差が4歳児よりもさらに開いていることがわかる。これらのことから、園児の傾向として行動を起こす能力は高いものの、これを活かす調整力へのつながりが課題であると言える。



（2）各調査種目の結果

次に、幼児運動能力調査6種目の結果について検討する。

①25m走

以下に25m走の評定分布を示す（図5）。

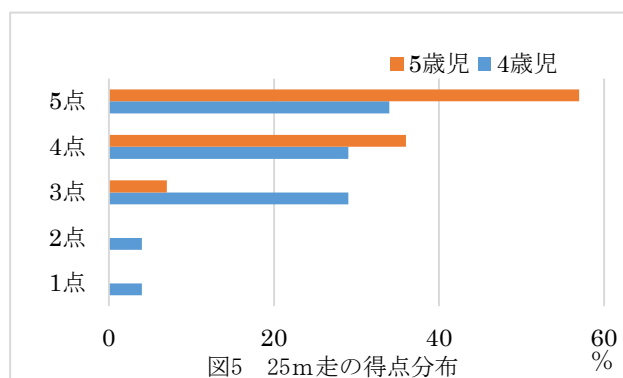


図5より、25m走については、いずれの年齢についても高得点傾向であるが、特に5歳児において顕著な傾向であった。これは、園での取り組みの成果である考えられる。園児たちは、ほぼ毎日の登園直後に「音楽が鳴っている間は走り続ける」といった走遊びを行っており、保育者の所感では、毎日ほぼ全員の園児が自発的に取り組んでいるという。このことで、体力の向上と同時に、走動作が洗練されてきていることが考えられた。

②立ち幅跳び

以下に立ち幅跳びの得点分布を示す（図6）。

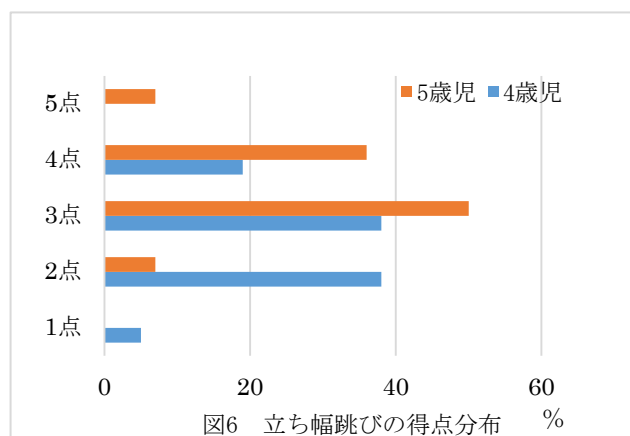


図6より、立ち幅跳びについては、5歳児の多くが3点以上に分布していた。このことは、園での運動遊びの取り組みの成果と言える。一方で、4歳児での2点および3点への分布の多さからは、4歳児にとっての運動遊び内容を検討する必要があると思われる。

③体支持持続時間

以下に体支持持続時間の得点分布を示す（図7）。

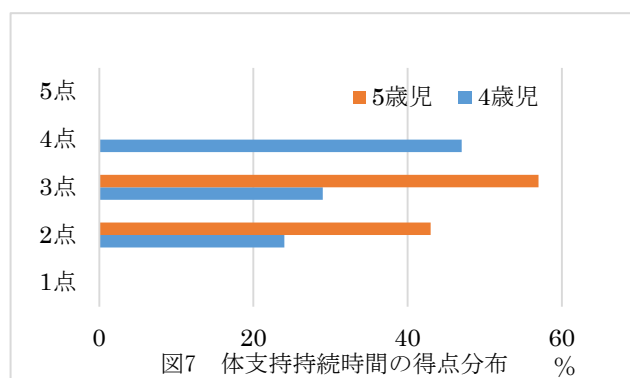


図7より、体支持持続時間では他種目とは異なり、4歳児と5歳児での得点分布の傾向が異なった。体支持持続時間の指標の1つは「自分の体を支え引き上げる力」であるが、5歳児においては、この力を伸ばし切れていないと言えることから、今後の運動遊びに盛り込むべき内容であると思われる。

④両足連続跳び越し

以下に両足連続跳び越しの得点分布を示す（図8）。

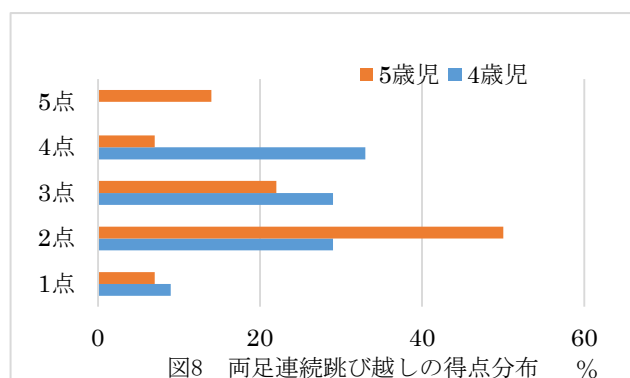


図8より、両足連続跳び越しについても体支持持続時間と同様に、4歳児と5歳児で得点分布の傾向が異なった。特に5歳児については、半数近くが2点に分布していることから、調整力の向上への取り組みが喫緊の課題であると考えられた。

⑤捕球

以下に捕球の得点分布を示す（図9）。

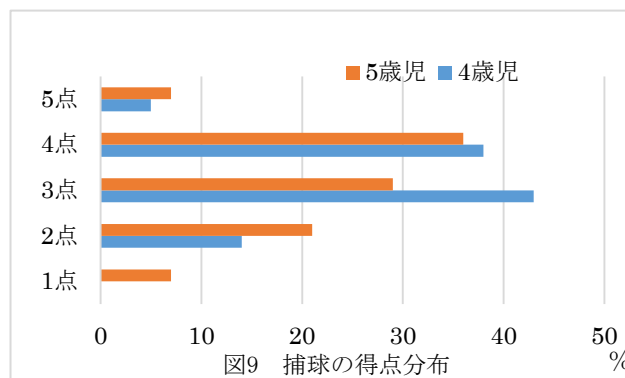
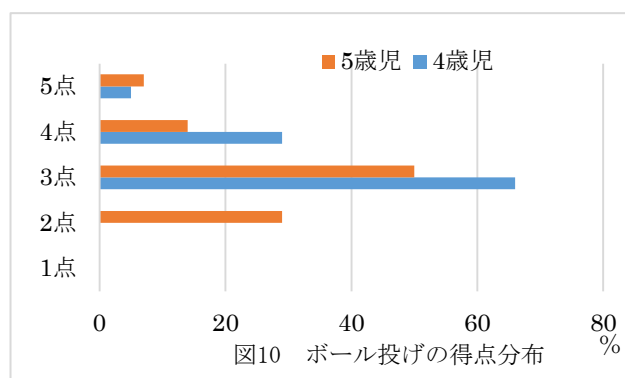


図9より、捕球については4歳児と5歳児において同様の得点分布の傾向であった。しかしながら、5歳児は4歳児に比べて得点分布の幅が大きくなっていることから、遊びの嗜好による差異が想像された。今後の運動遊び指導においては、これらの差異を補償する取り組みが必要であると思われる。

⑥ボール投げ

以下の図10に示すように、ボール投げについても4歳児と5歳児において同様の得点分布の傾向でありながら、5歳児は4歳児に比べて得点分布の幅が大きくなっていた。前述の捕球と連動して、遊びの嗜好による差異が要因であることが考えられた。



4. まとめ

運動能力には、“からだを支えたり、動かしたりする力”である基本的な体力と、“多くの動きを身につけ上手に動くこと”の2つの側面がある。このうち“多くの動きを身に

つけ上手に動くこと”は、感覚を手がかりに、自身の身体をコントロールして動く能力であり、バランスをとることや敏捷な動きおよび基本的な動きを相互にかみ合わせる上で必要な能力であるとされている。そしてこの能力の大きな伸びが期待できるのは、神経系の急激な発達が生じる乳幼児期である。それゆえ、乳幼児期においては、できるだけ多くの動きを経験し身につけることが重要であり、ここでの経験値が幼児期以降の運動発達の礎となるものと考えられる。ところが、子どもの運動遊びの現状としては、体を動かす機会や家庭での手伝いの機会の減少、子どもが体を動かす遊びをはじめとする身体活動を軽視する大人の意識、子どもの遊ぶ時間・遊ぶ場所・遊び仲間の減少等により、子どもが体を動かして遊ぶ機会が減少している（文部科学省 2013）。そのため、子どもが多様な動きを獲得することや、その延長上にある体力・運動能力等を培うことが課題となっている。

たとえば、“一枚板の上をバランスをとりながら歩く”、“的にボールがあたるように投げ方を試行錯誤する”、“雲梯でタイミングよく移動する”—このような子どもの姿は、園内で見られる通常の光景である。これらの運動遊びは、子どもが様々な動きを経験し、身につけることができる絶好の機会である。そして、このような主体的な子どもの身体活動を子どもの日常生活全体の中で確保していくことが、子どもの体力・運動能力の向上へとつながる。一方で、こうした子どもの自発的な身体活動は、保育者の指導力が下支えしている。

本調査の結果より、A園園児の体力・運動能力については、概ね順調な発達状況であることが示された。しかしながら、種目別の評定平均からは、行動を起こす能力は高いものの、これを活かす調整力へのつながりが課題である園児の様子が浮かび上がってきたと言える。「心理的要素を含んだ動きを規定する physical resources である」（体育センター）と定義されている調整力は、身体各部および感覚、知覚などを合理的に動員して複雑な運動技術を生み出す能力とされている。そしてそれは、たとえば「危険を予測して怪我を回避する能力であり、バットやボールなどの用具を操作する能力であり、器械運動を行う能力であり、リズムカルにダンスする能力を指す」（文部科学省 2007）。A園の園児においては、このうち特にリズムカルな動作や用具を操作する力を伸ばすような運動遊びの促進が今後必要であると考えられる。

参考文献

- ・中央教育審議会（2007）子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—（答申）．
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm
- ・文部科学省（2010）体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究．
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/
- ・文部科学省（2013）幼児期運動指針ガイドブック．
- ・滋賀県教育委員会事務局保健体育課（2017）平成 28 年度幼児の運動能力調査結果．
- ・体育科学センター（1973）体育科学センター事業概欄 体育科学センター．
- ・東京都教育委員会編（2012）運動能力の発達と「遊び」の大切さ～運動遊びを通して育つもの～．

びわこ学院大学における滋賀県少子化対策 大学生プロジェクトの取り組み ーマザーレイクびわこ 若鮎世代に育てのこころ育成プロジェクトー

Activities of Shiga Prefecture Declining Birthrate Countermeasure Project at Biwako Gakuin University

内藤 紀代子*・川副 知佐**・平松 恵子***
・杉本 栄子****・溝口 孝子*****

近年、少子化に関連した問題は深刻であり国をあげて対策に取り組んでいる。今年度、滋賀県においても対策の強化がなされ、若い世代にこの問題を提示し、若者が中心となって少子化を考える「滋賀県少子化対策大学生プロジェクト」が計画された。本学の学生もこのプロジェクトに参加し、同世代を中心に地域の人々に啓発する活動を行った。その取り組みの実際と成果を報告する。

〔キーワード：滋賀県，少子化，学生，プロジェクト〕

1. はじめに

我が国の平成 27 年の合計特殊出生率は 1.46 であり、人口再生産に必要といわれる 2.08 を数年間下回り続けている¹⁾。出生率低下の主な要因は、晩婚化の進行等による未婚率の上昇があり、その背景には、仕事と子育ての両立の負担感の増大や子育ての負担感の増大が指摘されている²⁾。厚生労働省は少子化対策推進基本方針の中で、仕事と子育ての両立の負担感や子育ての負担感を緩和・除去し、安心して子育てができるような様々な環境整備を進め、家庭や子育てに夢や希望を持つことができる社会にすることを述べている^{3) 4)}。これを踏まえ、滋賀県では今年度、身近な将来に産み育てを考える若い世代の大学生に「滋賀県少子化対策大学生プロジェクト」が提供された。

本学では教育と福祉の視点から子どもと関わることを専門にした学修を行っているため、その特色を生かしたプロジェクトを学生が教員の指導のもと計画、実施した。その取り組みについて紹介する。

プロジェクトの推進に当たっては、次の少子化対策推進基本方針の基本的視点に立ち実施した。

- ① 結婚や出産は、当事者の自由な選択に委ねられるべきものであること。
- ② 男女共同参画社会の形成や、次代を担う子どもが心身ともに健やかに育つことができる社会づくりを旨とすること。
- ③ 社会全体の取り組みとして、国民的な理解と広がりをもって子育て家庭を支援すること。
- ④ 若者の力になるプロジェクトの計画、実施を行う。

* 教育福祉学部 子ども学科 講師
** 教育福祉学部 子ども学科 講師
*** 教育福祉学部 子ども学科 教授
**** 短期大学部 ライフデザイン学科 講師
***** 短期大学部 ライフデザイン学科 教授

2. 本プロジェクトの概要

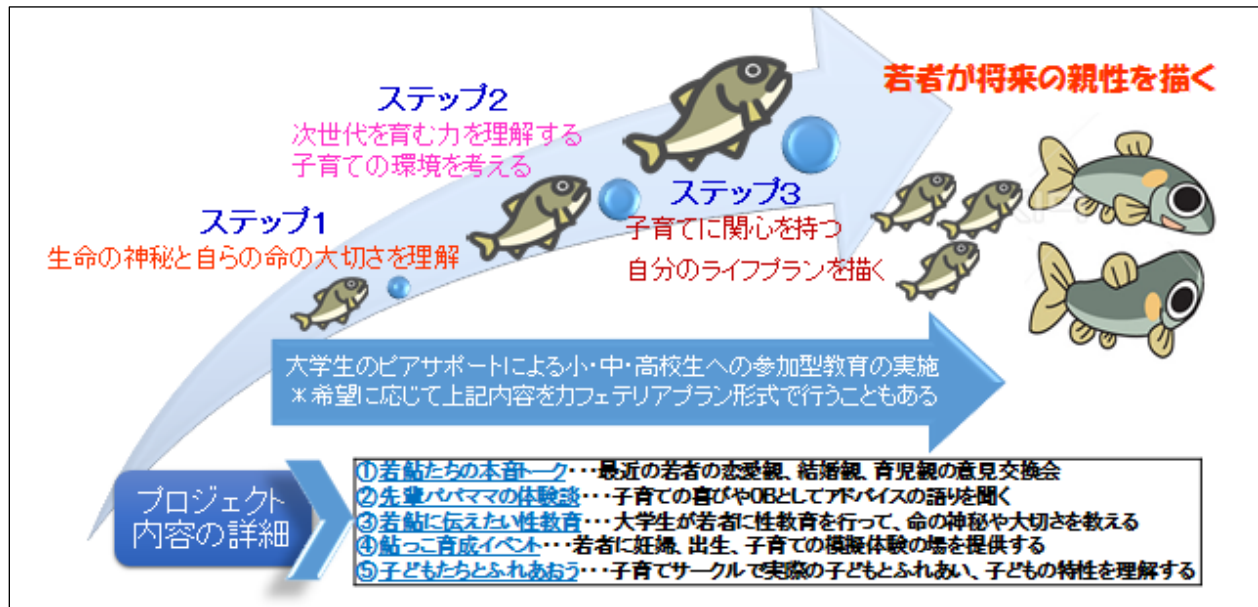


図1 マザーレイクびわこ 若鮎世代に、育てのこころ育成プロジェクト概要図

目的：若者が同世代のピアサポートのもと将来のライフプランに関心を持つことができる。

目標①：生命の神秘と自らの命の大切さを理解する。

目標②：次世代を育む力を理解する。

目標③：自らのライフプランを描く。

以上の目的と目標から、若者が将来の親性や、他の人の親性を支援することを描けるように活動の計画を行った(図1)。

3. 活動内容 (5つの柱で構成された活動)

- ① 鮎たちの本音トーク (若者の恋愛観、結婚観、育児観の意見交流会)
- ② 先輩パパママの体験談 (若者が子育ての実体験を育児中のパパママから聞く)
- ③ 若鮎に伝えたい性教育 (大学生が中高生に性教育において命の大切さを伝える)
- ④ 鮎っこ育成イベント (若者に妊婦、出生、子育ての模擬体験の場を提供する)
- ⑤ 子どもたちとふれあおう (実際に子どもとふれあい、子どもを理解する)

4. 活動の実際

対象者：滋賀県下の小学生、中学生、高校生、大学生、地域住民

実施場所：びわこ学院大学 (講座、紅葉賀祭)
 各教育施設 (こども園、学校等)

プロジェクト担当者：びわこ学院大学で養護教諭、幼稚園・保育教諭を目指す大学生 27 名

(グループ名：BGU 発信 WAKAAYU)

サポート教員：本学教員 5 名

1) ②若鮎たちの本音トークの実際

平成 28 年 7 月 27 日

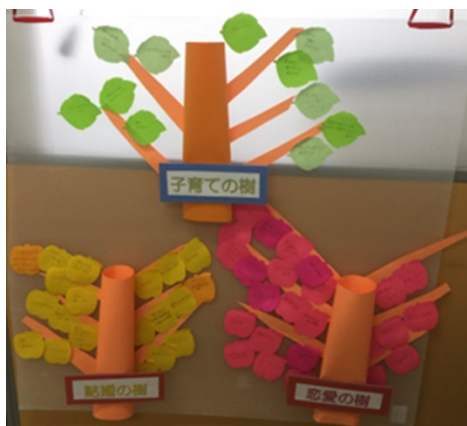
参加者：大学生 8 名

大学生が楽しく自分のライフプランを話し合い、ブレーンストーミングを利用しライフプランのボードを作成した。

具体的には、①理想の恋愛観、②理想の結婚観、③理想の育児観について自分の理想をラベル (付箋) に記入してディスカッションを行った (下記写真)。



ラベル記入と意見交換の様子



ライフイベントの樹の完成（上記写真）

平成 28 年 8 月 18 日

参加者：大学生男子 15 名、女子 10 名

若鮎たちの本音トークを男女に分かれて同作業を行いライフイベントの樹を作成し意見交換を行った（下記写真）。



男女の特徴をディスカッションしている

平成 28 年 9 月 18 日

参加者：男子 10 名、女子 8 人

野外活動を行いながら本音トークを行った（下記写真）。



打ち解けた雰囲気の中で本音を語る

2) 鮎たちの本音トークの整理

若者の話し合った意見ラベルをカテゴリー化し、恋愛の樹、結婚の樹、子育ての樹の 3 つの樹においての特徴をしめた（表 1.2.3）。

表 1. 恋愛の理想に対する意見ラベルのカテゴリー

大カテゴリー 2	中カテゴリー 8	コード 39
恋愛対象への希望	付き合う人	日本人、外国人 など2
	願望	好きな人と付き合いたい など2
	相手の特性	優しい人 など3
	恋愛のルール	浮気はしない など2
お互いの関係	楽しい	一緒にいて楽しい など8
	自己の尊厳	自分らしさを大事にできる など2
	お互いの思いやり	お互いを思いやれる15
	相手との距離	適度な距離感がある など5

その他のコード 15

表 2. 結婚の理想に対する意見ラベルのカテゴリー

大カテゴリー 3	中カテゴリー 6	コード 47
結婚に対する希望	要望	こどもは2人以上ほしい 20代で結婚したい など10
	自我の理想	自分が良いと思う結婚 など2
家庭生活	仕事	共働き など2
	家庭	家庭を大切にする 家庭を幸せにする など6
夫婦の関係性	お互いのこと	尊敬できる 良い距離感 など8
	二人の関係性	支えあえる 助け合える19

その他のコード 7

表 3. 子育ての理想に対する意見ラベルのカテゴリー

大カテゴリー 2	中カテゴリー 4	コード 32
子育てに関する 思い	しつけ	お礼の言える子にしつける 常識の分かる子に育てる 叱るときは叱る など10
	理想	自分の理想を押し付けない 大きな人になってほしい など6
	子どもの意思を 優先	基本子どもの自由にさせたい 何事にも挑戦させてあげたい あんまり子どもを干渉しない など8
親としての 相手への希望	相手に求めるこ と	2人で子育て 協力してくれる 子どもも自分も大切にしてくれる など8

その他のコード 4

3) ②先輩パパママの体験談

平成 28 年 11 月 3 日

参加者：大学生 18 名

協力者：1 組の親子

最近、結婚と出産を経験した親子から大学生が話を聞き、触れ合いなどを通し、育児の現状と楽しさ、やりがいについて理解した（下記写真）。

また、実際の乳幼児に触れ、抱っこやあやして、子育てのプレ体験を行った。

参加した大学生の多くが「子どもが欲しくなった」と感想を述べた。



4) ③若鮎に伝えたい性教育

平成 28 年 7 月 4 日、11 日

対象者：中学生 120 名

ピアサポーター大学生：1 名、指導教員：1 名

平成 28 年 7 月 11 日

対象者：中学生 185 名

ピアサポーター大学生：1 名、指導教員：1 名

平成 28 年 12 月 2 日

対象者：中学生 164 名

ピアサポーター大学生：3 名、指導教員：1 名

平成 29 年 2 月 14 日

対象者：中学生 147 名

ピアサポーター大学生：3 名、指導教員：1 名

平成 28 年 7 月 14 日

対象者：高校生 196 名

ピアサポーター大学生：3 名、指導教員：1 名

平成 28 年 9 月 28 日

対象者：高校生 155 名

ピアサポーター大学生：2 名、指導教員：1 名

平成 29 年 1 月 19 日

対象者：高校生 115 名

ピアサポーター大学生：1 名、指導教員：1 名

大学生がピアサポートとして地域の中学生、高校生に性教育を実施して性感染症や中絶を防ぐこと、自分やパートナーを大切にすること、将来を考えるための保健指導を行った（下記写真）。



先輩大学生の話を興味深く聴く高校生

5) ④鮎っこ育成イベント

平成 28 年 11 月 3 日

参加者：484 名 地域住民

サポート学生：25 名

サポート教員：5 名

大学生による本学の紅葉賀祭での取り組みとして、地域の方に 7 つのイベントブースを提供し参加型学習を実施した。

<7 つの鮎っこ育成イベントブース>

I あかちゃんが大きくなる過程と重さを感じてみよう



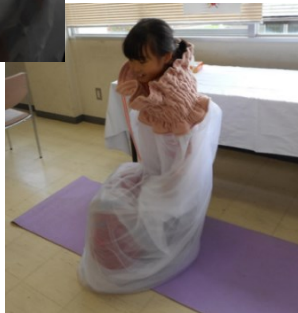
妊娠週数ごとで重さの異なる赤ちゃん人形を触っている子どもたちの様子（上記写真）

II 妊婦になってみよう



8名の妊婦体験ジャケットをつける男子大学生と
見守る女子大学生（上記写真）

III うまれる体験をしてみよう



模擬胎児体験型の教育モデル（上記写真）
巨大胎盤をつけ卵膜から産まれる様子

IV 心音を聞いてみよう



胎児心拍用のドップラーを応用し自分たちの
心臓音を聴いている子どもの様子（上記写真）

V 生命の神秘、不思議DVD鑑賞



命が宿る瞬間から誕生までをドラマチックに紹介した番組の
DVDを放映している様子（上記写真）

VI あかちゃんのお世話をしてみよう



リアルな新生児人形の赤ちゃんのおむつ
交換を親子で体験している様子（上記写真）

VII 命の樹をつくろう



何もなかった木の枝に「命」についてのコメントをたくさんいただき命の実（コメント）がたくさん掲載された。



記入して下さったラベルは75枚
字がまだ書けない子どもから祖父母世代の方までが
コメントしてくださいました（上記写真）

表 4. 命の樹のコメント一部紹介

命の樹のラベルのコメント一部紹介

- 命を授かることの凄さがわかった。
- 赤ちゃん大好き。
- 赤ちゃんかわいい。
- 妊婦体験や赤ちゃん体験など貴重な体験ができた。
- おなかがおもかった。(妊婦体験)
- 赤ちゃんが産まれたら習ったことをきちんとやろうと思った。
- 妊婦さんの大変さがわかった。
- 3か月の赤ちゃんは小さくてびっくりした。
- 産まれる体験が大変だった。
- オムツの変え方があることをした。
- 赤ちゃん重かった。
- お母さんはすごい。など



6) ⑤子どもたちとふれあおう

H28年8月9日

参加者：高校生 11人

サポート学生：1名、指導教員：1名

こども園あつぷるにて高校生と園児が交流を行う際に、大学生がチューターとして参加した。



5. 成果と課題

本プロジェクトを実施し、若者が同世代のピアサポートのもと将来のライフプランに関心を持つことができることを目的に、5事業の展開を行った。その結果、担当大学生延べ42名、協力卒業生延べ2名、指導教員5名、参加した大学生61名、高校生477名、中学生616名、紅葉賀祭外部参加者484名であり、総数1203名がこのプロジェクトに参加もしくは関わった。

今回のような、若者をはじめ多くの方がライフプランを考えるための有用なプロジェクトを継続し、普及することが今後の課題である。

6. 提言

若者たちが自らの命を大切に思い、次世代を育む身体のもつ神秘を理解し、子育てに関心を持つためには、同年代の若者たちと語り合うことは重要であるが、世代間を超えた人とのかわりがより具体的なライフプランを考える上で役立つことが理解できた。

謝辞

本プロジェクトを行なうにあたり、ご協力いただきました参加者様、関係者ならびに、大学生の皆様には深く御礼申し上げます。

***滋賀県少子化対策大学生プロジェクトは滋賀県の助成を受けて実施したものです。**

参考文献

- 1) 国民衛生の動向・厚生指標第63巻第9号；一般財団法人厚生労働統計協会、奥村印刷株式会社，東京。Page 11, 15, 20 (2016. 08)
- 2) 厚生労働省；少子化対策推進基本方針
http://www1.mhlw.go.jp/topics/syousika/tp0816-2_18.html。(2017. 02. 23)
- 3) 松田 茂樹；父親の育児の現状と支援のありかた 求められる少子化対策の拡充 結婚、出産、育児しやすい国を目指して．母性衛生 (0388-1512)57 巻 3 号 Page79(2016. 09)
- 4) 少子化社会の子育て力豊かな子育てネットワーク社会をめざして—第1般第1印刷；高野 良子．学文社，東京。Page 2—22. (2013. 04. 20)

報 告

本学の養護教諭課程における小児看護実習の新たな取り組み

内藤 紀代子*・平松 恵子**・村西 美恵子***
・溝口 孝子****

現在、滋賀県下において養護教諭を養成している大学は3校ある。教育学部での養成を行っているのは本学のみであり、他校は看護学部や看護学科の中での養成を行っている。

本学のカリキュラムの特徴は、教育に関する科目や子どもに関する授業を充実させている。しかし、看護大学のように看護の知識・技術の習得に多くの時間をかけ、看護臨床実習にて展開することはカリキュラム上困難である。そこで今回、養護教諭に必要な看護力を強化する目的で、従来の看護臨床実習に加え、小児看護と医療的ケアを中心とした、小児医療センターと養護学校での看護や支援を学習する小児看護実習を試みた。その取り組みについて紹介する。

【キーワード：養護教諭、看護臨床実習、小児看護実習、小児保健医療センター、養護学校】

1. 本学の養護教諭免許課程

本学において養護教諭免許を取得するためには、教職に関する科目(27)単位以上、養護に関する科目(35)単位以上、養護または教職に関する科目(7)単位、教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目(9)単位としている。

看護臨床実習は養護に関する科目に位置づけられており必修科目である。養護教諭免許取得にあたり必要な実習は養護実習3週間と看護臨床実習2週間の2つである。

そして、今年度から学校における看護力をさらに強化するため、小児医療センターと養護学校での看護を連動して学習できる小児看護実習を試みた(図.1)

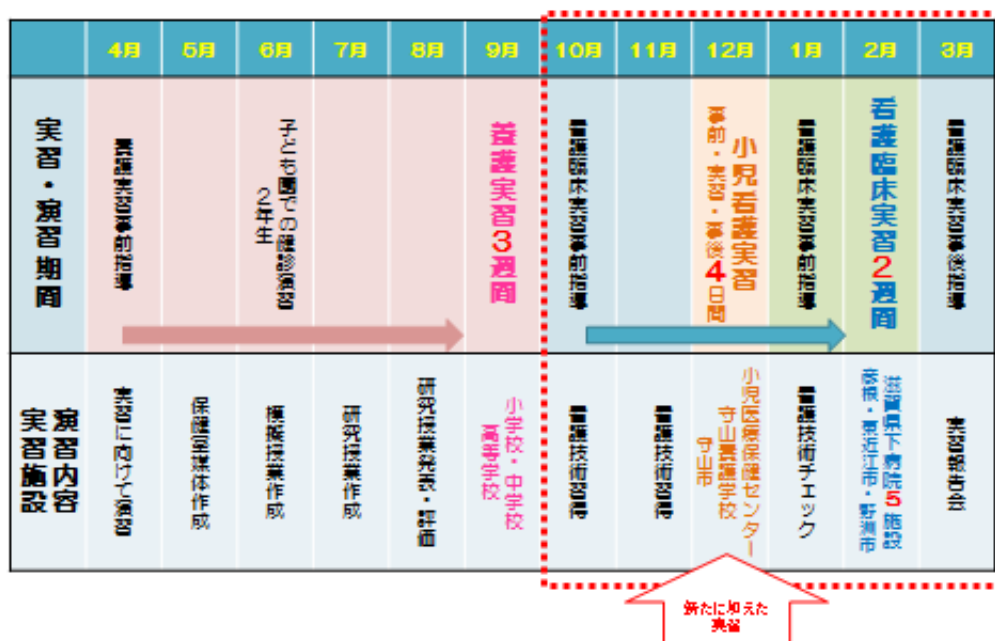


図1. 養護教諭養成課程実習年間計画表

* 教育福祉学部 子ども学科 講師
** 教育福祉学部 子ども学科 教授
*** 教育福祉学部 子ども学科 非常勤講師
**** 短期大学部 ライフデザイン学科 講師

2. 小児看護実習の実際

平成28年度看護臨床実習参加学生数:12名(本学3回生)
小児看護実習の目的

- ①養護教諭が対象とする小児を中心とした看護の実際を臨床で学習する。
- ②医療的ケアを必要とする養護学校での看護を学習し、学校看護実践力を向上させる。
- ③県内で小児科専門病院と養護学校が連動している医療体系を理解し連携について学習する。

1) 実習施設の滋賀県立小児保健医療センターの概要



小児総合医療機関であり、100床9診療科を有し、難治・慢性疾患を対象とした医療・保健・療育・福祉サービスの提供を行っている。主な診療科は小児神経学が主要な専門分野となっておりアレルギー、肥満、内分泌・代謝、心臓、腎、血液・リウマチなどの専門外来がある。発達障害は、小児科（小児神経）で対応困難な例は、児童精神科医が担当するこころの診療科の対応も行っている。整形外科は、先天性股関節脱臼や骨系統疾患など先天性の整形外科疾患や、ペルテス病等の治療で多くの実績があり、リハビリテーション科は、脳性麻痺を中心とした理学・作業療法を早期から積極的に行っている。全国からも治療を求めて患児が受診する。

このような役割を持つ実習施設での看護臨床実習は養護教諭として必要な知識を拡大させ、学校での看護力の向上に結び付くと考える。

2) 平成28年12月15日

滋賀県立小児保健医療センターでの実習

- ①看護部長から施設の概要と小児保健医療センターでの看護の特徴などの講話
- ②病棟での患児の様子と養護学校への登校の様子を見学
- ③病院の各診療科・外来の説明と見学
- ④病棟での患児の処置、ケアの見学（清拭、保清の援助、体位交換、喀痰吸引、人工呼吸器の管理、タッピング、ピンニングのケア、松葉杖、補助器具の援助など）
- ⑤ 院内感染に関するレクチャー



最初は、闘病中の子どもに、どのように声をかければよいのかわからなかった本学の学生も、しばらくするとコミュニケーションがとれるようになった（左写真）。



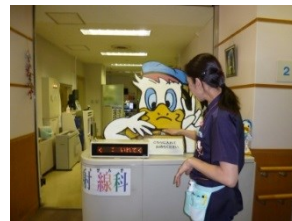
子どもであっても治療や看護を行う際、説明と同意を必要とする。そのために必要なプレパレーションの実際を学習した。

その一例パッチタネルによる

説明と子どもの治療の参加を促す補助具（左写真）

小児病院特有の環境の工夫

検査や手術に対して恐怖心を増大させないために、壁や機材にイラストがペイントされている院内の空間を見学した（下記写真）



レントゲン室の受付と内部



手術室前室の壁画の様子

3) 滋賀県立守山養護学校の概要

小児保健医療センターに入院している児童生徒が治療を受けながら教育を受けることができる学校で小・中学校の通常学級に対応する学年がある。



また、それぞれの学部ごとに他の障害のある児童生徒のための学級が設置されている。個々の生徒に応じたカリキュラムに基づいた学習が行われており前籍校とも緊密な連携を図っている。退院後は前籍校に戻ることが前提となっている。入院中の児童生徒は何かあればすぐに病院との連携のもと対応が取られるシステムになっている。いち早く児童生徒の変化に気づくための養護教諭の観察・アセスメント力は非常に高く重要となる。

4) 平成 28 年 12 月 22 日

滋賀県立守山養護学校での実習

- ①守山養護学校の概要の説明
- ②在学児童、生徒の状況
- ③病院からの登校の様子を見学（下記写真）
病院と養護学校をつなぐ「ほほえみの橋」を松葉杖や歩行器、ストレッチャーにて登校している。安全や看護の必要を学習できた。
- ④守山養護学校の内部の見学（下記写真）
- ⑤授業風景を見学
- ⑥養護学校の養護教諭から養護学校での保健活動の実際について講話



学内の様子を見学



入院中の目標と学校生活が連動していることがわかる掲示物



5) 学生の学び（実習記録の抜粋）

- ①滋賀県立小児医療センターでの実習の学び
 - ・子ども達の現状やケアの仕方が理解できた。特に、専門的なイリザロフや吸引に対する不安が軽減した。
 - ・小児看護には、家族支援や兄弟の支援も含まれていることが理解できた。
 - ・プレパレーションを使用することで、子どもの心理的混乱を緩和し情緒表現の機会を与えることを大切

にされていることが理解できた。

- ・子どもが地域に戻ることができる環境をつくることは、学校と医療の連携が前提であり、そのために養護教諭は重要な存在であると理解できた。
- ・子どもの権利を守りながらも安全面に配慮を行っていることを理解できた。
- ・手術や治療を受ける子どもの、声や思いを聴いて一緒に考え、子ども自身が主体的に関わっているという思いを感じられるように関わっていくことが重要だと理解できた。
- ・介護する家族のためにレスパイトというショートステイの制度を設け、心身のストレスを緩和させる取り組みを理解できた。

②滋賀県立守山養護学校での実習の学び

- ・病気の子どもの教育については「特別扱い」ではなく「特別な支援」が必要であり、「できないこと」ではなく「できること」を見て「どうすればできるのか」を考えていくことだとわかった。
- ・子どもたちはリハビリや治療を終えてから登校しており、あくまで医療が優先に行われていることが理解できた。
- ・子どもたちは学校という場所が好きで、毎日楽しそうに通っている。学校は、医療によって制限されている日常生活の中で「自分らしさ」を出せる場でもあり、同世代の子どもや先生との関わりを通して人間関係の築き方を身につけられるように、心の成育のために必要な場所だと強く感じた。
- ・施設見学の際、掲示物に「ストレスを感じること」、「入院で辛かったこと」、「リハビリの意味を考えてみよう」など病気に対して、子どもたちが自分の思いを文字で表現していた。そのことにより、同じような境遇にある子どもたちと気持ちを共有し、一人で闘病しているのではないことを実感し闘病意欲になるように工夫されていた。

6) 今回の実習の取り組みと今後について

今回、滋賀県下の2つの施設のご協力のもと、養護教諭に焦点化した看護を重点的に小児看護実習において学ぶことができたと考える。今後は、学生が看護技術を実践できる場や地域連携を行えるよう保健所や福祉施設などの実習開拓も検討していきたい。

そしてこれからも、本学の特徴を活かした「教育力」と「看護力」を持ち合わせた養護教諭の育成に励んでいきたいと考える。

茶道を活用した地域貢献の実践について

片山 弘紀*

びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部では、滋賀文化短期大学時代から、茶道サークルの活動があり、主に学園祭で茶会を通じて地域活動を行っている。そして、2015年度より、地域の高齢者施設などに活動範囲を広げ、そこで茶会を実施することで、地域貢献の機会をつくっている。

〔キーワード：茶道，高齢者施設，ボランティア活動〕

1. はじめに

びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部では、滋賀文化短期大学時代から、茶道サークルが続いている。

ただ、慢性的な部員不足であるため、地域に向けたサークル活動は学園祭における茶会に限られていた。また、その学園祭においての活動でさえ、数年前まではままならないものであった。しかし、2015年度より、特に介護福祉士養成コースの学生が多数、所属することになり、学生たちが実習などで高齢者施設と関わりをもっていたこともあり、地域にある施設にむけて出前の茶会を実施する機会をえた。

2. 特別養護老人ホームでの活動

2015年度の初回の訪問先は介護福祉士養成コースの学生が実習でお世話になった特別養護老人ホーム カルナハウスであった。施設では、テーブルや毛氈、湯、菓子、抹茶などが用意され、こちらからは、道具一式を持参した。

(写真1)



写真1 持参した道具一式

当日は入れ代わり立ち代わり、20名程度の利用者が参加をした。学生は茶を点てたり、利用者と会話をしたり1時間程度ではあったが終始、和やかな雰囲気であった。ある利用者は昔、茶道をやっていたこともあり、菓子の食べ方などを他の参加者に説明をされていて、とても生き生きとされていた。(写真2)



写真2 お点前の披露

この施設では行事で時々、茶会を催すことがあったことや、学生が見知った利用者がいたことで、順調に茶会を実施することができた。最後に参加者や施設のスタッフから、「昔を思い出した」、「すっきりした」、「またきてほしい」など感想をもらい、学生の意欲の向上にも繋がった。(写真3、4)



写真3 参加者への説明



写真4 全体の様子

3. 方法

2016年度は、昨年度の経験もあったため、年度初めから地域に出向いた茶会を実施しようと計画を立てた。学生の一人が、5月の訪問介護実習先である東近江市社会福祉協議会ハートピアのデイサービスで茶会を行ったことがきっかけとなり、6月に出前の茶会を1時間程度、実施することになった。2016年度からは、中国の留学生が1名サークルに入ったことで、利用者の話題が中国の話となり、「どこからきたの?」、「私、中国にいったことがあるの」など会話が弾み、交流が行われた。こちらの施設でもカルナハウスと同様に施設の行事として茶会があったため、順調に実施することができた。

そして、参加者も満足されたようで、また来て欲しいといった感想をもらった。

4. 希望が丘もみじ祭りでの活動

11月には、滋賀県文化振興事業団の事務局より、滋賀県希望が丘文化公園のもみじ祭りでの茶会のサポートの依頼がきた。ここでは、もみじ祭りにきた一般客が対象で、希望が丘のスタッフとともに公園内で野点を行った。

当日は5歳から80歳と年齢層も広く、無料ということもあり、合計100名ほどの参加者があった。5歳の子どもは、「苦い」といって残していたが、高齢者は「久々に飲んだ」といって喜ばれていた。

6月にいた留学生は9月で帰国したが、新しい中国の留学生が2名、10月よりサークルに入り、ともに活動をしたことで日本文化に興味をもったようであった。

留学生にとって、短い期間ではあるが、サークル活動を通じて日本文化を知るよい機会になっていると考える。

5. まとめ

2015年度から、地域に出向いた茶会を開始したが、学生にとっては、学園祭以外に練習の成果を発表できる場となっているとともに、異なる世代の人たちとの交流を通じて地域貢献ができたのではないかと考える。また留学生にとっては国際交流のよい機会になったと考える。

今後は、対象を子どもにも広げ、地域のこども園や幼稚園、保育園などにも活動していければと考えている。

熊本地震災害支援 ～熊本の子どもたちへ励まし絵手紙制作～

杉本 栄子*

本報告は、熊本地震の災害ボランティアを目的とした取り組みである。テレビや新聞で熊本地震の悲惨な様子を知った学生たちが、実際の現場には行けないが、「何かの形で支援したい。」「自分たちに出来ることは何かないか。」など話し合った。

保育のことを学ぶ『保育原理総論』の授業の中で、熊本の子どもたちのことが心配になった学生たちが絵手紙に初挑戦し、子どもたちを励まし心の交流をはかることとした。学生たちが一枚一枚心を込めて描いた絵手紙は、ぬくもりがあり熊本の子どもたちの心を解きほぐし明るく前を向いて生活してくれることを信じている。

[キーワード：災害支援、熊本の子どもたちへ、絵手紙プレゼント]

1. はじめに

本学2回生で、将来保育士・幼稚園教諭を目指す学生が、『保育原理総論』を受講している。この授業では保育・幼児教育の根幹をなす理念・原理を学び、保育の専門職として家庭・地域を含めた視点を持ち子ども一人ひとりの発達を理解し、保育活動をどのように展開させていくのかについて学んでいる。

本学では、熊本地震の災害ボランティアについて動きが出てきた。このような中で講義中、ふとある学生が「熊本の子どもたちは、保育園に通っているのかなあ?」「どうしているのかなあ?」という声をあげた。どのような形で支援をするのか、私たちにできることから始めることとした。

そこで、学生たちと色々話し合った結果、絵手紙を書いて励ますことに取り組んだ。

2. 支援内容

絵手紙は、絵のある手紙で、相手を思い浮かべながら、絵をかき、ひとこと言葉を添えるものである。絵手紙をプレゼントすることにより、子どもたちが元気になってくれればと考えた。

そこで、何を描こうかと話し合ったところ、熊本の特産物である、れんこん、さつまいも、なす、すいかはどうだろう。また、熊本県のPRキャラクター“くまもん”もいいなあ。福を呼ぶふくろうもいいなあと、話が弾み、それぞれ描くものを持参して、いよいよ制作に取り掛かった。

全員初体験ということで、1枚目は全員ふくろうの見本を見ながら描いた。割り箸に墨汁をつけふくろうを描きひとことメッセージを添えたら、顔彩で色をつけ完成させた。「案外簡単に描けた。」「可愛い。」「わあーすてき。」と、学生同士見せ合い歓声があがった。2枚目は持参したものをそれぞれ描き始めた。

3. 制作を終えた学生の意見や感想

○絵手紙体験について

- ・初体験で緊張したが、なかなかの出来栄で満足している。
- ・喜んでくれると、嬉しい。
- ・普通にペンや筆で描くやり方ではなく竹ペンを使ったので思っている以上に描くことが難しかった。
- ・色の付け方は、初体験で風情のあるつけ方ができて良かった。
- ・下書きなしの一発勝負なので描き始めるまでに時間がかかったが描き始めると楽しく描けた。
- ・言葉の選択が難しく、緊張したが、絵で気持ちが伝わるから良いと思った。
- ・自分が思っているのとは違う色でぬってしまった所もあったが、そこもいい感じに仕上がって良かった。
- ・絵手紙は、普通に絵がうまいという見方ではなく、味があるという感じでぬくもりを感じた。
- ・色の付け方が初めてだったがこういう技法もあるのだと思った。

- ・“へたでいい”と言われたが、よけい下手に描けないと思った。でも、いざ描いてみると勢いよく描けた。
- ・相手に短い言葉で書く楽しさを味わった。
- ・絵手紙制作は、気持ちが大切であることがわかった。
- ・描いて楽しい、もらって嬉しい絵手紙をまた、描きたいと思った。
- ・割り箸で書くのは驚きであり、難しいが、色付けが楽しかった。
- ・楽しい経験ができ、今後、祖父母に送ろうと思った。
- ・絵手紙用の絵の具…顔彩…があることを初めて知った

○熊本の子どもたちへ贈る絵手紙について

- ・熊本へは直接行けないことは心苦しいが、絵手紙で少しでも思いを伝えることができればなあと思った。
- ・子どもたちの顔を思い浮かべながら描くことができた。
- ・今なお続く地震や壊れた家、道路が頭に浮かび、熊本の人を想う気持ちが芽生えた。
- ・味のある絵手紙が完成し、熊本を応援できて嬉しい。
- ・この絵手紙を通して、私たちの想いが届けば良いと思った。
- ・なかなかうまく書けなかったが、気持ちが伝われば嬉しい。
- ・この絵手紙を見て元気になってほしいと思った。
- ・絵手紙に込めた気持ちが届くといいなあ。
- ・描きながら改めて復旧の支援ができたらいいいなあ。
- ・笑顔になってくれたら嬉しいなあ。
- ・気持ちを込めて描いたので喜んでもらえると嬉しい。
- ・熊本にエールを送ることができたので良かった。

4. 絵手紙に書かれた愛の一言メッセージ

- ・みまもっているよ。
- ・だいじょうぶ。
- ・ひとりじゃないよ。だいじょうぶ。
- ・とおくても、みているよ。
- ・いつも いっしょ。
- ・みんな おうえんしているよ。
- ・すいか いっしょに たべよう。
- ・がんばろう！
- ・わらうかどには ふくきたる。
- ・ふくろうが ふくをもってくるよ。
- ・くまもとを げんきに！
- ・えがおが いちばん。
- ・むりせずひとやすみ。
- ・まあるい えがお。
- ・いっしょに がんばろうね。

- ・えがおって いいなあ。
- ・みんなで ちからを あわせよう。
- ・わらって。
- ・みんなで てをつなごう。
- ・ひとつをわけあう たいせつさ。

5. 考察

普段の授業より活動的な学生や一生懸命に取り組む学生の姿に、相手を想う気持ちはこのようにして出来あがるのであると感じた。絵手紙の良さは、絵のある手紙で身の回りに起きた感動や自分の感情を素直に絵と言葉に託して相手に伝えることができる。描きたい気持ちがあれば誰でもいつでも描ける。心を込めて描いたものは、見る人の心を動かすことでしょう。日々の普段着の絵であり書でもある。描いて嬉しい。もらって嬉しい。手書きというものは個性があふれる、記録に残る、思いが伝わる、大切な文化のひとつと考える。

子どもたちはどんな気持ちで読んでくれるのだろうか。私たちの気持ちが伝わるのかワクワク、ドキドキしながら心に残る絵手紙に仕上がった。

最近では、直接話をしないでメールで済ませる学生、葉書や手紙を書いたことのない学生も多い中、38名の学生が思い思いに心を込めて描きあげた絵手紙が熊本の子どもたちの心を解きほぐし明るく元気に過ごしてくれれば有り難く幸いである。

早速お礼の連絡や手紙が、熊本市くすの実保育園から届いた。思いがけない絵手紙のプレゼントに子どもたちが大喜びしたことや保育園の玄関や壁面に貼って保護者にも見ていただいた、とのことであった。学生たちにその旨を伝えたところ、学生たちの満足そうな笑顔が見られ、達成感を味わうことができた。





3. 事業報告

1. 幼稚園教諭免許取得特例講座

実施科目	担当者	日時	場所	受講者数
教育課程論（特例）	川副 知佐	6月18日(土) 19日(日)	2207	51名
幼児理解論（特例）	杉本 栄子	6月25日(土) 26日(日)	2202 1107 2207	51名
教育行政・制度論（特例）	鈴木 敦史 榎本 恵理 浅田 昇平	11月19日(土) 20日(日) 26日(土) 27日(日)	1107	51名

地域別			
東近江市	19	大津市	1
彦根市	8	長浜市	1
近江八幡市	5	野洲市	1
栗東市	3	甲良町	1
湖南市	2	多賀町	1
米原市	2	豊郷町	1
甲賀市	2	愛荘町	1
竜王町	2	日野町	1

年齢別	
～29	6
30～39	31
40～49	9
50～59	4
60～	1

性別	
男性	4
女性	47

2. 保育士資格取得特例講座

実施科目	担当者	日時	場所	受講者数
保健と食と栄養	内藤 紀代子 赤田 みゆき	6月18日(土) 19日(日) 25日(土) 26日(日)	1311	16名
福祉と養護	烏野 猛 竹澤 賢樹	11月19日(土) 20日(日) 26日(土) 27日(日)	1311	14名

地域別			
甲賀市	4	大津市	1
東近江市	2	竜王町	1
栗東市	2	彦根市	1
長浜市	2	草津市	1
愛荘町	2	日野町	1
高島市	1	その他	1

年齢別	
～29	3
30～39	2
40～49	13
50～59	1
60～	0

性別	
男性	1
女性	18

3. 教員免許状更新講習

実施科目	担当者	日時	場所	受講者数
「教育の最新事情」 平 28-30395-100371 号	鈴木 敦史 竹澤 賢樹 藤井 茂樹	8 月 8 日(月)	2207 1107	233 名
「学校・家庭並びに地域の連携及び協働」 平 28-30395-300838 号	高木 和久	8 月 9 日(火)	1107	120 名
「国際理解及び異文化理解・中国と日本」 平 28-30395-300839 号	パソ ジュイン	8 月 9 日(火)	2207	112 名
「大規模災害時における災害・避難弱者への 取り組みと園・学校」 平 28-30395-503660 号"	烏野 猛	8 月 10 日(水)	1107	118 名
「初等・中等教育の実践力養成 運動・スポーツ指導」 幼児教育 平 28-30395-503661 号	奥田 援史 奥田 愛子	8 月 10 日(水)	2207	76 名
「初等・中等教育の実践力養成 運動・スポーツ指導」 初等・中等教育 平 28-30395-503661 号	竹内 早耶香 高木 和久 奥田 援史	8 月 10 日(水)	2102	39 名
「特別支援教育の課題」 平 28-30395-503662 号	藤井 茂樹 黒田 孝 後藤 真吾	8 月 11 日(木)	1107	120 名
「学校保健と ストレスマネジメントとライフスキル」 平 28-30395-503663 号	内藤 紀代子 平松 恵子	8 月 11 日(木)	2207	108 名
「スクール カウンセラーに学ぶ現代教育の課題」 平 28-30395-503664 号	吉弘 淳一	8 月 12 日(金)	2207	108 名
「幼児教育の実践力」 平 28-30395-503665 号	杉本 栄子	8 月 12 日(金)	1107	121 名

	勤務先別								年齢別				性別	
	保	幼	こ	小	中	高	特	他	30～ 39	40～ 49	50～ 59	60～	男	女
必	55	39	41	53	14	4	9	19	91	73	68	1	30	204
選必Ⅰ	31	14	19	27	8	2	6	14	49	35	35	1	18	103
選必Ⅱ	24	25	22	26	6	1	2	6	42	38	32	0	11	101
選Ⅰ	36	15	22	19	10	2	4	9	36	44	37	1	12	105
選Ⅱ	21	26	21	1	0	0	0	8	32	26	17	1	3	74
選Ⅲ	1	0	0	26	2	3	5	2	21	7	11	0	14	25
選Ⅳ	30	27	16	21	10	0	6	11	51	39	29	1	20	101
選Ⅴ	29	14	23	24	4	3	3	10	38	34	35	1	9	101
選Ⅵ	12	15	17	35	12	2	7	11	33	43	32	0	21	90
選Ⅶ	45	28	24	10	1	0	2	11	57	35	28	1	7	114
計	284	203	205	242	67	17	44	101	450	374	324	7	145	1018

保育園 幼稚園 こども園 小学校 中学校 高等学校 特別支援学校 その他

4. 教員免許法認定講習

実施科目	担当者	日時	場所	受講者数
聴覚障害者の心理・生理・病理	原田 公人	8月5日(金) 6日(土)	1107	45名
知的障害者教育課程・指導法	武富 博文	8月18日(木) 19日(金)	1107	46名
視覚障害者の心理・生理・病理	田中 良広	8月20日(土) 21日(日)	1107	40名
肢体不自由者の心理・生理・病理	當島 茂登	8月27日(土) 28日(日)	1107	73名
重複障害者の心理・生理・病理	松下 彰宏	12月24日(土) 25日(日)	1107	92名
知的障害者の心理・生理・病理	黒田 吉孝	12月26日(月) 27日(火)	1107	68名
病弱者の心理・生理・病理	滝川 匡芳	1月7日(土) 8日(日)	1107	88名

	地域別、勤務先別						年齢別		受講科目別	
	幼	小	中	高	特	他	～29	30～39	7科目	13
滋賀県	10	60	24	4	65	4	30～39	47	6科目	3
京都府		1			3		40～49	52	5科目	8
大阪府				1	2		50～59	43	4科目	17
兵庫県		1			4		60～	1	3科目	26
奈良県					1		計	179	2科目	45
和歌山県		1					性別		1科目	67
徳島県					1				計	179
香川県					1		男性	57		
愛知県			1	1			女性	122		
岐阜県					1		計	179		
北海道					1					
計	10	63	25	6	79	4				

幼稚園 小学校 中学校 高等学校 特別支援学校 その他

5. 公開講座

実施科目	担当者	日時	場所	受講者数
「新しい能力」の育成に焦点化した教材の開発	東田充弘	閉講		0名
びわこ学院子育てサロン	栗山恒子	閉講		0名
女性の心と体の健康 ～いきいき・若々しくあるために～	平松恵子 内藤紀代子	10月29日(土) 10:30～12:00"	1107 1117	24名
いつまでも生き生きと	新屋久幸	11月12日(土) 10:00～12:00"	2102	8名
ポルトガル語入門講座 ー地域でコミュニケーションー	竹屋久美子	11月19日(土) 26日(土) 各日とも 14:00～17:00"	3105	17名
パソコン CAD 初級講座	中西健治	12月10日(土) 17日(土) 各日とも 13:00～16:00"	1215	30名

地域別					
東近江市	八日市	25	蒲生郡	大津市	1
	永源寺	0		竜王町	1
	五個荘	5		近江八幡市	1
	愛東	1		草津市	1
	湖東	2	その他		1
	蒲生	7			
	能登川	7			

年齢別	
～29	3
30～39	2
40～49	13
50～59	1
60～	0

性別	
男性	1
女性	18

**びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部
外部連携研究センター年報 第3号**

2017年3月 発行

編集・発行

びわこ学院大学・びわこ学院大学短期大学部 外部連携研究センター

〒527-8533 滋賀県東近江市布施町29番地

TEL：0748-22-3388（代）

FAX：0748-23-7202（代）

H P：<http://www.newton.ac.jp/bgu/>